258. 2-101
1200501346616

×
複写

成田山事業年報

昭和十六年度（自昭和十六年四月一日至同十七年三月卅一日）

始

目次

寫眞
例言
一 總說
挨拶……一頁
……成田山貫首　荒木　照定
成田山事業概要……七
成田山六和會に就て……九
……三橋　金太郎
成田山六和會規則……一〇
二 事業狀況
（各事業に關する細部の目次は各事業の始めに掲ぐ）
成田中學校……二頁
成田高等女學校……三九
成田幼稚園……六一
成田學園……七五
成田圖書館……九一
新更會……一〇七

所在地並ニ電話番號

成田中學校（千葉縣印旛郡成田町成田二十七番地）
成田高等女學校（同町成田十五番地）
成田圖書館（同町成田三百十二番地）
成田幼稚園（同町成田六四七番地）
成田學園（同町成田四百二番地）
新更會（同町成田一番地）

※左記新勝寺電話番號ニテ接續（電話成田）
二番
二八番
一〇一番
一〇二番

（電話成田）
五九番

（同）
一〇三番

（同）
二三四番

挨拶……一頁
……成田山貫首　荒木　照定
成田山事業概要……七
成田山六和會に就て……九
……三橋　金太郎
成田山六和會規則……一〇
成田高等女學校……二九
成田幼稚園……六一
成田學園……七五
成田圖書館……九一
新更會……一〇七

成田圖書館（同町成田）三百十二番地　一〇一番
一〇二番
成田幼稚園（同町成田）六四七番地　（電話成田）五九番
成田學園（同町成田）四百二番地　（同）一〇三番
新更會（同町成田）一番地　（同）二三四番

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

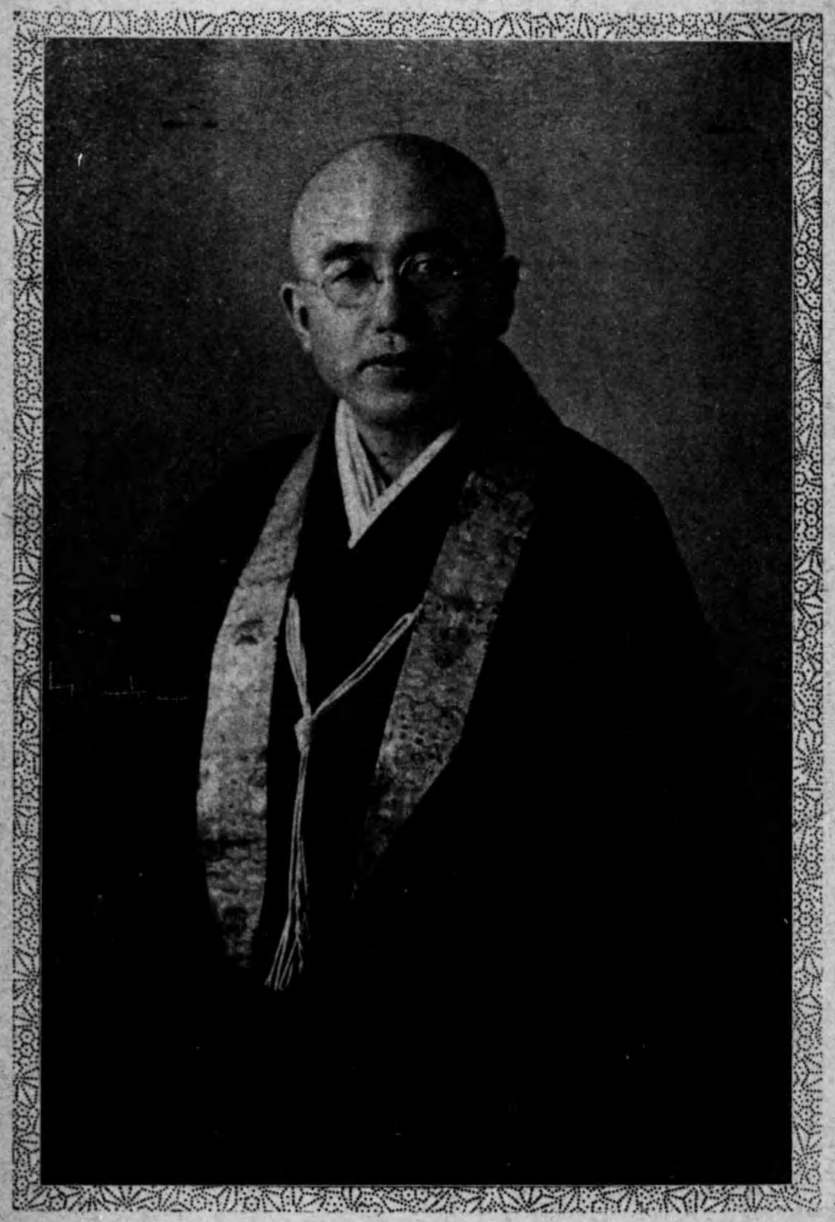
朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各〻其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑〻東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセントス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增强シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

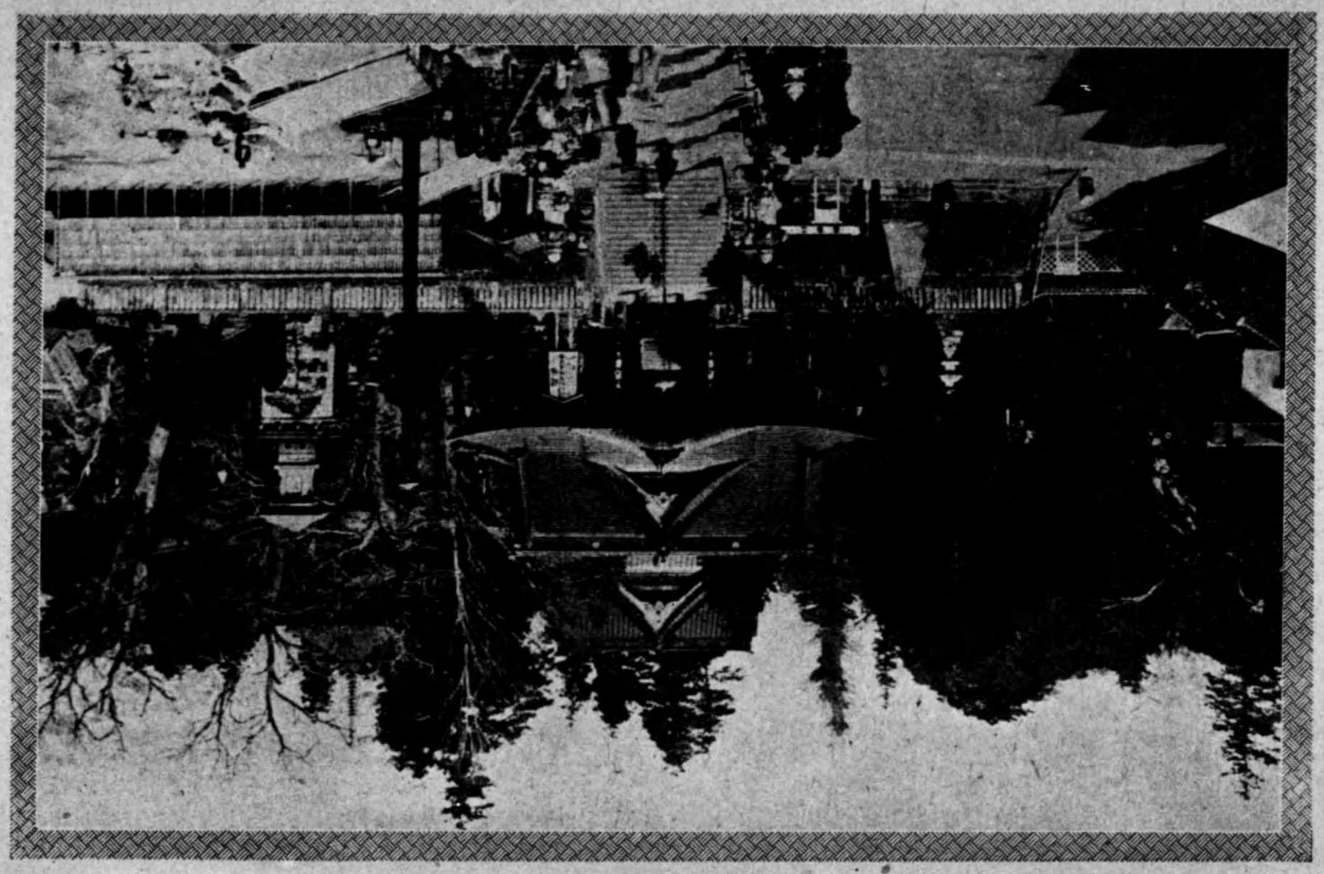
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日



荒木照定猊下



景全山田城

例言

一　本年報は成田山の經營に屬する各事業中に於て、成田山公園を除く以外の教育教化事業たる、成田中學校・成田高等女學校・成田幼稚園・成田學園・成田圖書館・新更會に就いて、昭和十六年度（自昭和十六年四月一日至同十七年三月三十一日）の狀況を記述したものである。

一　本年報は昭和十七年三月末現在調に依つて編纂したものであるが、內、職員並びに生徒等に關する事項は、大體同十七年四月末現在調に依つて記述した。

一　記述は、大體前年の例に則り、總說並びに事業狀況に大別して各事業の概要、當該年度共通事項、各事業の當該年度狀況等を列記した。

一　目次は二樣に之を設けた。卽ち全體的一覽の目次は、其の主題を卷頭に列記し、次に各事業に關する細部の目次は、各事業毎に之を揭げ、而して該目次は各事業を通じて連絡統一を保たしめることにした。

一　更に各事業を總括し、其の狀況を一目瞭然たらしむる爲め、各事業の始めに昭和十六年度狀況一覽表を添附した。

一　記述の資料は勿論各事業主任者より報告されたものに據つたのであるが、編輯の都合上編者に於て若干の取捨、選擇又は增補した箇所もあり、又成田山史を參考とした處も多いのである。

成田圖書館寄贈本

258 2
101

一

總

說

新潟本

挨拶

成田山貫首　荒木照定

一國國運の隆昌を圖る爲めには、學術・法律・政治・經濟・產業・國防等各般に亙る充實改良に俟たざるべからざることは、今更多言を要しないことであるが、其の何れの分野に於ても根幹は人の問題であり、國民素質の向上といふことに歸着する。而して此の國民素質の向上は結局するところ眞の教育の普及徹底といふことになる。

眞の教育は一面人類社會の普遍原理に立脚すると共に、他面各國家存立の理想を目標とするものである。從つて我國教育の指針は、肇國の精神を體得せしめ、祖國日本の臣民としての根本態度を培ふにある。教育に關する勅語の首に、皇祖皇宗肇國の宏遠、樹德の深厚と、臣民の忠孝、億兆一心を

說き給ひ、此の國體の精華を以て教育の淵源なりと仰せ給へるは、實に此の教育の根本義を最も明かに宣文し給へるものである。されば明治以來時の政府が此の聖旨を奉體し、不斷の努力を以てこれが充實徹底に孜めてゐるのはこれ全く國民の教育が國家存亡の岐れるところであり、國家の歷史的生命を永遠ならしめる道が教育を措てこれなきことを示すものである。

然しながら此の教育の大業は、もとより國民の充分なる理解と協力に俟たなければ到底其の眞の徹底普及を期し得ないのであつて、國民の自覺の高まるにつれて、世界何れの國に於ても、先覺者は率先私學を設けて其の不足を補ひ、其の普及に協力してゐるのである。當山亦深くここに鑑みるところあり、明治初年以來淨財を淨所に投じて、地方子弟を中心とする各層各種の教育教化施設を爲し、逐年其の充實改善に微力を注ぎ、現在、中學校・高等女學校・圖書館・學園・新更會・幼稚園の六事業を經營し、地方文化の開發と

國運の進展とに力めて居る次第である。

今や大東亞戰爭を繞る有史以來未曾有の一大難局に直面し、世界的動亂による國際情勢の倏變に對處して、拔本塞源、東亞諸民族共存共榮の我帝國根本不動の國策は力强く中外に聲明せられ、忠勇將兵は萬里に遠征し、其の赫赫たる戰果は全世界を震撼し、國威八紘に振ふは、洵に昭代の盛事曠古の偉業といふべきである。玆に國内に於ては物心兩面に亙る舊來の陋習混迷は日新に更正打開の道を辿り、大東亞の盟主としての確固たる國民的信念と、一億一心全生活力との綜合による高度國防國家體制の建設せられつつあることは實に慶賀に堪へないところであるが、我々は此の超非常時に於て、如上の信念と活力との綜合によつて銃後の護りを固むると共に、更に次に來るべきものゝ爲めに備へ、これを導きこれを育成するといふ二重の大任務を擔ふものであることを忘れてはならない。此の點に於て當山六事業の使命と責務と

は從來に比して層一層重且つ大であるのである。

當山に於ては、支那事變勃發後間もなく恰も相約したるが如く、昭和十三年、開基一千年を迎へて記念大祭を奉修し　皇恩祖恩の廣大に酬い奉ると共に、當山開山の根本使命たる鎭護國家の法幢を高揚し、時局に對應して强敵の調伏、障碍の排除に、御本尊　王の靈驗の顯著を讃仰せるは實に不思議な緣由であると轉感慨を深めるものである。これと同時に、此の千載　遇の大祭を契機として益々本分を盡して世人の信嚮を喚起し、更に當山諸事業の充實改善に邁進したいと念願するものである。乃ち曩に大祭と前後して新に「六和會」を組織し、中學校乃至幼稚園諸教育事業の相互關係連絡に一層の緊密を加へ　彼此和衷協力以て其の各の使命の達成を促進し、眞に報國の實を擧げたいと祈念するものである。更に特筆謹記すべきことは、過る昭和十四年五月二十二日　畏くも　天皇陛下には、全國青少年學徒に對して優渥な

る勅語を賜り、次で一昨昭和十五年輝しき紀元二千六百年の佳節に當り洪深なる大詔を渙發せられ、更に同年十月三十日　教育に關する　勅語渙發五十年記念式典擧行に際して周渥なる　勅語を賜り、內外の重大時局に對應して國民に時艱克服の指標を垂れさせ給ひ、又更に昭和十六年十二月八日、光輝ある帝國の歷史に永遠に記錄さるべき、對米英宣戰の大詔を拜したことで、聖慮深遠廣大實に恐懼感激の至りに堪へない次第である。今や聖戰正に五周年、忠勇將兵大義山の如く、命鴻毛よりも輕くして生還を期せず、陸海空に善謀審計、制機神速、一身萬軍に當り、一機千機に抗し、敵の鐵壁據點殆んど崩潰し、艟艨赤龍相次で覆滅し、興亞聖業の礎碣漸く堅く、旭日四海に輝き、曠古の躍進を遂げ得たことは感謝辭なく、慶祝涯りない次第である。しかし乍ら此の間に在つて、多數の將兵或は敵彈に斃れ、或は瘴癘に襲はれて一死奉公極天護國の衷誓を果し、大東亞建設の礎柱となられたことは實に肝

銘感激の至りであり、甚深哀悼の默禱を捧げる次第である。

熟々惟みるに現下の大事艱を克服し、東亞の新秩序を建設し、其の共榮を確保し、大義を宇内に宣布するは、これ皇國天授の使命にして、將來此の大任を荷ふべき青少年學徒を教養する其の責實に重且つ大なりと謂ふべきである。冀くは各事業關係諸氏、謹んで　聖勅を奉體し、鴻業完遂百戰百勝の修練を重ね、其の國家的信念を鼓舞し、前途に大なる光明を望み乍ら、夙夜黽勉躬行啓導薫化の實を擧げ　以て相倶に　聖恩の萬一に酬い奉らんことを。

今こゝに當山六事業年報新修に際し一言を卷頭に寄す。

昭和十七年五月

成田山事業概要

成田山の事業は、始め中學校・高等女學校・幼稚園・學區圖書館の五事業であつたが、昭和三年六月に至り、新更會が創設され、同十月には公園が生れ、茲に從來の五事業が七事業となつた。

由來成田山は、歴代の貫主進取思想に富み、公共の精神に厚く、一方明王の靈德を四海に光被して、國家の鎭護、人心淨化の宗教的使命に努められて來たと同時に、他方莫大の淨財を公共の爲に投ぜられ、夙に幾多の教育事業並びに社會事業を起し、既に五事業に關しては、大なる實績を擧げてゐるのであるが、更に進んで二事業を加へ、ますますこれが成果を收めつつあるのである。今各事業の概要を示せば次の通りである。

一　成田中學校　本校の前身は舊成田英漢義塾である。明治二十年、前々貫主故三池僧正には、夙に此の地に中等教育機關の設備なきことを頗る遺憾として、英漢義塾なるものを設立したが、明治三十一年時の貫主故三池僧正は其の組織に改善を加へ、英漢義塾を廢し、成田中學校設置を文部大臣に申請して、其の認可を得たのである。

本校の教育方針は、一に教育勅語の聖旨を奉戴し、殊に實踐要目として剛毅・禮讓・報恩・規律を重んじ、且つ勤勉にして勞作を厭はない習慣と、實力の養成とを以て主眼とす。設置以來四十四年、卒業生數千六百十五名に達し、現在生四百五十四名を算してゐる。施設多き中に、特に生徒用圖書室備付の學科綜合檢索カードの完成せしが如きは、他に類例を見ない施設である。

二　成田高等女學校　同校は中學校の設立に對し、女子中等教育機關の必要を痛感された結果、明治四十四年二月前貫首故石川僧正時代に設置されたものである。

教育方針は、教育勅語の聖旨を奉戴し、飽くまでも其の實行を期し、學業を勵み淑德を修め、女子の本分を盡すこと即ち實用的才藝に秀でた良妻賢母たるの人格を完成することを目的としてゐるものである。

如上の趣旨に基き、正科の外、隨意科として手藝・挿花・茶の湯・按摩を課し、體操科に薙刀を加へ、更に弓道部を設置し形式を通じて武士道的精神を體得せしめようと努めてゐる。現在生徒數二百三十六名。

三　成田幼稚園　幼兒保育の教育機關として、明治三十八年設置されたもので、我國では最古のものに屬してゐる。現在

園兒數百七十五名。保育課目は、唱歌・遊戯・手藝・談話・觀察等、年齢に應じて適當にこれに課してゐる。特に保育方面以外、衛生・體育・運動方面には最も注意を拂つてゐる。

四　成田學園　不遇なる少年の教護を目的として、明治十九年五月千葉縣下各宗合同發起の下に、千葉町に創立された千葉感化院の後身である。明治二十一年四月成田山の經營に移管され、其の後四十一年三月千葉町より現地に移轉、成田感化院と改稱、昭和三年三月成田學園と改稱したが、成田山へ移管以來、三池・石川・荒木の三貫首、相踵いで鋭意事業の發展に努められ、以て今日に至つてゐる。現在生十七名入園生三百六名、創立以來五十六年を經過し、斯種の社會事業としては我が國最古のものに屬してゐる。

教育の方針は、教育勅語の聖旨を奉戴し、信仰を中心として、學科の教授並びに訓育に當つてゐるが、其の團欒的、家族的な教育は本園の特徴である。

五　成田圖書館　明治三十四年一月前貫首故石川僧正の設置されたもので、現在圖書數拾貳萬參千八百四十七冊、殊に藏書中佛教雜誌の如きは、明治後半期より蒐集したもので、其の數頗る多く、專門學徒に稗益するところが尠くない。

特殊の施設としては、參籠堂文庫・家庭配本・貸出並びに團體文庫・展覽會・讀書奬勵に關する印刷物等がある。閲覽者は毎日平均百五十一人。

六　新更會　我國は維新以來時勢の推移に伴ひ、國民的思想に動搖を來し、動もすれば其の嚮ふ所を誤らんとするので、現貫首荒木僧正茲に見る所あり、時弊を匡救し、人心の不安を除去して健全なる國民精神を作興せんが爲めに、昭和三年六月創設された成人教育の機關である。

其の施設としては講演會・講習會・夏季大學講座・展覽會其の他一般の成人教育・社會教育を實施してゐるが、更に青少年の教育機關として、修業一箇年の新更學院がある。現在生徒六十名。

七　成田山公園　前貫首故石川僧正在職二十五年記念として大正七年五月起工、前後十一年を費して昭和三年十月現貫首荒木僧正に至つて竣工した。總面積四萬六千九百八十八坪を有する現代的の公園である。

從來當山五事業の名は、廣く世に知られてゐたが、それは主に教育關係の事業であつた。然るに公園は全くこれと趣を異にし、現代の焦燥に、日夜疲勞を感ずる人々の爲めに、家族相携へて此の靈園に悠遊し、以て積日の塵垢を洗ひ、休養慰安をなさしめやうとする目的のもので、社會政策上に於ける一つの施設である。

以上は七事業の概要であるが、現貫首荒木僧正にはよく前貫主の後を繼承し、更に時勢の推移に着眼して新事業を起し各事業に對して多大の努力を注がれてゐる。

成田山六和會に就て

六和會相談役　三橋金太郎

成田山新勝寺が鎭護國家の道場として、天下の名刹であることは、何人も異論なく首肯するところであります。しかし如何に名山大刹であつても、住持に其人を得なければ其の使命の眞の實現は望まれません。幸にも新勝寺は過去一千年間各の時代にそれ〳〵好適な名僧碩德が出られまして、各時代に即應する施設を爲され、かくして今日の隆昌を致したものであります。今私共がよく承知致して居りまする近代の歴史に就て申しましても、常に淨財を淨所に投ぜられて、地方文化の向上と社會福祉の增進とに努められて居ります。中にも教育又は社會事業に就きましては、殊に大なる關心を持たれ範を天下に垂れるの意氣と情熱とを示して居られます。即ち曩に故三池僧正は英漢義塾を興して地方子弟の中等教育機關に充てられ、又社會事業として感化院の經營に協力盡瘁されましたことは今尙ほ記憶に新なところであります。次で故石川僧正は、前記英漢義塾を改めて中學校に昇格し、感化院を名實共に成田山の一手經營に移され、更に高等女學校、幼稚園及び圖書館を設けられて、地方各層の教養機關を整へ、所謂成田山五事業の完成を見るに至つたのでありますが、現貫首貌下には、社會教育の振興改善等の爲めに滿三ヶ年に亘つて歐米各國のそれ等を視察研究致され、御歸朝後、成人教育の必要を認められ「新更會」を新設されまして、逐年其の施設を擴充振興され、茲にこれを先師の御遺業に加へて六大事業を經營されてゐるのであります。申すまでもなく、これ等六事業は何れも皆新勝寺の經營に屬して居りますとはいへ、事業の生立、歴史の關係上、動もすれば個々獨立の觀があり從つて其の間に眞の統制と有機的組織を缺く恐れがないでもなかつたのであります。こゝに深く慮るところがあられまして、貌下には、この度の御門基一千年祭を好機として、新に「六和會」なるものを組織せられ、これ等諸事業の經營萬端を名實共新勝寺の統制下に纒められることになつたのであります。右につきまして左記のやうな規則を制定せられ、これによつて六事業の內容の充實は勿論、相互連絡融和の圓滿なる統制下に各事業それぞれ獨自の使命達成進展を圖られんとするものであります。即ち「六和會」なる會名も貌下御躬ら命名なされたものでありまして、事大小となく其の眞の發達は和を以て最先とするといふ聖德太子の御思召を强調されました次第であります。こゝに我々は新に生れました六和會の名を辱しめず、眞の實を結ぶことに邁進を誓ひまするとともに、六事業關係の諸氏に於かれましても、この御趣旨を體し

て眞に協力一致以て各自の本分を盡されんことを念願やまない次第であります。

成田山六和會規則

第一條　本會ハ成田山新勝寺ノ經營ニ係ル左記六事業ノ統一進展ヲ圖ルヲ以テ目的トス

一、成田中學校　一、成田高等女學校
一、成田圖書館　一、成田幼稚園
一、成田學園　一、新更會

第二條　本會ヲ成田山六和會ト稱ス

第三條　本會ノ事務所ヲ新勝寺ニ置ク

第四條　本會ハ六事業代表者並ニ特別關係者ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、會長　一名
一、副會長　一名
一、相談役　二名
一、委員　五名
一、臨時委員　六名
一、幹事　一名
一、書記　若干名

第六條　役員ノ選任

一、會長ハ成田山貫首之レニ當リ會務ヲ總監ス
一、副會長は成田山執事トシ會長ヲ補佐シ會長不在ナル時ハ其任ニ當ル
一、相談役ハ會長ノ囑託ニヨリ其ノ諮問ニ應ジ會議ニ參加スルモノトス
一、委員ハ成田山檀徒總代人トシ臨時委員ハ六事業代表者ヲ以テ之ニ充テ六事業經營ニ關シ協議ニ與ルモノトス
一、幹事ハ會長之レヲ任命シ會長ノ命ヲ受ケ其ノ事務ヲ處理ス
一、書記ハ會議ニ際シ其ノ事務ヲ掌ル

第七條　本會ハ年二回總會ヲ催シ六事業代表者ヨリ豫算決算並ニ經過報告ヲ聽取スルモノトス

第八條　本會ハ毎月一回例會ヲ開ク

第九條　凡テ重要ナル事項ハ會長之ヲ決ス

二　事業狀況

成田中學校

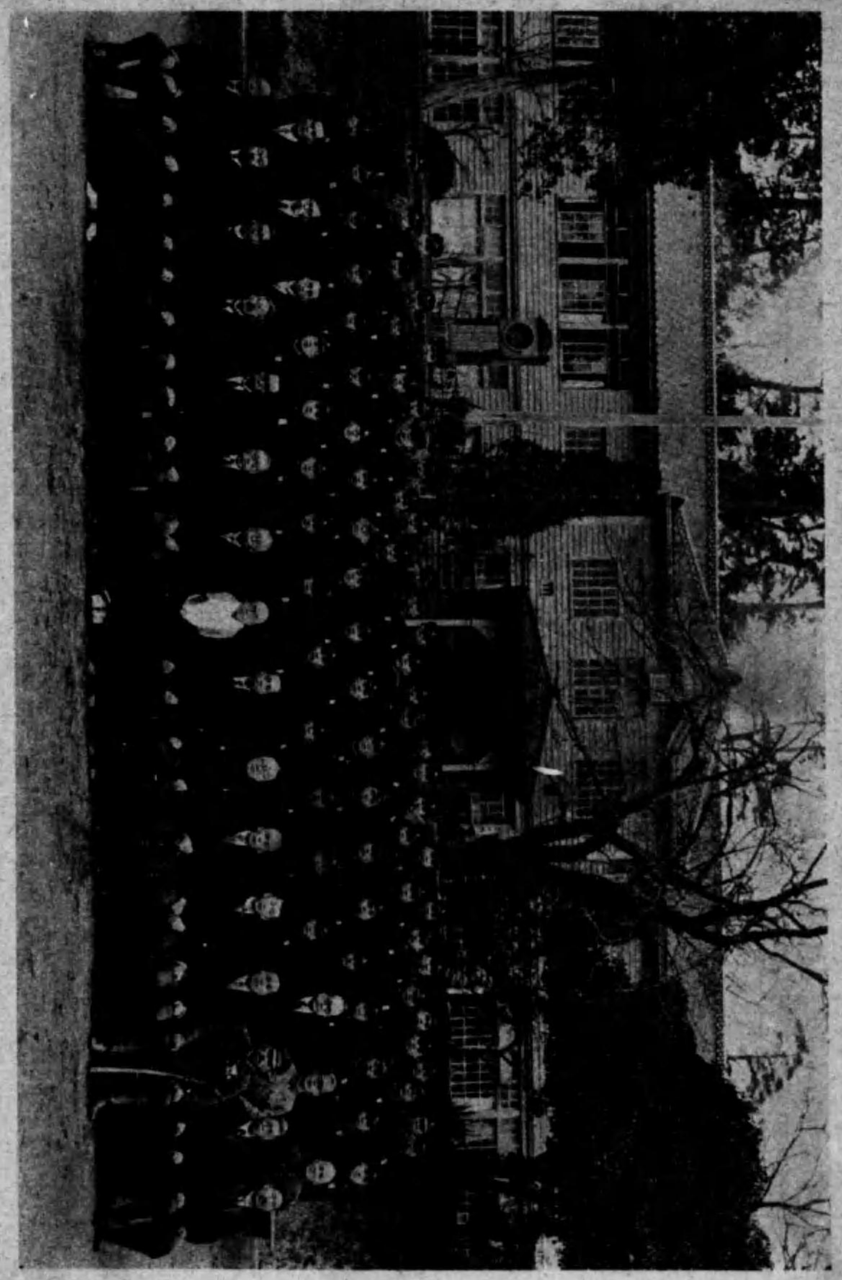
校學中田成

成田中學校校歌

昭和十六年度成田中學校一覽

目次

第壹　位置並びに�革……二頁
一　位置……二
二　沿革……二
第貳　設備並びに施設……二四
一　設備……二四
二　趣旨並びに教育方針……二五
三　校則……二五
四　昭和十六年度行事概要……一九
五　一般的施設……二三
第參　生徒狀況……二五
一　年度別卒業生數……二五
二　本年度（第四十一回）卒業生氏名……二六
三　上級學校入學者調……二六
四　各學年別生徒氏名……二九
五　卒業生並びに生徒郡別表……三五
第四　歷代校主・顧問・校長・主監……三六
第五　職員……三七
第六　經費……三八



第十四回卒業生（昭和十三年）

成田中學校々歌

尾上八郎作歌
小松耕輔作曲

（一）東の海の夜あけて
大八洲岸をとよもす
うねりよる思想の怒濤
ゆめよさめよ成邸の健兒

（二）靈域は不落のとりで
葉牡丹の校旗のもとに
御すがたは降魔の守
つどへつどへ成邸の健兒

（三）勤勉と克己と慈悲と
楯となし劍となして
忠勇と剛毅と素朴
立てよ立てよ成邸の健兒

（四）すさまじき主義のたゝかひ
國のため勝利の冠
おそろしき智識のいくさ
とれよとれよ成邸の健兒

（第十八回卒業生寄贈）

位置

千葉縣印旛郡成田町成田二十七番地、成田山新勝寺境内ノ東部成田山公園櫻山ノ丘腹（電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ヨリ接續）

沿革

本校ハ成田山ノ經營ニ屬スル教育事業ニシテ英漢義塾ヲ前身トスルモノ、其ノ沿革左ノ如シ

英漢義塾時代

明治二十年十月創立ノ前々貫首故三池僧正塾主トナリ、同二十一年一月開校、同二十七年塾主示寂、同年六月前貫主故石川僧正其ノ後ヲ承ケテ塾主トナル、同三十一年廢止、此間塾長更迭四名、卒業生ヲ出スコト九回四十八名、外ニ選科履修生六名

明治三十一年十月設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナリ、同年十一月開校、

生徒狀況

生徒數（四月末現在）				教員	經費
生徒數	四五四			校主 故石川僧正	昭和十六年度決算額 四七、〇七八・四一
年度內入卒者	入學者	八五		職員	二八
	卒業者	七五			
	轉編入	一〇			
年度內卒業者ノ卒業後ノ狀況	上級學校入學者	一二			
	職業從事者	二七			
	其他	三六			

昭和十六年度 成田中學校一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田二十七番地、成田山新勝寺境內ノ東部成田山公園櫻山ノ丘腹（電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ヨリ接續）

沿革

本校ハ成田山ノ經營ニ屬スル教育事業ニシテ英漢義塾ヲ前身トスルモノ、其ノ沿革左ノ如シ

英漢義塾時代

明治二十年十月創立、前々貫首故三池僧正塾主トナリ、同二十一年一月開校、同二十七年塾主示寂、同年六月前貫主故石川僧正其ノ後ヲ承ケテ塾主トナル、同三十一年廢止、此間塾長更迭四名、卒業生ヲ出スコト九回四十八名、外ニ選科履修生六名

成田中學校時代

明治三十一年十月設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナリ、同年十一月開校、明治三十三年徵兵令第十三條ノ特典ヲ受ク、同年校舍新築落成、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナリ、同時ニ名譽校長ニ推戴セラル、創立以來卒業生ヲ出スコト四十一回、校長ノ更迭十五名

設備

校地 三、五〇〇坪、校舍ハ木造二階建（講堂ハ鐵筋コンクリート造）ニシテ普通教室一〇・特別教室八・講堂・校長室・職員室・事務室其他ノ教室アリ、之ニ附屬建物ヲ合シテ其ノ坪數八九〇坪

方針

中學校令ニ據リ高等普通教育ヲ施シ國家ノ要請スル忠良ナル臣民ヲ錬成シ以テ皇國民タル負荷ノ大任ヲ全クスルコトヲ主眼トス

教育施設

報國團ハ昭和十六年四月ヨリ實施

- 教授
  - 教授要目＝各學年進度表作成
  - 特別指導
    - 課外教授（上級學校入學指導、學力不進者指導）
    - 講話、講習、映畫、視察
- 訓練
  - 實踐要目
    - 聖旨奉體、剛毅、禮讓、報恩、規律、勤勉
    - 朝禮、學式、參拜、祈願、體錬行軍、謝恩會、奉仕作業、貯蓄組合
  - 具體的顯現法
- 養護
  - 定期身體檢査、國民體力檢査、救急處置
  - 正姿勢、採光通風、日光消毒
- 校務
  - 教務＝教務整理、會議、施設立案
  - 事務＝庶務、會計
- 連絡監督
  - 父兄會＝家庭連絡及訪問
  - 校外監督
- 報國團
  - 總務部＝企畫、庶務、會計、連絡、統計
  - 鍛錬部＝勤勞作業班、柔道班、野球班、庭球班、競技班、劍道班
  - 學藝部＝藝能班、圖書班、講演映畫班、科學班
  - 國防訓練部＝射擊班、國防競技班、銃後奉公班
  - 生活部＝保健衞生班、配給班、通學聯盟班
- 時局對應施設
  - 訓話・揭示
  - 國民精神總動員講話聽講
  - 不動尊並埴生神社參拜每月八日參拜（皇軍必勝武運長久祈願）
  - 小御門神社參拜（皇軍必勝武運長久祈願）
  - 陸海軍恤兵部ニ慰問袋獻納
  - 佐倉陸軍病院慰問
  - 出征家族ノ慰問並ニ幫助
  - 出征家族農繁期手傳及勤勞奉仕
  - 出征將兵ノ歡送迎
  - 町內戰歿者町葬參列
  - 學校々舍內外集團勤勞奉仕
  - 本縣主催中等學校聯合發火演習參加
  - 防空演習
  - 下志津、佐倉、三里塚方面ニテ軍事教練
  - 國防訓練剛健旅行

生徒狀況

卒業生總數	學級數	生徒數（昭和十七年四月末現在）	入學者	卒業者	轉入	轉編入	上級學校入學者	職業ニ從事者	其ノ他	校名	校長	職員	經費
一、六一五	一〇	四五四	八五	七五	一〇	一二	二七	三六		成田山貫首大僧正	荒木照定	文學士 横田泰邦	二八	昭和十六年度決算額 四七、〇七八・四一

成田中學校

第壹　位置並びに沿革

一　位置

成田中學校は、成田町成田二十七番地に在り、東南部は成田町の一部に面し、西は成田高等女學校に接し、北には成田山公園櫻山の勝地を控へ、一望開豁、遠く田園を見渡す閑靜な丘腹に位置してゐる。

二　沿革

本校は明治三十一年十月七日、其の前身である成田英漢義塾を廢止して、新に成田中學校を設置、其の筋の認可を得て開校したものであつて、成田圖書館●成田高等女學校・成田幼稚園・成田學園・新更會と共に成田山の經營に係る教育事業の一に屬してゐる。今其の沿革の大要を示せば次の通りである。

英漢義塾時代

現成田中學校の前身である英漢義塾は、明治二十年十月三日當時の住職故三池僧正が地方中等教育機關の設備なきことを嘆き、故石川甚兵衛氏（正英翁）・故諸岡勝太郎氏（先代）等と謀つて創立、成田町成田字東谷の地、即ち現圖書館敷地の下に校舍を建て、翌二十一年一月五日開校式を擧げた中等程度の學塾で、修業年限三ヶ年、高等小學校卒業以上及びそれと同等以上の學力あるものを收容した。

而して開校と同時に、最初の塾長に宮村三多氏を迎へ、明治二十三年第壹回の卒業生を出し、相次いで第九回に及ぶ。其の間別に選科履修生を出すこと貳回。然るに明治三十一年十月七日成田尋常中學校設置と共に、同塾は廢止されたが、創設後實に拾有壹年の星霜を經、多數有爲の士を輩出してゐる。此の間塾長の交迭は、宮村三多氏・濱田義雄氏・福山龜太郎氏・和田玉一氏の四名であつた。

同塾に關して當時の事情を知る爲め、當時三橋金太郎氏が成田中學校三十年記念式に述べられた「回顧三十年」の一節を次に掲ぐることとする。

三橋金太郎氏「回顧三十年」の一節

菓漢義塾――それは故石川甚兵衛（正英翁）と故諸岡勝太郎（先代）兩氏が、その當時の有志として、まだ汽車もない不便な頃であつたにも拘らず、四名知名の士客と交り、時々名士を招聘して、政談又は學術の演說會を開いたり、或は國會の請願をしたり、或は教育の普及發達を圖つたりする爲めに、心力を傾注されたのであります。それが因となつてやがて實果を結んだものゝ一つが、即ち英漢義塾であるのです。當時成田山住職は三池照鳳師でありました。さて三池師に於かれましては、石川、諸岡兩氏から申出でられました學校設立のことは、別段異議なく御快諾になられまして、明治二十一年に之を實現されたのであります。學科は英漢數を骨子とし、當時千葉中學校及び師範學校の教職に居られた宮村三多氏を招聘し、塾長と致しました。ところが此の宮村氏は責性謹嚴で、而も稀世の雄辯家でありました。さて英漢義塾と命名して今の圖書館の下に建てられましたのが、間口十三間、奥行四間半の二階建で、これは後に中學校の寄宿舍になりましたが、實は其の當時校舍として使用したのであります。一體英漢義塾といふ校名は、其の頃印旛郡久住村土室と申す所に、小倉良則と云ふ漢學の先生がありまして、五六年前から自分の家を塾に使用し、英漢義塾と名づけ、英語の教師と數學の教師を頼み、なほ自ら漢文や撃劍などを教へて、私塾を經營されてゐたのであります。ところで此の小倉先生と云ふ方は、まことに器量拔群で、其の爲め郡民に推されて縣會議員となり、次いで縣會議長、衆議院議員などにもなられました。從つて家の方は自然とお留守勝ちになりますところから、遂に塾を閉づるの止むなきに立ち至りました。たま〳〵成田に學校が創設されることを聞き、かねて交友の間柄であつた石川、諸岡兩氏に會見し「英漢義塾の名を遺したいからその名をついで呉れるやうに」と懇請されましたので、兩氏は其の希望を容れ、ここに英漢義塾と命名されたのであります。

然る所、宮村先生は滿三年にならないで鄕里へ歸られることになりました。それは國會に打つて出る爲めの準備であつた。果して衆議院議員に當選し、議政壇上の人となられました。

宮村塾長去つて後任に來られた方が濱田義夫氏で、私共は濱田塾長の時代に卒業致しました。濱田先生の後任は福田龜太郎氏であります。

此の方は島根の人で、同縣人和田玉一、同木村鋭市の兩氏、それから理科に後藤敬三氏を聘しまして、着々内容の改善に力められました。此の當時の學生は、今日地方樞要の地位を占めてゐられませう。福山氏は現在行政判所の評定官、木村氏は亞細亞局長を經て公使になつて居られます。兎に角義塾も漸く學校らしくなりました。福山、木村兩氏去つて和田氏が塾長となられましたが、至つて熱心な方でした。然しどういふものか、學校の實績が餘り振はないので、一時は廢校論なども出た樣です。恰も其の頃です。貫首三池僧正猊下が遷化せられまして、石川照勤師が其後を承けられ貫首となられました。私は廢校論に對して石川僧正猊下に建白書を捧呈したことがあります。それは單に廢校の不可

なるを論じた許りでなく、最早教育の必要と云ふことが、誰言ふとなく地方にも響き出した折からであり、かたがた是非共學校を維持していただきたいと云ふことを懇願したのであります。猊下も亦聊かの御異論がございません。たゞ當時は官學だけが尊ばれて、私學は更に顧みられぬと云ふ世の中の有樣でありましたから、「義塾を改めて尋常中學校」にしたいと云ふことを切望したのであります。何故と云ふに、尋常中學校の卒業者でなければ高等の學校に進む道が無く、又徴兵猶豫の特典が與へられません。しかもこれが一般の歡迎するところであつたのです。折から石川僧正猊下には現代の趨勢を洞察せられ、御自身としても「若し現狀のままで推移するならば到底呉下の阿蒙に甘んじなければなるまい。それでは成田町の前途をどうしよう」と、玆に奮然志を決して歐米漫遊を發表せられました。これを聞いて誰一人として驚愕しないものはありませんでした。固より種々の議論もありましたさうですが、遂に内議も一決して御出發になられました。

（昭和三年二月編、成田中學校々友會報第二十号「成田校三十年記念號」より）

成田中學校時代

英漢義塾が成田中學校と改稱されるまでの經緯は、大體上述の如くであるが、其の後の模樣を「成田中學校沿革史」其の他によつて記せば、

明治三十一年八月十三日少僧正峰川（後服部と改姓）照和師は當時在歐中の塾主石川僧正の命を受け、英漢義塾を廢し中學校を新設の件に就いて、其の筋へ要請し、同年十月七日を以て認可された。

かくして同年十一月舊英漢義塾を現在の講堂に移轉し、喜田貞吉氏を聘して初代の校長とし、十一月一日から中學校としての授業を開始した。しかし當時の生徒數は一年級五十五名、二年級三十五名、三年級十二名、計百二名であつた。越えて同三十二年六月十三日校舍改築の件が認可となつたのですぐ淺井造氏・宮田半左衛門氏・諸岡市郎左衛門氏・飯倉郁太郎氏・三橋金太郎氏等が委員となつて、校舍改築に着手したが、喜田校長には同年八月退職され、本校の顧問となつた。而して同三十三年には徴兵令第十三條による、徴兵猶豫の特典に浴し、且つ改築中の校舍も同年六月に至つて竣工した。時恰も石川僧正は外遊を終へて歸朝せられたので、同月二十七日盛大な落成式を擧行し、文部大臣樺山資紀閣下並びに朝野の名士が多數參列された。其の後同四十二年に至り武道場（四十坪）を運道場の北側に新築する外、銃器庫（十八坪二五）の新築生徒搖場の改築（七十二坪）を行ひ、大正三年十月には生徒定員二百五十名に增加の件認可、同十二月三日には定員二百九十名に增加の件認可、昭和二年九月には同定員四百五十名と、五學級增加の件認可となり、十學級となつた。

尙ほ昭和三年五月には、講堂理科教室の新築並ひに普通教

室の增築が竣成し、又運動場の擴張を行ひ、武道場を增築して現在の所に移轉した。更に同六年には工作室、金工室完成同七年十二月には武道場表玄關の完成、同八年九月には博物教室（四十坪）の新築が完成した。

しかして明治三十一年創立以來昭和十七年三月に至るまで四十一回の卒業生を出し、其の數千六百十五名に及んで居る。此の間文部次官奥田義人氏・商工局長木内重四郎氏・板垣退助伯・文部省普通學務局長田所美治氏・文部省參政官大津淳一郎氏・陸軍大將福島安正閣下・文科大學長上田萬年氏千葉縣知事石原健三閣下・同折原巳一郎閣下等の諸名士が或は卒業式に、或は實況視察に來校せられ、當山の文化事業に對する努力に深甚の敬意を表せられた。明治二十年英漢義塾創立以來昭和十七年三月に至る迄、年を閲すること五十五年（滿五十三年六ケ月）中學校と改稱してから四十四年（滿四十三年七ケ月）に及んでゐる。

昭和七年創立三十五周年記念式を擧行　故三池・石川・服部僧正・故石川正英翁・故諸岡勝太郎氏に、墓前報告を行ひ、理事三橋金太郎氏に感謝狀を贈つた。

本校に理事を置き、三橋金太郎氏は創立當初から　石川甚兵衞氏は昭和三年四月から共に其の任に當られてゐたが、昭和十三年三月十九日「成田山六和會」の組織せらるゝに及んで理事制は廢止となつた。尙ほ石川氏は、同年四月十七日病氣の爲め遂に他界せられた。

第貳　設備並びに施設

一　設備

一　校地坪數　三、五〇〇坪

二　校舍建物坪數　六五〇坪

三　設備（校舍ニ木造二階建、但し講堂は鐵筋コンクリート造にして其の內譯左の如し

室名	數	坪數	室名	數	坪數
勅語奉安室	一	〇・七五	講堂	一	八一・〇〇
校長室	一	八・七五	職員室	一	一九・三五
事務室	一	六・〇〇	圖書室	一	九・〇〇
應接室	一	六・〇〇	休養室	一	六・〇〇
普通教室	一〇	一七九・〇〇	理化教室	一	三〇・〇〇
博物教室	一	一六・七五	博物標本及準備室	一	二二・〇〇
圖畫手工室	一	六一・七五	金工室	一	二七・五〇
理化準備室	一	一五・〇〇	機械室	一	三二・二五
天秤室	一	三・〇〇	寫眞暗室	一	一・五〇
藥品室	一	三・〇〇	會議室	一	九・〇〇
昇降口	一	一八・〇〇	生徒控室	一	七二・〇〇
武道場	一	八〇・〇〇	銃器庫	一	一八・〇〇
便所	一	九・五〇	物置	一	一五・〇〇
小使室	一	四・〇〇	湯飲所	一	四・〇〇
薪炭庫	一	三・〇〇	體操器具置場	一	四・〇〇
階下倉庫	一	四・〇〇	廊下階段等		一二五・五〇
計		八九〇・〇〇			

二　趣旨並びに教育方針

設立の趣旨

本校は成田山新勝寺經營六大教育事業の一にして、皇國の道に則り、專ら中學校令に據る中等教育を施し、以て國家の要請する忠良なる皇國民を錬成せんが爲めに設立せしものなり。

教育方針

本校の教育方針は本校設立の趣旨に基きて、先づ「皇國民を錬成」するにあり。換言すれば皇國の道に則りて、白我功利の觀念を放擲し、獻身報國の生活に精進する眞の皇國民卽ち「負荷ノ大任ヲ全クスル」忠良の臣民を錬成するにあり、從つて訓練の核心は、一に御詔勅の聖旨を奉體し、實踐要目としては質實剛健の氣風を振勵し、剛毅、禮讓、報恩、規律の諸德を重んじ、勤勉にして勞苦を樂しむ實力と良風の養成に邁進せしむることに存す。

三　校則

成田中學校校則

第一章　總則

第一條　本校生徒定員ハ四百五十名トス

第二條　本校ノ修業年限ヲ五箇年トシ一年ヲ以テ一學年トス

但學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第三條　一學年ヲ分チテ三學期トス左ノ如シ

第一學期　四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

第二學期　九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

第三學期　一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル

第四條　休業日左ノ如シ

各日曜日、開校記念日（每年十月七日）大祭日、祝日、夏季休業（七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル）冬季休業（十二月二十五日ヨリ一月七日ニ至ル）學年末休業（三月三十日ヨリ同三十一日

ニ至ル）學年始休業（四月一日ヨリ同五日ニ至ル）

第二章　學科課程及授業時間

第五條　各學科ノ配當並ニ毎週ノ時間表ハ別表ニ依ル

第三章　課程ノ選修

第六條　生徒ハ第四學年以後ニ於テハ第一種課程若シクハ第二種課程ノ何レカヲ選修スルモノトス

第七條　課程ノ選擇ハ第三學年ノ終リニ保證人連署ノ上願ヒ出デ學校長ノ許可ヲ受クベシ

第四章　考査

第八條　各學年ノ課程修了又ハ全學年ノ卒業ハ平素ノ學業成績並ニ操行ヲ考査シテ之ヲ定ム

第五章　入學退學休學賞罰

第九條　生徒ノ入學ハ毎學年ノ始トス但缺員アルトキハ第二學期ノ始メニ於テ募集スルコトアルベシ

第十條　本校第一學年ニ入學ヲ許可スベキ者ハ國民學校第六學年卒業ノ者及ビ入學資格檢定ニ合格セル者ニツキ入學考査ノ上銓衡ス

第十一條　入學資格檢定ハ國民學校卒業程度ニヨリ全學科ニ就イテ之ヲ行フ

第十二條　第二學年以上ニ入學ヲ許可スベキ者ハ相當年齢ニ達シ其ノ學年ニ相當スル學力檢定ニ合格シタル者ニ限ル

第十三條　他ノ中學校ヨリ轉校セント欲スル者アル時ハ缺員アル場合ニ限リ入學ヲ許可スルコトアルベシ但全學科ニ就キ檢定ヲ行フ

第十四條　本校ニ入學セント欲スル者ハ體格檢査ニ合格スルヲ要ス

第十五條　入學ヲ希望スル者ハ本校所定ノ用紙ニ必要事項ヲ記入ノ上願出ヅベシ

第十六條　入學ノ許可ヲ得タル者ハ一週間以内ニ左式ノ在學證書並ニ戸籍謄本ヲ差出スベシ（在學證書雛形省略）

第十七條　保證人ハ二名ヲ要シ其ノ一名ハ親權者、後見人又ハ親族トシ他ノ一名ハ成田町在住ノ一家計ヲ立ツル男子トス

第十八條　保證人ノ資格上不適當ト認ムル時ハ之ヲ變更セシムルコトアルベシ

第十九條　左ノ場合ニ於テハ退學ヲ命ズ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二　學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三　引續キ一箇年以上缺席シタル者

四　正當ノ理由ナクシテ引續キ一ケ月以上缺席シタル者

五　授業料怠納二ケ月以上ニ亘ル者

科目＼學年	第一學年 時數	第二學年 時數	第三學年 時數	第四學年 第一種 時數	第四學年 第二種 時數	第五學年 第一種 時數	第五學年 第二種 時數
修身	一 勅語 個人生活 社會生活	一 國家生活 社會生活	一 國家生活 國際生活	一 國民道德作法 社會生活 道德原理	一 同	一 同	二 同
公民科				二 家鄉土府縣	二 同	二 國家	二 同
國語漢文	七 國語講讀 作文 文法	六 國語講讀 漢文 作文	六 國語講讀 漢文 作文	五 同	五 同	五 同	五 同
歷史	三 國史	三 外國史	三 外國史	三 外國史	三 同	三 國史	三 同
地理	三 地理	三 同	三 日本地理	三 同	三 同	三 自然地理概說 人文地理概說	三 同
外國語（英語）	五 聽方 讀方 解釋 話方 作文 書取 習字	五 同	六 聽方 讀方 解釋 話方 作文 書取 文法	三 同	六 同	三 同	三 同
數學	三 綜合數學	三 同	三 同	二 同	五 同	二 同	五 同
理科	二 一般理科	三 博物 物理 化學	五 同	四 同	四 同	四 應用理科	四 同
實業				四 綜合實業		四 綜合實業	
圖畫	一 自在畫	一 同	一 自在畫 畫器畫	一 同	一 自在畫 用器畫		
音樂	一 歌典樂典	一 同					
作業科	二 園藝及工作	二 同	二 同	一 同	一 同	一 同	一 同
體操	五 體操 遊技 教練 武道	五 同	五 同	五 同	五 同	五 同	五 同
計	三〇	三〇	三一	三一	三二	三二	三二

六　疾病事故ニ因リ學業ヲ履修シ能ハズト認メタル者

七　出席常ナラザル者

第廿條　中途退學セント欲スル者ハ保證人連署ヲ以テ其ノ理由ヲ具シ願出ヅベシ

第廿一條　生徒兵役ニ服スル場合ハ休學ヲ許可ス

第廿二條　品行方正學術優等ノ者ニハ賞品賞狀ヲ授與ス但特ニ優秀ナル者ニ對シテハ一學年間ノ授業料ヲ免除スルコトアルベシ

第廿三條　規則命令ニ違反シ又ハ校規ヲ紊ル者ハ戒飭謹愼停學放校ノ罰ニ處ス

第廿四條　學校ノ建物器具器械標本ヲ毀損又ハ亡失シタル時ハ相當ノ賠償ヲナサシムルコトアルベシ

第六章　授業料及入學料

第廿五條　授業料ハ一ケ月金三圓五十錢トス

第廿六條　生徒在學中ハ出席ノ有無ニ拘ラズ毎月五日迄ニ納ムベシ但毎年八月ハ納ムルヲ要セズ

第廿七條　授業料納付期日ヲ經過シ尙ホ五日以內ニ納メザル者ハ納付濟マデ停學ヲ命ジ保證人ヲシテ之ヲ納メシム

第廿八條　入學志願者ハ入學考査料金壹圓ヲ納メ入學ノ許可ヲ得タル時ハ更ニ入學金壹圓ヲ納ムベシ

第廿九條　左ノ各項ニ該當スル者ハ授業料ヲ減免ス

一　學力優等品行方正ニシテ他生ノ模範タルベキ者

二　戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ノ子弟

三　貧困ニシテ資力ナク學力品行共ニ佳良ナル者但第三項ノ場合ニ於テハ父兄又ハ後見人ヨリ特ニ願書ヲ差出サシメ又本人ニ對シテハ相當ノ義務ヲ負ハシム

第卅條　休學ヲ許可シタル場合ハ授業料ヲ徵收セズ

第七章　服制

第卅一條　生徒登校ノ際ハ必ズ、制規ノ服裝ヲナスベシ

制帽ノ地質、型ハ全國中等學校ノ規格ニ從ヒ本校ノ徽章ヲ附スベシ

制服ノ地質、型ハ全國中等學校ノ規格ニ從フ

靴ハ黑色編上ゲヲ用フ、但シ許可ヲ得テ代用履物ヲ用フルコトヲ得

外套ハ全國中等學校ノ規格ニヨル

但一二學年ハ調製セザルモ可ナリ

制服ヲ汚損シタル者若シクハ身體上ノ故障ニヨリ着用不能ナル者ハ許可ヲ得テ代用服ヲ着用スルコトヲ得

代用服ハ筒袖ニシテ袴ヲ着用スベシ

新入生徒ニ限リ指定ノ期間中代用服ヲ許可ス

第卅二條　本校則ハ昭和六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第卅三條　本校則施行ニ關スル細則並ニ生徒取締ニ關スル規定其ノ他必要ナル內規ハ學校長之ヲ定ム

四　昭和十六年度行事概要

四　月

一　日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜

七　日　始業式、岩本先生告別式

八　日　午後一時ヨリ入學式

九　日　新舊生徒對面式、午後卒業生中各種學校在學中ノ有志ト三四五年生トノ受驗ニ關スル懇談會ヲ開ク

十　日　岡田次郎先生新任式

十六日　草野金松先生告別式

廿五日　靖國神社臨時大祭

廿九日　天長節祝賀式擧行、コノ佳節ヲトシ在來ノ校友會ヲ發展的改組シ、成田中學校報國團結成式ヲ擧グ

五　月

一　日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜

三　日　職員會議ヲ開キ、報國團豫算ヲ討議シ、更ニ團ノ活潑ナル活動ヲ策ス

五　日　川崎武親、横田哲郎兩先生新任式、身體檢査（五、四、三年）

六　日　身體檢査（二、一年）

七　日　口腔檢査

九　日　四五年勤勞奉仕ニ公津村ノ縣農事試驗場畑作原種圃ニ行ク、出發前校長ヨリ勤勞旗ヲ授與ス

十一日　體操大會ヲ開催ス

十三日　白石教官ヨリ防諜ニ關スル講話アリタリ

十六日　海軍記念日繰上講演講師吉井海軍少佐

十九日　元本校配屬將校飯田喜好大佐ノ町葬佐倉ニアリ、川瀨、細矢ノ兩先生正副級長ヲ引率シテ參列ス

廿一日　成田町園護臺ニ約二千坪ノ山林ヲ、成田山新勝寺ヨリ食糧增產農場トシテ學校ニ提供セラル、本日午後四、五年參列ノ下ニ嚴肅ナ鍬入式ヲ行フ、農場ヲ「成田中學校報國農場」ト命名セリ

廿二日　青少年學徒ニ下シ賜リタル勅語奉讀式擧行、終ツテ閱兵分列式ヲ行フ

廿六日　中間考査（五日間）

卅一日　國民體力檢査實施（ツベルグリン注射）

六　月

一　日　興亞奉公日

二日　國民體力檢査（ツベルクリン反應檢査）職員身體檢査
三日　三池僧正命日ニツキ墓參、本日ヨリ各級交替ニテ報國農場並ニ東町ニアル石川牧場ヨリ借用セル約三百坪ノ空閑地ノ開墾作業ヲ行フコトヽセリ、本日五年ガ實施ス
十四日　本日ヨリ五日間農繁期自宅手傳組ト學校勤勞作業組トニ分ケテ實施
十九日　國民學校講堂ヘ映畫觀覽
廿四日　成毛　忠先生急逝
廿六日　成毛　忠先生遺骨ヲ迎ヘ各學年毎ニ燒香ス
卅日　三宮神社ノ大祓式ニ參列ス

七月

一日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜、後閲兵分列ヲ行フ
二日　應召中ノ齋藤理平先生ノ歸還挨拶
七日　支那事變四周年記念式擧行、式後成田町民大會ニ參列ス
九日　期末考査（六日間）藤原孝夫千葉縣知事參觀ノタメ來校
十二日　西原鹿之助先生應召
十七日　國民學校講堂ニ於テ映畫「美の祭典」觀覽
十九日　五年多古射擊場ニテ射擊實施
廿二日　本日ヨリ夏季鍛錬行事實施
廿三日　前夜大暴風雨ノタメ交通機關杜絶セシタメ早退

八月

一日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜、後閲兵分列ヲ行フ、本日ヨリ十日間夏季授業ヲ實施、干草供出
八日　防空訓練實施
十日　第一學期終業式、時局逼迫ニ伴ヒ、縣學務部ノ指示ニ基キ、報國隊、防空補助隊ヲ編成、並ニ生徒ヲ非常召集スルタメノ通信網表ヲ作成ス
十八日　五年A組勤勞作業
廿日　五年B組勤勞作業
廿二日　四年A組勤勞作業
廿四日　四年B組勤勞作業

九月

一日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜、後閲兵分列ヲ行フ。始業式　宮野恭造先生新任式
二日　朝禮ノ時校長ヨリ第二學期ノ生徒ノ實踐德目「正確敏捷」ヲ示ス、英數國語ノ一齊考査ヲ行フ
十日　四、五年第二種生ノ模擬考査ヲ行フ（受驗科擔任職員打合セ會ニテ屢々實施スルコトニ決定ス）
十一日　東京陸軍幼年學校教官ノ講演

十五日　水害義捐金四十三圓二錢ヲ縣教育會ヘ送金ス
十六日　宮崎成田國民職業指導所長五年ニ職業講話
十八日　校長滿洲事變記念日ニツキ講話、眼ノ記念日
廿日　航空日　午後模型飛行競爭及ビ展覽會ヲ開催
廿二日　父兄會
廿五日　堀口龜重先生告別式
廿六日　宮城外苑整備費第一回分献金百二十圓二十五錢送金

十月

一日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜、後閲兵分列ヲ行フ、中林謙二先生新任式
三日　銃後奉公强化運動（五日間）軍人援護ニ關スル勅語奉讀式
七日　創立記念式擧行
八日　第四十三回記念體育大會開催
十四日　防空訓練實施
十六日　小御門神社ヘ剛健旅行ヲ行フ
十八日　靖國神社臨時大祭
廿一日　戸刈中佐教練科授業參觀ノタメ來校
廿三日　縣下中等學校聯合演習ニ五年參加（二日間）
廿六日　同窓會
廿七日　中間考査（五日間）

十一月

一日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜、後閲兵分列ヲ行フ、報國農場ニテ甘藷二百八十六貫收穫ス
三日　明治節祝賀式擧行、閲兵分列ヲ行フ
四日　午後國民學校ニテ司法保護事業ニ關スル映畫觀覽
六日　五年ノ就職希望者ノタメ成田國民職業指導所ヨリ職業指導相談ニ係員三名來校
八日　體力章檢定會開催
十一日　伊藤俊一先生告別式、長田　實先生新任式
十七日　四、五年下志津廠營訓練（四日間）
十八日　縣學務部長來校視察

十二月

一日　興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜、後閲兵分列ヲ行フ
三日　教練査閲施行、査閲官保刈　清中佐（コノ日報國隊ノ編成ニヨリ閲兵分列ヲ行フ、職員モ參加ス）
五日　報國農場ノ開墾作業ニヨリ得タ松ノ根ヲ利用シテ炭燒ヲナス、檢査濟第一回分俵數九十八俵
八日　校長ヨリ本日曉米英兩國ト交戰狀態ニ入ツタ旨ノ傳達ト、併セテ戰時下ノ覺悟ニツキ訓話アリタリ、生徒ヲラジオノ前ニ整列セシメ時々刻々ノ戰況ヲ聽カシム、成田中學校職員生徒一同無言ノ裡ニ皇國ノ必勝ヲ期ス

九　日　成田山新勝寺ニ於テ戰勝祈願ノ大護摩修行アリ、校長並ニ五年學校ヲ代表シテ參列ス
十　日　西野正人先生告別式
十一日　學藝大會開催、展覽會モ併セテ開ク
十三日　三、四、五年成田國民學校ニ於ケル大政翼贊會講演會ニ出席
十五日　新勝寺ニ於テ行ハレシ戰勝祈願修行結願ニツキ五年參列ス
十八日　期末考査（五日間）
廿三日　一、二年野外教練
廿六日　終業式、宮城外苑整備費第二回分百二十圓二十五錢送金、校長ヨリ五年ニ「就職者ニ對スル特別取扱」ニ關シテ示達アリタリ
廿七日　四、五年佐倉射擊場ニテ實包射擊實施
廿八日　受驗科特別授業（五日間）
卅　日　受驗科生ノタメ受驗座談會開催
卅一日　五年五十名ハ午後六時ヨリ川瀨、宮野兩先生引率ノ下ニ新勝寺ヘ奉仕ニ赴ク

一　月

一　日　新年拜賀式、四年五十名ハ午前七時ヨリ三門、齋藤（半）先生引率ノ下ニ新勝寺ニ奉仕ニ赴ク
七　日　學校職員特別身體檢査
八　日　大詔奉戴日、始業式、校長ヨリ第三學期生徒ノ實踐德目「困苦缺乏ニ堪ヘヨ」ヲ示ス。不動尊、三宮神社參拜、後閱兵分列ヲ行フ、五年就職者ハ次々ト會社工場ニ實習ニ赴ク
九　日　武道寒稽古開始（十日間）
十三日　職員生徒軍用機建造資金二百三十一圓五十錢ヲ送金ス
十八日　寒稽古終了、武道大會開催
廿三日　午後成田國民學校講堂ヘ大東亞戰爭映畫觀覽
廿六日　入學考査ニ關スル附近國民學校長トノ連絡會議開催
卅一日　石川照勤師命日ニツキ職員生徒墓參

二　月

六　日　午後鄕部原不動ケ丘方面ノ麥踏ノ勤勞奉仕ヲナス
七　日　大詔奉戴日繰上詔書奉讀式擧行、多古農學校トノ對抗野外演習ヲ行フ、學務課長來校參觀
九　日　三、四、五年飛行學校砲兵學校見學
十一日　紀元節祝賀式擧行、式後町主催ノ建國祭ニ參列シ街道行進ヲナス
十二日　卒業考査（三日間）
十八日　シンガポール陷落シ、第一次戰捷祝賀式擧行、後町主催ノ祝賀式ニ參列ス

三　月

二　日　校長ヨリ滿洲國建國十周年記念日ニツキ講話
五　日　第四十一回卒業式擧行
七　日　入學考査、口答試問
八　日　入學考査、口答試問
九　日　入學考査、身體檢査
十　日　入學考査、口答試問
十一日　入學許可者八十四名氏名發表
十二日　第二次戰捷祝賀式擧行、不動尊、三宮神社參拜
十六日　學年末考査（六日間）

五　一般的施設

學校長は職員を統率して、事務の分擔を定め、校務遂行の圓滑を圖り、併せて生徒の訓育、智育、心身の鍛錬、向上に資する爲、施設として左の部門を置く。

一　校務部

(1)　教務（重要會議・監督・時間割・統計）
教務主任（首席教諭）　教務係四人（教諭）
生徒監四人（教諭）
學級主任・學科主任
(2)　事務（庶務・會計）

二　報國團

書記

在來の校友會を發展的改組し、學校を皇國民の基礎的修養の道場として、師弟相携へて具學具進し、以て戰時非常時局下に於ける銃後青少年學徒の教導薫化の徹底を期するため　成田中學校報國團を組織して、昭和十六年四月二十九日の天長節の佳節を卜し結團式を擧げた。役員として團長は學校長が當り、部長班長理事は教諭より、幹事は生徒より、團長が任命することになつてゐる。

(1)　總務部
各部の事業の企畫・連絡・統制に當り、庶務會計及び各種團體との折衝を取扱ふ。

(2)　鍛錬部
（イ）勤勞作業班
（ロ）劍道班
（ハ）柔道班
（ニ）野球班
（ホ）庭球班
（ヘ）競技班

事業(1)指導・練習・競技・體力大會此の外尙武並に剛健の氣を涵養するため毎年寒氣凜冽の期に校長

以下職員生徒毎朝五時より七時半まで十日間の武道寒稽古を行つて居る。

(2)不撓不屈困苦缺乏に耐へる精神を養ふ爲、春秋剛健旅行を行ふ。又水泳術の修得心身の鍛錬、團體生活指導の爲、毎年二年生全部を七月二十一日より十日間安房北條海岸に於て水泳教練を行つてゐる。

(3)昨年より成田中學校報國農場が設けられ食糧増産の一助として全校一丸となつて勤勞作業に熱心に從事した結果甘藷一八六貫、其の他野菜數十貫の收穫を得たり。

(3) 學藝部

(イ) 藝能班
(ロ) 圖書班
(ハ) 講演映畫班
(ニ) 科學班

事業(1)生徒の教化思想の表現鄕土文化の研究等の發表機關として毎年「成邱の光」を發行す。

(2)時々斯界の大家を招聘して講演會を開催したり名映畫を鑑賞してゐる。

(3)毎年一回學藝大會を開き修得した學科並に研究を發表せしめてゐる。

(4)夏季休暇を利用して圖畫手工等を指導製作せしめ休暇後展覽會を開く。

(5)受驗參考書偉人傑士の傳記等毎年數百冊を購入し、生徒の自學自習を奬勵すると共に精神の修養に資せしめてゐる。

(4) 國防訓練部

(イ) 射擊班
(ロ) 國防競技班
(ハ) 銃後奉公班

事業(1)非常時局に鑑み國防競技射擊の指導練習に力を入れてゐる。

(2)一週間一回四キロの駈足を行つてゐる。

(3)大詔奉戴日に一人一品供出させてゐる。その賞却金にて慰問袋を獻納したり出征家族の慰問をしてゐる。

(3)國民貯蓄奬勵實施要綱に依り貯蓄の督勵をなす

(5) 生活部

(イ) 保健衞生班
(ロ) 配給班
(ハ) 通學聯盟班

事業(1)救護室の設備を完備し不時の病人の救護に萬全を期してゐる。

(2)生徒の服、帽子、ゲートル、その他學用品の圓滑なる配給を計つてゐる。

(3)交通機關を利用して通學する者に對して自治會が組織され通學生徒の指導、救護並に交通道德の實踐强調を圖つて居る。

三 課外教授

上級學校に進む者に對しては、毎週放課後英語・數學及び國語・漢文の特別指導をなし、日曜には模擬試驗を行ひて學力の向上を圖り、成績不良の者に對しては、夏期冬期の休暇を利用して特別指導を行つてゐる。

四 カード作集

各學科を連絡綜合して知識を確實にする爲め、其の教育手段として、カード作製

五 修學旅行

六 校外監督

映畫館・飲食店等風紀上面白からざる場所に立入ることを防止する爲め、教諭四名に校外監督を委囑し、嚴重に取締らしめてゐる。

七 家庭連絡

毎年父兄會を催して、父兄と懇談を遂げ、必要に應じて父兄の來校を求め、尙ほ機會ある毎に家庭を訪問して學校との連絡を圖る。

八 朝禮

毎朝始業前、校庭或は雨天體操場に集合し、校長訓話後ラジオ體操をなす。

九 參拜・年賀・墓參

毎月八日並に大祭日には、埴生神社に參拜し、毎月八日並に學期始業日には不動尊に參詣する。

年頭始業日には不動尊に參詣後校主猊下（現貫主）に年頭の挨拶をなす。

三池・石川僧正の御命日には職員生徒一同墓參燒香をなす。

一〇 謝恩會

報恩感謝の微衷を表する爲め、卒業式終了後卒業生一同は主任引率の下に、不動尊に參詣し、歸校後謝恩會を開く。

第參 生徒牧況

一 年度別卒業生數

成田英漢義塾年度別卒業生數

年度別	回數	卒業者數	年度別	回數	卒業者數
明治二十三年	一	三	明治二十四年	二	二

明治二十五年　三　六　明治二十九年　七　六
明治二十六年　四　四　明治三十年　八　七
明治二十七年　五　四　明治三十一年　九　五
明治二十八年　八　一一　計　四八
外に選修履修生　六

成田中學校年度別卒業生數

年度	回數	卒業者數	年度	回數	卒業者數
明治三十四年	一	六	同三十五年	二	八
同三十六年	三	一八	同三十七年	四	二二
同三十八年	五	二二	同三十九年	六	二二
同四十年	七	二九	同四十一年	八	二二
同四十二年	九	二二	同四十三年	一〇	二三
同四十四年	一一	三二	大正元年	一二	二八
大正二年	一三	二八	同三年	一四	二八
同四年	一五	三五	同五年	一六	三七
同六年	一七	三五	同七年	一八	三七
同八年	一九	三四	同九年	二〇	三六
同十年	二一	三八	同十一年	二二	三八
同十二年	二三	三四	同十三年	二四	四五
同十四年	二五	四五	同十五年	二六	四八
昭和二年	二七	三九	昭和元年	二八	六二
同四年	二九	四八	同三年	三〇	五五
同六年	三一	五五	同七年	三二	五六
同八年	三三	四九	同九年	三四	四七
同十年	三五	五八	同十一年	三六	五〇
同十二年	三七	四二	同十三年	三八	五五
同十四年	三九	六一	同十五年	四〇	八一
同十六年	四一	七五	計		一、六一五

一　本年度（四十一回）卒業生氏名（昭和十七年三月卒業）

氏名	原籍	入學上級學校名及就職先
浅野勉	香取、高岡	富士航空計器株式會社
林允夫	印旛、八生	京成電氣軌道株式會社
長谷川良三	印旛、成田	陸軍航空工廠
伊藤和一	印旛、富里	富士航空計器株式會社
石橋幹司	印旛、公津	東京日立航空機株式會社
郡司行雄	印旛、遠山	千葉工場
今仲鐵雄	印旛、八生	千葉運輸成田驛
幡谷勇	印旛、久住	陸軍航空工廠
佐久間好松	印旛、成田	
青柳靜雄	印旛、豊住	
山田神一	印旛、遠山	
郡司喜三郎	印旛、遠山	
佐藤正夫	山形縣西村山	中野高等無線電信學校
篠原喜好	印旛、富里	
丸一郎	印旛、公津	
伊藤進	山武、千代田	
加藤源進	山梨縣北都留	海軍艦政本部
栗山次雄	印旛、豊住	
丸正明	印旛、公津	
三須幸雄	印旛、成田	東京高等齒科醫學專門學校
大野一郎	印旛、成田	海軍艦政本部
伊藤喜久治	東京、中野	桐生高等工業學校
吉岡幸雄	印旛、富里	
鶴田愼一	印旛、成田	
石原重固	香取、小御門	成田學園
松岡久夫	印旛、成田	
鈴木芳雄	印旛、成田	千葉運輸成田機關區
一鍬田忠	印旛、中郷	
岩澤宏	山武、千代田	東京高等獸醫學校
高石雅男	印旛、佐倉	東京高等師範學校
伊達敏夫	印旛、中郷	
荒木幸榮	印旛、安食	
澤田功	印旛、中郷	海南島師範學校
高野忠大	埼玉縣神保原	慶應義塾大學醫科
小島和夫	印旛、成田	
諸岡中	印旛、成田	
芹山嘉幸	印旛、遠山	
伊藤進	印旛、遠山	東京芝浦電氣株式會社
山本昌良	印旛、安食	川口工場
黑田諧逸	印旛、成田	
加藤辰雄	東京、目黑	中央航空研究所
山田紀男	印旛、成田	海軍水路部
邊田文雄	香取、高岡	高岡光學機械製造所
木村嘉明	香取、多古	陸軍航空工廠
戸村信行	印旛、遠山	横須賀海軍工廠
石井一行	印旛、富里	富里國民學校
高木善一	印旛、公津	千葉運輸成田驛
野々宮毅	印旛、遠山	
岩瀨隆	印旛、成田	陸軍航空工廠
角河勝身	印旛、成田	成田國民學校
生駒重太郎	印旛、遠山	東京電燈株式會社
香取利昌	印旛、久住	成田出張所
鈴木正一	印旛、富里	千葉師範學校
渡邊能邦	印旛、成田	千葉運輸
石井康夫	印旛、成田	

池田壯吉	山武、千代田	横須賀海軍工廠
岩館昌喜	香取、滑河	
芦田勝二	印旛、成田	
吉岡丈夫	印旛、中郷	
後藤浩	印旛、豐住	
高柳健	印旛、豐住	東京水産講習所
青柳恭	印旛、公津	拓殖大學
松本哲	印旛、酒々井	
湯淺幸平	印旗、八生	
遠藤祥平	印旛、富里	
伊藤春重	印旛、遠山	陸軍士官學校
鈴木博之	印旛、成田	
伊藤幹司	印旛、豐住	
林田幸雄	印旛、富里	富里國民學校
桑原榮	印旛、安食	
萩原一夫	山武、千代田	横濱税關事務所
長谷川操佑	印旛、成田	
吉川洋一	印旛、中郷	
大木禮二	印旗、成田	日本大學專門部商科
武士田泰一	香取、多古	海軍艦政本部

計 七十五名

駒澤大學豫科	40	關川正誼
桐生高等工業學校	41	伊藤喜久治
陸軍士官學校	41	伊藤春重
東京高等師範學校	41	高石雅男
慶應義塾大學醫科	41	高野忠大
東京齒科醫學專門學校	41	三須行雄
中野高等無線電信學校	41	佐藤正夫
海南島師範學校	41	澤田功
千葉師範學校	41	香取利昌
日本大學專門部商科	41	大木禮二
東京高等獸醫學校	41	岩澤宏
水産講習所	41	高柳健
拓殖大學	41	青柳恭
甲種飛行豫練習生	四年在學中	佐分清介
甲種飛行豫練習生	四年在學中	大三川圓夫
甲種飛行豫練習生	三年在學中	小川三郎

三　上級學校入學者調

（昭和十七年四月調）

學校名	卒業回數	氏名
新潟高等學校	39	山崎昇
早稲田大學專門部工科	39	吉田憲八
早稲田第一高等學院	39	三橋博雄
中央大學	39	石橋咸一郎
陸軍士官學校	40	堀越秀一
秋田鑛山專門學校	40	淺野守
甲種飛行學校練習生	40	加藤順三
明治大學專門部商科	40	吉澤正夫
日本大學醫科	40	大隅忠義
千葉師範學校	40	相川主計
日本大學專門部工科	40	山田幸吉
東京高等獸醫學校	40	富澤太郎
東京高等獸醫學校	40	鈴木和夫
遞信官吏養成所	40	小川秀平
東京物理學校	40	木内信三
東京物理學校	40	鈴木功一
東京物理學校	40	勝田英朗
東京物理學校	40	諏訪原稔治

四　各學年別生徒民名

（昭和十七年四月現在）

◎印は特待生　△印は正副級長　級長以下身長順

第五學年A組（三十七名）　主任（三門健一　齋藤半六）

△山口茂雄	印旛木下	岩館武
相京定一	同公津	印旛中郷
加藤進	同遠山	圓城寺敏夫
市川榮一	同成田	同公津
加藤啓助	同中郷	山田毅
秋山正誼	同成田	同公津
伊達甚術	同中郷	湯淺和
長谷川正躬	同成田	同八生
小梶孝夫	同久住	京須廣司
伊藤源衛	同中郷	同久住
小宮敬雄	同富里	丸善雄
弘海堯光	同安食	同公津
村田弘光	同成田	青柳和男
中島昭夫	同成田	同公津
伊藤和夫	同木下	高橋智龍
鵜澤胖	香取多古	山武千代田
△甲田幸雄	印旛遠山	高見德衛
		印旛安食
		林義孝
		同成田
		小宮正夫
		同富里
		成田誠
		同安食
		下山豊
		同成田
		押尾廣之
		同富里
		寺内毅
		同中郷
		平澤和一
		同成田
		戸村晃
		山武千代田

吉田實　印旛成田
藤崎光彌　同　遠山
鈴木邦夫　同　成田

第五學年B組（三十八名）主任（三門健一　齋藤半六）

伊藤廣敏　印旛中郷
栗原政敬　同　遠山
櫻井良　香取小御門
成毛平　印旛中郷
山本明　同　安食
鈴木嘉信　同　遠山
高橋三郎　同　公津
關谷忠雄　同　公津
大里竹次　同　遠山
五木田榮藏　山武二川
長川原昇
伊藤彰爾　印旛豊住
萩原正義　同　成田
小川徹男　香取滑河
梶谷潤一郎　印旛安食
蛭田耕平　同　豊住
大木政勝　同　中郷
國本蒼生　同　富里
△加登幸雄　同　成田

瀧澤元　印旛成田
根本金二　同　久住
小川英　山武千代田
赤尾照次　印旛成田
河合功　同　成田
竹田榮男　同　成田
相川義雄　同　富里
坂田順　同　富里
古矢穗美雄　同　成田
鹽澤繁男　同　成田
石橋利男　同　富里
石井小十郎　山武千代田
木内隆　印旛成田
篠田正平　同　安食
△小島照男　同　成田
諸岡政富　同　成田
服部保民　同　成田
鈴木廣通　同　遠山

第四學年A組（三十八名）主任（寺内保　淺津寅吉）

岡崎昭次　印旛安食
尾高正男　同　成田
崎山元治　同　成田
稻川隆博　同　成田
△角河武雄　同　成田
小高博　同　富里
鈴木勘一　同　富里
高橋清　同　成田
神崎秀夫　同　遠山
林田隆　同　富里
金生彦重　山武千代田
金本正行　印旛酒々井
土屋恒二　同　成田
△松本康　同　六合
押尾繁　同　成田
藤崎英司　同　遠山
白石佳博　同　遠山
小關勇　同　富里
菅澤健一　同　遠山
木川康夫　香取滑河

岩館美佐男　印旛成田
土井昭一　同　成田
佐野輝明　同　臼井
人見敏郎　同　成田
鵜澤猛　同　中郷
平山庄一　同　遠山
石橋俊夫　同　富里
林田文雄　同　富里
細井長一郎　同　本埜
田谷民夫　同　成田
鈴木宗治　同　成田
正木光雄　同　中郷
石橋弘吉　同　富里
椎名毅　香取小御門
畑耕作　印旛富里
福田敏雄　同　安食
神崎好信　同　成田
大熊恒雄　同　佐倉

第四學年B組（四十二名）主任（寺門保　淺津寅吉）

大谷家清　印旛久住
本橋文夫　同　酒々井
加藤金彦　同　八生
後藤義雄　同　成田
增村雅英　同　成田
齋藤昇　同　富里
澤田介忠　同　中郷
戸田金司　香取本須賀
石原壽夫　印旛成田
飯島守　香取神崎
江上英二　印旛成田
山崎廣　同　遠山
石井章　同　成田
萩原修　香取多古
佐久間猛夫　印旛成田
飯倉泰　神奈川縣鎌倉
門倉彌　印旛成田
寺内昭　同　成田
△石橋光雄　同　中郷
◎藤崎忠明　同　遠山

水津照良　印旛成田
齋藤宥　同　成田
根本廣司　同　久住
小川孝　山武千代田
大野孝夫　印旛成田
小林陽一郎　同　成田
△淺井聰明　同　成田
◎後藤晃雄　同　八生
寺内正次　同　成田
野々宮均　同　成田
岩澤浩　山武千代田
吉岡和巳　印旛中郷
◎高橋俊吉　同　成田
淡路林造　同　成田
平山軍治　同　遠山
金子信　同　中郷
飯田廣　同　成田
飯塚信吉　香取本大須賀
岩田照慶　印旛成田
加藤哲男　同　成田

田中榮一　同　成田

第三學年A組（五十一名）主任（松山俊雄　原武雄）

村上三郎　香取小御門
武田亘之　印旛公津
大木秀雄　同　成田
三橋哲郎　同　成田
藤崎五郎　同　安食
武井利男　同　木下
山田金治　同　成田
高柳澄　同　豊住
荒井三郎　同　布鎌
渡邊龍正　同　成田
一鍬田昭　同　中郷
△◎龍崎利夫　香取多古
石井秀男　山武千代田
渡邊敏　印旛成田
小川晴　山武千代田
澤田章　印旛中郷
野平和也　同　豊住
秋谷義雄　同　安食
後藤晋一　同　八生

高柳正平　印旛遠山
藤崎博雄　同　八生
田中義一郎　同　富里
磯山忠雄　同　公津
山田太一　同　豊住
新橋幸一　同　成田
勝田嘉夫　同　安食
△◎齋藤喜雄　同　成田
桑田貢　香取高岡
藤崎馨　印旛遠山
瓜生成和　同　成田
櫻井春孝　香取小御門
小倉英一郎　印旛八生
渡邊公　同　成田
諸岡正巳　同　成田
石井寛一　同　遠山
三須恭夫　同　成田
林茂　同　八生
向後秀夫　同　成田

諸岡和男　同　成田
青木吏　同　本埜
海老原良介　印旛安食
秋葉武　山武千代田
本橋忠　印旛成田
太田家廣　同　公津
加納輝治　香取本大須賀
足立邦彦　東葛飾我孫子
飯田磐　印旛遠山
藤本順三　同　成田
山口龍四郎　茨城縣金江津
高橋三郎　印旛公津
土屋勝雄　同　成田

第三學年B組（五十一名）主任（於山俊雄原武雄）

富澤英雄　香取滑河
宮内俊雄　印旛八生
岡田比露思　同　本埜
大久保昭一　香取高岡
木川忠　印旛中郷
鈴木三郎　同　公津
京須春雄　同　成田
林田榮司　同　安食
大竹清介　同　遠山
齋藤滋　同　遠山
寺内昭　同　中澤
山崎操　印旛志津
越川榮重　同　遠山
△橋本照稔　同　成田
木村實　山武千代田
谷口中　同　佐倉
渡邊淳一　同　成田
增淵伊一　同　安食
井上裕　同　本埜
山内崇之　同　成田
戸村登　山武二川
安原吉治　印旛公津
龜谷照雄　同　成田
武藤吉仲　同　永治
石井菊次郎　山武千代田
日暮義重　印旛成田

細野三千雄　同　遠山
内田寅雄　山武二川
塚本昭　印旛久住
戸村進　山武千代田
關川欽也　印旛成田
木内八郎　同　成田
荻原剛　山武千代田
石井重治　印旛安食
石橋英　同　公津
粉名内佑吉　同　成田
岩井正躬　同　安食
浮島正美　同　富里
池田喜九男　同　富里
伊藤穎一　同　久住
高橋久雄　香取滑河
鈴木秀男　印旛遠山
卯之木三基夫　同　安食
△竹村元良　同　富里
小手武雄　同　永治
大谷裕康　同　臼井
日暮龍夫　同　成田
菊地正　同　成田
山本茂　同　成田
川邊春光　同　成田
山田晃平　同　公津

夏海充　印旛成田
門倉克和　同　成田
△木下克巳　同　成田
松田進　同　八生
山口博司　同　八生
高山承晞　同　成田
寺内律　同　成田
藤崎毅　同　成田
林昭雄　福井縣福井市
實川照男　印旛遠山
金井一雄　同　成田
萩原和美　同　遠山
椎名昭之助　同　富里
江上三郎　同　成田

第二學年A組（五十五名）主任（片山辰雄邊田金治郎）

廣瀨多津郎　東葛飾布佐
加藤嘉明　印旛中郷
渡邊光一　同　成田
佐藤忠雄　同　成田
◎△武田勇　同　中郷
山田昭之助　同　安食
湯淺喜久男　同　八生
內藤昭三　茨城縣金江津
小島竹夫　東葛飾布佐
岩間榮八　印旛成田
潮田光四郎　同　成田
大竹禎　香取本大須賀
京增芳雄　印旛成田
實川恒男　山武千代田
清宮與一　印旛公津
根本明　同　豐住
沼崎慣二　同　成田
秋山有　同　志津
相川博　同　成田
青柳茂治郎　山武千代田
多田昭雄　印旛中郷
石井馨　同　公津
木多晃　同　遠山
一鍬田和　同　中郷
伊藤義健　同　木下
石井昭三　同　豐住
渡邊勇　同　富里
齋藤辰男　同　安食
加藤昌男　同　成田
重田惠　同　成田
海保保喜雄　同　久住
岩澤富次郎　同　成田
神崎政明　同　久住
小川喜平　同　遠山
田中豐二　同　成田
竹井昭一郎　同　本埜
後藤忠司　同　八生
日暮喜一　同　成田
鈴木明　同　遠山
川島和二　同　成田
戸村義男　山武千代田

第二學年B組（五十六名）主任（片山辰雄邊田金治郎）

堀木佑介　印旛成田
米井昭治　同　船穗
木村政夫　香取米澤
伊藤實　印旛富里
田中五郎　同　遠山
石井光夫　同　成田
◎△小島鑑　同　成田
木村信夫　同　富里
多田保　同　遠山
小川久夫　山武千代田
山田雅一　印旛成田
吉澤和　同　成田
小川正義　同　遠山
椎名治四郎　同　成田
大野昭一　同　成田
鶴山茂夫　同　成田
三橋哲彌　同　成田
加藤光雄　同　八生
高橋愈　同　成田
加勢武德　同　成田
後藤肇　印旛安食
黑田二九六　同　成田
京須德彥　同　成田
戸村文男　山武千代田
小石川昭三　印旛遠山
藤崎丈夫　同　富里
郡司清四郎　同　遠山
齋藤守　同　富里
長崎進　香取本大須賀
高橋昭吉　印旛成田
芦田幸吉　同　成田
若松達雄　同　久住
平山平亮　山武千代田
△柳田金之助　印旛富里
平山忍　同　遠山
鈴木尙孝　同　成田
青野新平　茨城縣金江津
香取道雄　印旛船穗
丸勝治　同　公津
大木甚一　同　公津

菱木熊榮　印旛成田
高橋壽　同　壽
武井照　同　木下
鹽田那雄　同　布鎌
齊藤一郎　同　成田
高橋清五　同　成田
小川實　山武千代田
飯島和治　印旛大森

岩井伊彦　同　本埜
日暮照　同　安食
伊藤甫　山武千代田
篠田幸男　印旛遠山
山田光一　同　成田
飯田輝男　同　成田
石井一郎　同　富里
伊藤巖　同　遠山

第一學年A組（四十三名）主任（宮野恭造　三橋鐵一）

金本光弘　印旛成田
大木孝　同　成田
坂本照忠　同　成田
湯淺四郎　同　八生
高須賀源平　同　酒々井
岩館重明　同　久住
秋山秀吉　同　八生
△輔谷豪男　同　八生
石橋昌二　同　富里

檜垣七郎　同　久住
鈴木久生　同　富里
山口凱史　同　八生
山内昇　同　成田
高岡利男　同　遠山
萩原己木夫　山武千代田
伊藤邦彦　印旛成田
松丸昭五　香取滑河
大德茂　印旛中郷

渡邊善治　同　成田
寺本俊彦　同　八生
山田達夫　同　成田

大藤文男　同　安食

高橋仲洋　同　遠山
磯山義一郎　同　公津
鈴木平治　山武千代田
大越好一　印旛大森
藤本芳男　同　成田
小島一衛　同　成田
泉水正敏　同　公津
長谷川昌夫　同　成田
△山口庚兒　茨城縣金江津
石原朝夫　印旛成田
大澤美津雄　同　安食

關川欽也　同　成田
石原照夫　同　成田
石川孝一　同　富里
木川彰　香取滑河
宮崎照雄　同本大須賀
齋藤昭巳　印旛酒々井
大木信夫　同　成田
鈴木俊夫　同　遠山
篠田兼雄　同　安食
醒醐久吉　山武千代田

第一學年B組（四十二名）主任（宮野恭造　三橋鐵一）

△竹村正　印旛遠山
篠田惣介　同　豊住
大木忠郎　同　成田
山田照郷　同　成田
高橋清二　同　成田
鶴田滋夫　同　成田
小川薫　同　遠山
鈴木三千男　香取本大須賀
瀨尾靜　印旛安食

内田美澄男　同　佐倉
井上榮亮　同　成田
諸岡四郎　香取本大須賀
宮内秀一　印旛成田
櫻井正夫　同　成田
丸正衛　同　公津
中野惣平　同　遠山
渡邊照明　同　遠山
篠原正義　同　富里

渡邊正　同　成田
神崎勳　同　成田
岩本倶男　同　成田
伊達武夫　同　中郷
鈴木旭　同　豊住
小川武則　同　成田

吉村照　同　成田
怒賀正己　山武二川
戸村伸　同　千代田
鈴木一夫　印旛布鎌
萩原利一　同　遠山
佐藤和男　同　成田

石川昌平　同　遠山
細井貞雄　同　本埜
△宍倉三郎　同　公津
飯塚一郎　同　成田
冲田正明　同　八生
飯塚伊佐美　香取本大須賀

服部治男　印旛富里
大三川智男　同　安食
大堀宏太郎　同　成田
海保秀夫　同　八生
今保章　茨城縣金江津
匡　印旛成田

五　卒業生及生徒郡別表（昭和十七年四月現在）

學年級	郡	印旛	香取	山武	千代田	市原	東葛	匝瑳	海上	長生	夷隅	君津	安房	他府縣	計
第五學年	A組	三四	一	二											三七
	B組	三三	二	三											三八
第四學年	A組	三五	二	一											三八
	B組	三五	四	二										一	四二
第三學年	A組	四一	五	三			一							一	五一
	B組	四二	三	六											五一
第二學年	A組	四八	一	三			二							二	五五
	B組	四八	二	五										一	五六

	第一學年 A組	第一學年 B組	計	卒業生
	三六	三六	三八七	一、三六二
	三	三	二六	一〇九
	三	二	三〇	九六
				八
				四
			三	三
				五
				一
				五
				四
				四
				七
	一	一	七	一〇八
	四三	四二	四五四	一、六一五

第四　歷代校主・顧問

校長・主監

一、校　主

石川照勤（明治三十一年七月―六正十三年一月）
校主兼名譽校長

荒木照定（大正十三年二月―現在）

二、顧　問

白鳥庫吉（明治四十一年九月―昭和十七年四月）

喜田貞吉（明治三十一年十一月―三十二年八月）

竹内楠三（明治三十二年八月―三十四年七月）

石川照勤（明治三十四年七月校主自ラ學校長ヲ兼ネ、以後大正十三年笹川氏就任マデ、實務代理又ハ主監ヲ置キテ統監ス）

粟根鐵藏（校長事務代理）―（明治三十五年七月―四十一年九月）

葛原運次郎（校務主監）―（明治四十一年九月―大正二年七月）

佐竹元二（同）―（大正二年七月―大正五年三月）

佐藤禮云（同）―（大正五年三月―大正八年七月）

濱田丑之助（同）―（大正八年七月―大正九年九月）

名川彦作（同）―（大正九年九月―大正十三年一月）

笹川種郎（學校長就任）―（大正十三年一月―同十四年三月）

小林力彌（同）―（大正十四年三月―昭和三年五月）

增田　榮（同）―（昭和三年五月―同九年五月）

今澤慈海（同）―（昭和九年五月―同十五年四月）

横田泰邦（同）―（昭和十五年四月―現在）

第五　職　員

（昭和十七年四月末現在）

受持學科	職名	氏名	原籍	就職年月
修身	校主兼名譽校長兼教諭	荒木照定	千葉縣	大正十三年二月
修身・英語	教諭	横田泰邦	愛知縣	昭和十五年四月
國語・漢文・實業	教諭	川瀨信雄	岐阜縣	昭和十六年一月
國語	教諭	片山辰雄	長崎縣	昭和四年四月
地理・公民	教諭	三門健一	千葉縣	大正十五年四月
博物・一般理科・農業	教諭	寺内保	千葉縣	大正十四年四月
英語	教諭	落合健	山口縣	昭和十七年四月
英語	教諭	宮野鑛一	東京府	昭和十六年八月
圖畫・工作	教諭	三橋寅吉	廣島縣	昭和十七年四月
柔道	教諭兼書記	淺津榎	新潟縣	昭和十七年四月
數學	教諭	田齋半	埼玉縣	大正七年一月
數學	教諭	藤正己	千葉縣	昭和十二年十月
國語・漢文	教諭	原武雄	靜岡縣	昭和十五年四月
教練	教諭心得	松山俊雄	千葉縣	昭和九年十月
英語	囑託	細矢末吉	千葉縣	昭和三年四月
歷史	囑託	中林謙二	東京府	昭和十六年十月
劍道・習字・園藝	囑託	田長實	東京府	昭和十六年六月
		田邊金治郎	千葉縣	昭和五年四月

成田高等女學校

教練・體操	囑託	齋藤理平	千葉縣
音樂	囑託	岡田二郎	廣島縣
漢文・作文	囑託	大石雅次郎	福岡縣
物理・化學	囑託	川崎武親	福岡縣
物理・化學・數學	囑託	横田哲郎	愛知縣
劍道教練	教師兼書記配屬將校陸軍中尉	南井榮助	千葉縣
	白石校醫	白石利道	千葉縣
	高川齒科	高川直三郎	千葉縣
	萩原校醫	萩原村次	千葉縣
體操教諭	囑託	島田政治	千葉縣
英語	囑託	西原鹿之助	靜岡縣

昭和十六年七月	昭和十六年四月	昭和三年九月	昭和十六年五月
昭和十六年五月	明治三十四年四月	昭和十四年一月	明治三十三年九月
昭和五年五月	昭和十三年四月	昭和四年四月	

第六　經費

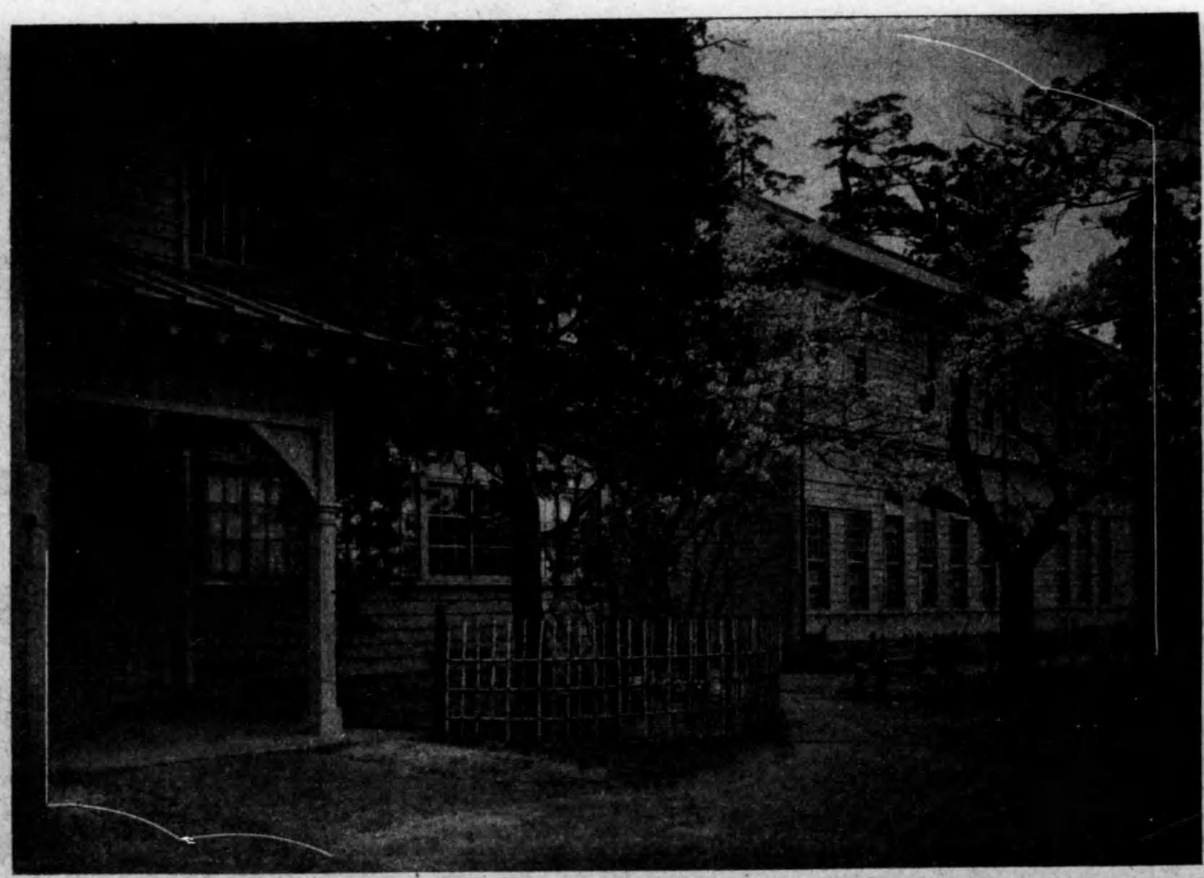
年度／費目	俸給	雜給	需用費	雜費	賞與	退職慰勞	營繕費	計
昭和十六年度決算額	二六、三九一、〇〇円	二、九五六、一〇円	四、一三七、〇〇円	三、五九、七〇円	五、三二、〇〇円	一、九一五、〇〇円	二、七〇八、五〇円	四七、〇七八、四一円

寫眞

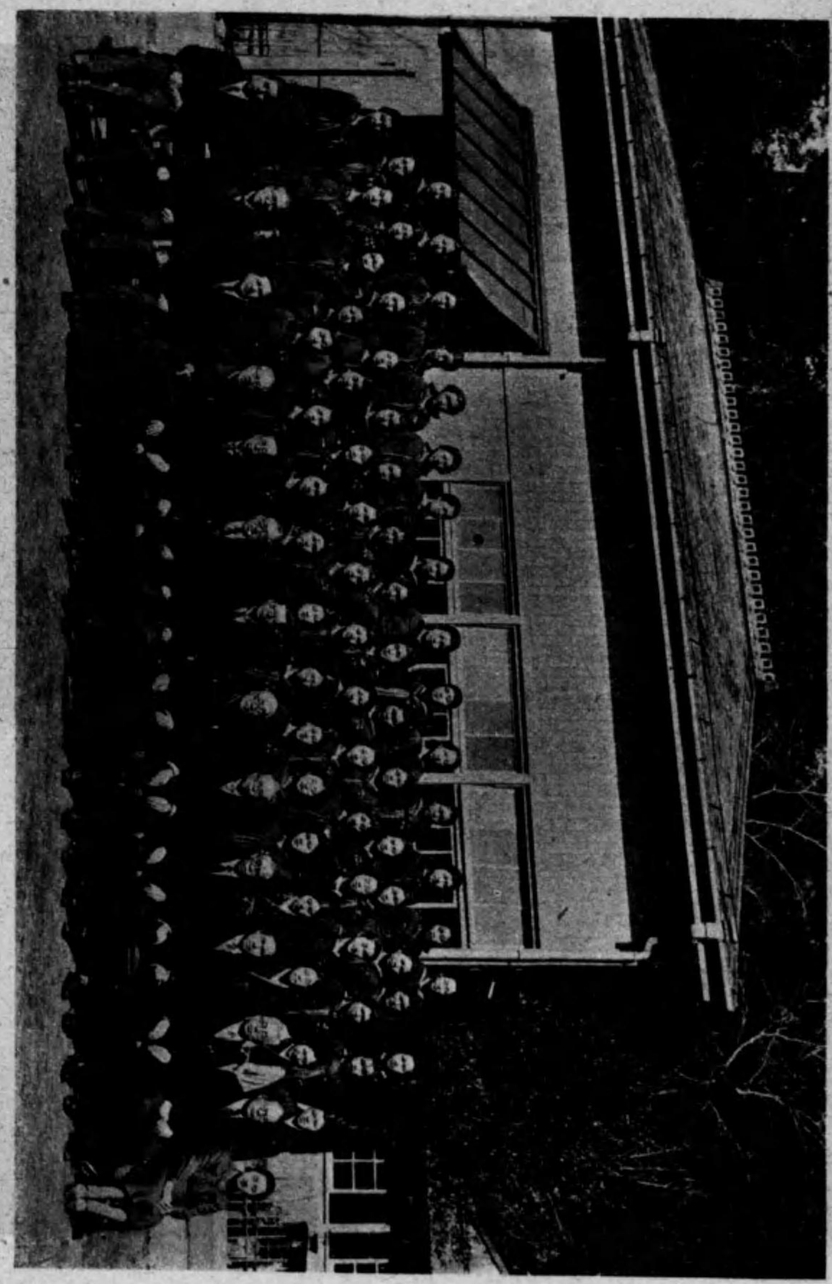
成田高等女學校々歌及び成田高等女學校一覽　創立記念日唱歌

昭和十六年度

第壹　位置並びに沿革……一
第貳　設備並びに施設……一〇
第參　教育方針……一一
　一　昭和十六年度行事概要……一四
　二　校時表……一七
　三　局綴的施設……一八
　四　應對施設……一九
　五　狀況調……二一
　六　年度別卒業生數……二一
　七　年度別卒業生氏名（第三十一回）……二二
　八　郡別卒業生の各種學校入學調……二三
　九　職業別調……二三
　十　家庭身分別卒業生の卒業後狀況調……二三
　十一　出身地別卒業生に對する各學校入學調……二三
　十二　學徒數……二三
　十三　學徒氏名……二三
　十四　學徒出身地別調……二七
　十五　生徒數……二七
　十六　生徒主任……二八
　十七　生徒顧問……二八
　十八　職員……二八
　十九　職員……二八
　二十　職員……二八
　二十一　職員……二八
　二十二　職員……二八
　二十三　職員……二八
　二十四　職員……二八
　二十五　職員……二八
　二十六　職員……二八
　二十七　職員……二八
　二十八　職員……二八
　二十九　職員……二八
　三十　職員……二八
　三十一　職員……二八
　三十二　職員……二八
　三十三　職員……二八
　三十四　職員……二八
　三十五　職員……二八
　三十六　職員……二八



成田高等女學校



（昭和三年七十卒）生業卒回一十三第

校歌・記念日唱歌

成田高等女學校々歌

笹川種郎作歌
山田耕筰作曲

（一）曉の榮ある光
眠より覺めし乙女ら
美しき望は滿てり
永の夜の闇を破る
なれの世ぞ今目の前に
學びの窓は樂しき園生
幸ある前途いざことほがん

（二）成田なる岡の邊に咲く
雪霜を凌ぎ堪へつゝ
清き香は四方に漂ふ
千枝五百枝萬枝の梅
さきがけし色匂やかに
學びの窓は樂しき園生
幸ある前途いざことほがん

（三）鐘の音は朝な夕なに
御堂より森へと響く

怠るな勤めはげめと
澄み渡る心耳に冴えて

我等をば教へ導く
學びの窓は樂しき園生
幸ある前途いざことほがん

成田高等女學校創立記念日唱歌

佐藤國二作歌

(一) 君が代の榮ある光浴みて
幸先ゆたけく產聲高く
祝ひて歌はん嬉しき此の日

松の緑そふ成田丘邊
生れし園生に學ぶ我等

(二) 梅が香のけ高き望胸に
長へに榮えん學びの窓の
喜びしのばんゆかしき此の日

清く潔き操もちて
開けし其の上今日にぞある

(三) 春來れば櫻の雲の臺
懇に少女の若やぐ心
歌ひて祝はん樂しき此の日

秋は萩の花匂ひこぼれ
導き教ゆる美しき園生

位置	千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境內ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、(電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續)
沿	本校ハ成田山經營ニ屬スル教育事業ニシテ私立成田山女學校ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ 明治四十一年二月成田山女學校設置認可、同時ニ前貫主故石川僧正校主トナル、同四十四年二月成田山女學校廢止、成田高等女學校設置認可、同時ニ前貫主石川僧正校主トナル、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫主荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナル、昭和二年三月荒木校主名譽校長ニ推戴セラル、明

成田高等女學校創立記念日唱歌

佐藤國二作歌

(一) 君が代の榮ある光浴みて
幸先ゆたけく產聲高く
祝ひて歌はん嬉しき此の日

松の綠そふ成田丘邊
生れし園生に學ぶ我等

(二) 梅が香のけ高き望胸に
長へに榮えん學びの窓の
喜びしのばんゆかしき此の日

清く潔き操もちて
開けし其の上今日にぞある

(三) 春來れば櫻の雲の臺
懇に少女の若やぐ心
歌ひて祝はん樂しき此の日

秋は萩の花匂ひこぼれ
導き教ゆる美しき園生

幸ある前途いざことほがん

昭和十六年度 成田高等女學校一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境內ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、(電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續)

沿革

本校ハ成田山經營ニ屬スル教育事業ニシテ私立成田山女學校ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ
明治四十一年二月成田山女學校設置認可、同時ニ前貫主故石川僧正校主トナル、同四十四年二月成田山女學校廢止、成田高等女學校設置認可、同時ニ前貫主石川僧正校主トナル、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫主荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナル、昭和二年三月荒木校主名譽校長ニ推戴セラル、明治四十五年三月第一回卒業生ヲ出シテヨリ昭和十七年三月ニ至ル迄三十一回ノ卒業生ヲ出ス、此間校務主監ノ交迭五名、校長ノ交迭三名

設備

校地一、〇六八坪、校舍ハ木造二階建ニシテ普通教室四・講堂一・特別教室七・外ニ職員室・校長室其他各室アリ、其ノ坪數計四一一坪

方針

本校ノ教育方針ハ教育勅語ノ御趣旨ヲ奉戴シテ其ノ實踐ヲ期シ、學業ヲ勵ミ、淑德ヲ重ンジ、將來健全ナル一家ノ主婦タリ母タルベキ人格ヲ完成スルコトヲ主眼トス

教育施設

教授

各學年教授ニ學則ニ據ル

學習的施設
- 課外救授
- 見學旅行

訓練

要目ニ貞淑・明朗・節制・感謝・勤勞

施設
- 朝禮・禮拜・參拜・墓參・護摩修行・慰問・奉仕・自彊會・來客接待・新聞雜誌郵便物整理・校舍內外清掃・貯蓄組合・勤勞奉仕團
- 訓話・講演・事變寫眞畫報掲示
- 不動尊・埴生神社參拜(每月一日及隨時)
- 下志津飛行學校見學
- 生徒父兄ノ出征者ニ慰問袋贈呈
- 出征父兄アル生徒ノ授業料減免
- 戰病死勇士ノ墓參(每月一日及隨時)同遺家族慰問、出征家族ノ慰問
- 町內戰歿勇士ノ町葬參列

速絡ニ父兄會開催・家庭訪問

施設

- 本校國民貯蓄組合ノ貯金增額
- 三里塚御料牧場成田公園、成木新田縣營農場ニ集團勤勞奉仕
- 公津新田、甚兵衞渡、滑河町ニ强行遠足
- 成田町軍人援護奉公會ニ寄附金

校務

一總務部ニ企畫・統制

- 二鍛錬部ニ武道・運動・遠足・旅行・勤勞
- 報國團
  - 三國防訓練部ニ防空・銃後奉公・非常警備
  - 四學藝部ニ科學・藝能・講演・映畫・圖書
  - 五生活部ニ衞生・救護・配給・整理・掃除
- 教務ニ教授訓練指導・監督・調査研究
- 衞生・統計等
- 事務ニ庶務・會計

生徒狀況

卒業生總數		一、二三六
學級數	(昭和十七年四月末現在)	二四
生徒數		二三六
年度內入學者		六三
年度內卒業者		五六
年度內卒業者ノ後ノ狀況	各種學校入學者	二九
	職業從事者	七
	其他	二〇

校主名譽校長	成田山貫首大僧正 荒木照定
顧問	文學博士 笹川種郎
校長	舟越文教
職員	一七
經費	昭和十六年度決算額 二七、七三九・一一

成田高等女學校

第壹　位置並びに沿革

一　位　置

本校は成田町成田十五番地にあり。東に中學校を控へ、西に圖書館を擁し、背部卽ち北方は、成田山公園舊花園の丘腹に接して、亭々たる古松、巨木は鬱蒼と茂り、南は成田の街衢を展望し、夏は涼しく、冬暖かに眞に女子教育の場所として好適の所である。

二　沿　革

本校は成田山經營に屬する女子教育事業にして、もと『私立成田山女學校』として創立し、後「成田高等女學校」と改稱せられたものであるが、創立當時前貫首故石川大僧正校主兼校長となりてこれが經營の任に當られ、大正十三年一月同師遷化後は、現貫首荒木大僧正校主兼名譽校長として其經營を繼承し、逐年益々其の實績を向上されつゝある。

本校には校主の補佐として理事を置く。理事中石川甚兵衛氏、三橋金太郎氏は創立當初より其の任に當り、石川氏は專務理事となる。（石川氏は、昭和十三年四月十七日他界せらる。）

創立當初よりの沿革を列記すれば、大體次の通りである。

一　明治四十一年二月二十一日本縣知事より私立成田山女學校設置の件認可さる。

一　明治四十四年二月十三日文部大臣より私立成田山女學校を廢し、成田高等女學校設置の件認可さる。

一　明治四十四年三月二十一日校則を制定す。

一　明治四十四年四月一日成田中學校教諭中島喜　校務主監兼教諭に任ぜらる。

一　明治四十四年四月一日、二日の兩日を以て二・三・四年の編入試驗を行ふ。

一　明治四十四年四月五日合格者八十四名に入學を許可し、

これを本科第四年以下に編成し、同日始業式を行ふ。
一　明治四十五年三月第一回卒業生を出し、千葉縣知事臨席す。
一　大正元年十一月增築の講堂兼雨天體操場・理科教室・普通教室等竣工す。
一　大正二年九月校務主監兼教諭中島喜一休職を命ぜらる。
一　大正二年十月、理學士菅野皆可校務主監兼教諭に任ぜらる。
一　大正六年十一月菅野校務主監休職を命ぜらる。
一　大正六年十一月文學士中村安之助校務主監兼教諭に任ぜらる。
一　大正八年十月中村校務主監死去。
一　大正八年十二月文學士矢野太郎校務主監兼教諭に任ぜらる。
一　大正十二年十二月矢野校務主監依願解職。
一　大正十三年一月校主兼校長石川大僧正御遷化。
一　大正十三年二月成田山貫首荒木大僧正校主の認可を受く
一　大正十三年二月文學士笹川種郎校長に任ぜらる。
一　大正十三年五月元神奈川縣立横濱第一中學校教諭佐藤國二校務主監兼教諭に任ぜらる。
一　大正十四年三月笹川校長辭任。
一　大正十四年三月校務主監兼教諭佐藤國二校長兼教諭に任ぜらる。
一　大正十四年四月笹川前校長本校顧問となる。
一　大正十四年七月理事小野寺精三郎死去。
一　昭和二年三月校主荒木大僧正を名譽校長に推戴す。
一　昭和二年四月理事三橋重郎兵衛病氣辭任す。
一　昭和十三年三月理事制を廢止す。
一　昭和十七年三月第三十一回卒業生五十六名を出す、これを以て卒業生累計一千二百三十六名となる。

第貳　設備並びに施設

一　設備

一　校地坪數　一、〇六八坪
二　校舍建物坪數　四一一坪
三　設備（校舍ハ木造二階建）

室名	數	坪數	室名	數	坪數
普通教室	四	八一・五〇	校長室	一	八・七五
職員室	一	一二・二五	講堂（音樂堂）	一	六〇・〇〇
事務室（兼宿直室）	一	三・七五	物置	二	一四・〇〇
昇降口	二	一二・五〇	小使室	一	六・二五
家事室	二	二二・〇〇	洗面所	三	三・二五
理科室	一	二二・五〇	便所	三	一〇・〇〇
器械標本室	二	一七・五〇	裝理室（兼舞生室）	一	三・七五
裁縫室	二	二二・五〇	作法室	一	一五・〇〇
圖書室	一	八・七五	寫眞暗室	一	一・〇〇
弓道場	一	一〇・〇〇			

二　教育方針

本校の教育方針は、教育勅語の御趣旨を奉戴して其の實行を期し、學業を勵み、淑德を重んじ、女子たるの本分を遵守せしむるは勿論、特に貞淑・明朗・節制・感謝・勤勞を訓練の要目として、之が良習を養ひ、常に心身の鍛錬を怠らず、以て將來一家の健全なる主婦たり、母たるの人格を完成することに努めてゐる。

而して生徒の學資に關しては、可成父兄の負擔を輕減することに留意し、學資支辨に困難なる者の爲めには、貸費若くは補助制度を設け、奬學の爲めには特待生・優等賞・精勵賞等の制をも定め、又學科に於ては、正科の外隨意科目として手藝・挿花・茶の湯・按摩を課し、體操科には、薙刀を加へ更に鍛錬部の一事業として弓道を課して武士道精神を體得せしめ、音樂科にはオルガン數基の外ピアノ二基を備へて、生徒に指導練習せしめ、校歌並びに創立記念日唱歌を制定して本校の理想を明示し、併せて溫雅優美の情操を助長せしめることに努めてゐる。

三　校則

第一章　總則

第一條　本校ノ修業年限ハ本科四箇年トス
第二條　生徒定員ハ二百人トス
第三條　休日ハ左ノ如シ
一　祝日・大祭日
二　日曜日
三　皇后陛下御誕辰
四　創立記念日二月十三日
五　夏季休業七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル
六　冬季休業十二月二十六日ヨリ翌年一月七日ニ

第四條　本校ノ學科目ニ編物袋物挿花按摩茶ノ湯ヲ加ヘ隨意科目トス

第二章　學科課程教授時數

第五條　學科課程及ビ教授時數左ノ如シ

學年 / 學科目	第一學年 毎週時數	第一學年 時數	第二學年 毎週時數	第二學年 時數	第三學年 毎週時數	第三學年 時數	第四學年 毎週時數	第四學年 時數
修身	二	人倫道德要旨	二	同上	一	同上	一	同上
公民					一		一	
國語	六	講讀作文 習字法	六	同上	五	同上	五	同上
英語	三	讀書取方 譯解習字	三	同上	三	讀方譯解書取文法作文	三	同上
歷史地理	三	本邦歷史 本邦地理	三	同外國地理	三	外國歷史同	三	同上國史地理通論
數學	三	整數小數諸等珠算	三	約分倍數比例代數初步	三	比例代數初步合算	三	開平方幾何初算珠算
理科	二	植物動物	二	前學年の續生理衛生鑛物	三	化學物理	三	同上
圖畫	一	自在畫	一	同上幾何畫	一	同上		
家事					二	衣食住	三	家政看病育兒等
音樂	二	單音唱歌	二	同上	一	同復習唱歌	一	同上
裁縫	四	裁縫方	四	同上	四	同上	四	同上
體操	三	普通體操遊戲	三	同上	三	同上	三	同上
教育							一	理論の大要
計	二九		二九		三〇		三一	
編物袋物	(一)	編物	(一)	同上	(一)	袋物	(一)	同上
挿花茶湯	(一)	挿花	(一)	同上	(一)	同茶湯上	(一)	同上
按摩					(一)	按摩	(一)	同上

備考　編物、袋物、挿花、茶湯、按摩ヲ課外ニ於テ志願者ニ課ス

第三章　入學及退學

第六條　生徒募集ハ學校長期日及人員ヲ定メ之ヲ公示スベシ

第七條　入學志願者ハ本校所定ノ入學願書ヲ差出スベシ

第八條　一學年入學志願者ハ國民學校長ノ内申ニ基ヅキ口頭試問及身體檢査ニ依リテ之ヲ檢定ス

第九條　前條ノ試問ハ國民學校初等科卒業程度ニ依リテ之ヲ行フ

第十條　他校ヨリ轉入學ヲ願出デタル者ニハ缺員アル時ニ限リ人物學力ヲ檢定ノ上許可スルコトアルベシ、入學ヲ許可セラレタル者ハ在學證書ニ戸籍謄本ヲ添ヘテ差出スベシ

第十一條　（在學證書ハ印刷シアルヲ以テ省略ス）

第十二條　保證人ハ親權者若クハ後見人又ハ親族ニシテ一家計ヲ立テ本人ニ關シ一切ノ責ヲ負フニ足ルベキモノタルベシ

第十三條　保證人ノ住所學校所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在ルトキハ一里以内ニ住所ヲ有シ一家計ヲ立ツル者ヲ以テ代理保證人ト定メ保證人連署ノ上之ヲ學校長ニ屆出ヅベシ

第十四條　學校長ハ必要ト認ムルトキハ保證人又ハ代理保證人ヲ變更セシムルコトアルベシ

第十五條　保證人若クハ代理保證人住所氏名ヲ變更シ又ハ改印シタル時ニハ直チニ學校長ニ屆出ヅベシ

第十六條　生徒退學セントスルトキハ其理由ヲ記シ保證人連署ノ上學校長ニ願出ヅベシ

第十七條　生徒病氣其ノ他止ムヲ得ザル事由ニ依リ三ケ月以上出席シ難キ時ハ期間ヲ定メ休學ヲ願出ヅルコトヲ得

但シ一ケ年ヲ超ユルコトヲ得ズ

第四章　修了及卒業

第十八條　各學科ノ課程ノ修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績ヲ考査シテ定ムベシ

第十九條　卒業證書及修業證書ハ所定ノ形式ニ依ル

第五章　授業料及入學料

第二十條　一　授業料ハ月額金參圓トシテ毎月十日迄ニ之ヲ納メ特ニ其期日ヲ指定シタル時ハ其當日納ムベシ

但シ毎年八月ハ之ヲ徴收セズ

二　入學志願者ハ入學考査料金壹圓ヲ納付スベシ

第廿一條　入學料ハ金壹圓トシテ入學許可ノ際之ヲ徴收ス

第六章　賞罰

第廿二條　品行方正學術優秀ナル者ハ特待生トシテ授業料ノ全部又ハ一部ヲ免除シ若クハ賞品褒狀ヲ與フ

第廿三條　學校長ハ左ノ各項ニ該當スル者ニハ退學ヲ命ズ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二　成業ノ見込ナシト認メタル者

三　出席常ナラザル者

第廿四條　規則命令ニ違背シ學校ノ風紀ヲ害スル者ハ其ノ輕重ニ依リ戒飭停學又ハ退學ニ處ス

第廿五條　生徒取締ニ關スル規定ハ學校長之ヲ定ム

第七章　附則

第廿六條　本校則施行ニ關スル細則及ビ其ノ他必要ナル內規ハ學校長之ヲ定ム

四　昭和十六年度行事概要

四　月

七　日　入學式並ニ始業式。新入生ノ父兄會。

岡崎教諭新任披露式。

二年級以上級長改選。

八　日　新入生學力考査。

午後新更會ノ花祭ニ參加。

一四日　圓城寺教諭新任披露式。

入營兵及從軍看護婦歡送。

一六日　故石川理事慕參。

二三日　故海軍三等兵曹山崎英治氏ノ銃後奉公會葬ニ參列

二九日　天長節祝賀式擧行。

三〇日　身體檢査。

五　月

一　日　興亞奉公日ノ行事ヲ實施ス。

大清水ニ遠足。

三　日　成木新田縣營農場ノ開墾作業ニ從事（四年級）

六　日　映畫鑑賞（午前中花咲館ニ於テ）

一〇日　體操大會參加體操會開催。

二六日　本日ヨリ三日間中間考査。

二七日　海軍記念日。吉井少佐ノ講演アリ。

二九日　笹川顧問ノ講話アリ。

三一日　三木教諭辭任ニツキ送別式ヲ擧グ。

六　月

三　日　下總御料牧場ニ全校除草作業。

四　日　前日ニ同ジ。

五　日　除草作業終了。

一〇日　成木新田縣營農場ニ集團勤勞作業。

一一日　前日ニ引續キ勤勞作業。

一六日　傷病兵ノ慰安會ヲ講堂ニ開ク。

一九日　交通道德ニ關スル映畫會ニ參加。

禮法要綱ヲ全生徒ニ配布ス。

二三日　身體檢査。

二四日　成田町農會ニ勤勞奉仕。

二五日　前日ニ同ジ。

二七日　不動丘ニ勤勞奉仕。

二八日　齒牙檢査。坂齋視學官來校。

七　月

一　日　興亞奉公日ノ行事實施。

支那事變記念日。堂庭ニ於ケル町民大會ニ參加。

午後新更會ノ映畫會ニ臨ム。

七　日　藤原本縣知事巡視。

九　日　本日ヨリ四日間第一學期末考査。

一二日　國民學校ニ於ケル映畫會ニ臨ム。

一七日　汽車通學肅整會ノ班長ニ徽章傳達。

一八日　切替教諭新任披露式。

二一日　第一學期終業式。

三一日

八　月

一　日　興亞奉公日ノ行事實施。全校清掃作業。

四　日　不動尊境內及公園ノ清掃作業。農園ノ手入。

五　日　本日ヨリ二十五日マデ家庭勤勞。

二六日　校舍內外大掃除。幼稚園除草作業。

二七日　三里塚ニ於ケルグライダー練習所見學。

九　月

一　日　興亞奉公日ノ行事實施。

第二學期始業式。報國隊編制。
八　日　本日ヨリ第二時ト第三時トノ間ニ全校體操實施。
一六日　宮崎職業指導所長ノ講話アリ。
一八日　滿洲事變十週年記念日。神社參拜。講話。
二〇日　航空記念日講話。
二二日　千葉縣女子中等學校體育大會ニ本校弓道部出場。
二七日　三國同盟記念日講話。

十　月

一　日　興亞奉公日ノ行事實施。
三　日　軍人援護ニ關スル勅語奉讀式。訓話。
八　日　龍角寺方面ニ遠足。
一三日　文部省督學官前田氏巡視。
二二日　午後講堂ニ於テ映畫會。
三〇日　教育勅語渙發記念日。奉讀式。訓話。

十一月

一　日　興亞奉公日ノ行事實施。
三　日　明治節祝賀式擧行。
四　日　司法保護映畫會ニ全校參加。
五　日　第十五回大運動會擧行。
八　日　衞生講話。
一八日　東京上野公園ニ見學旅行。文展、博物館見學。

十二月

一　日　興亞奉公日ノ行事實施。
　日滿華三國ノ東亞新秩序宣言第一週年記念講話。
二　日　成木新田縣營農場ニ麥ノ移植作業奉仕。
三　日　第二時成田中學校教練査閲見學。
八　日　宣戰ノ大詔渙發セラレシニツキ奉讀式並ニ訓話。
　埴生神社、不動尊參拜。
一〇日　第四時限ヨリ學藝會開催。
一三日　大政翼贊會推進員大會ノ講演ヲ聽ク。
一八日　第二學期末考査本日ヨリ三日間。
二二日　軍用肩章作製。
二七日　第二學期終業式。

十七年一月

八　日　第一回大詔奉戴日ノ行事ヲ實施。
　第三學期始業式。
一六日　生徒關係ノ出征者ニ慰問袋ヲ發送ス。
二三日　防空訓練、翼贊會映畫見學。
三一日　滑河町ニ耐寒行軍ヲ行フ。

二　月

一〇日　全校健康診斷。
　寺臺區ニ麥踏作業。
一一日　紀元節祝賀式。午前十時ヨリ成田町主催建國祭式典ニ參加。式後埴生神社、不動尊參拜。街頭行進。

一三日　創立第三十一回記念式。式後學藝會。
一四日　八生農學校長大矢氏ノ南洋視察談アリ。
一八日　大東亞戰爭第一回戰捷祝賀式。式後成田町主催ノ祝賀式ニ參列、祝捷ノ旗行列ヲ行フ。
二四日　四年級成田國民學校見學。
二八日　下志津飛行學校見學。

三　月

二　日　四年級本日ヨリ四日間學年末考査。
六　日　地久節祝賀式擧行。
七　日　入學考査第一日。身體及體力檢査。
八　日　入學考査第二日。口頭試問。
九　日　入學考査第三日。口頭試問。
一二日　大東亞戰爭第二次戰捷祝賀式。同講話。
　四年級成田學園。清聚學院見學。
　入學考査合格者發表。
一三日　四年生成田幼稚園見學。
一六日　四年級豫餞會。
一八日　第三十一回卒業式。
一九日　新卒業生、謝恩大護摩修行
二四日　第三學年以下修業式。
　佐藤校長、伊藤教諭辭職ニツキ送別式擧行。

五　一般的施設

學校長は職員を統率して分擔を定め、校務を執行し、生徒教養上に效果あらしむる爲め、左の施設を行つてゐる。

一、校　務

1　教　務　部（教授・訓練・指導・監督・調査・研究・衞生・統計等）
　教務主任　教務係・學級主任・學科主任

2　事　務　部（庶務・會計）
　二、報　國　團
　（一）總　務　部
　1　各部事業の企畫、連絡、統制に關する事項
　2　各種團體との連絡、折衝に關する事項
　3　庶務會計に關する事項
　4　其の他各部に屬せざる事項
　（二）鍛　錬　部
　1　勤勞作業に關する事項
　2　合宿訓練、剛健旅行、遠足等に關する事項
　3　武道に關する事項
　4　其の他各種體育運動に付行的なる身心鍛錬に關する事項

(三) 國防訓練部
1 防空防諜並に非常警備に關する事項
2 銃後奉公に關する事項
3 其の他國防上必要なる訓練に關する事項

(四) 學藝部
1 科學、藝能に關する事項
2 講演、映畫に關する事項
3 圖書、雜誌に關する事項

(五) 生活部
1 保健、衛生に關する事項
2 教護に關する事項
3 學用品、其の他配給に關する事項
4 整理、整頓に關する事項

三、課外教授
第三學年の初に志望を調査し、上級學校進學者及び一般學力不足者には國語・英語・數學の課外教授を行つてゐる。

四、遠足旅行
毎學期中、大小の遠足を行ふ

五、家庭連絡
主として通知簿を利用し、時に父兄會を催し、必要に應じて父兄の來校を求め或は家庭を訪問してゐる。

六、朝會拜禮
毎朝始業前講堂に於て朝禮の際、先づ正面に奉祀せる皇大神宮に拜禮して、臣子の誠を捧げることにしてゐる。

七、參拜、年賀、墓參
大詔奉戴日には不動尊及び埴生神社に參拜し、戰歿勇士の墓參をし、毎學期始業日には不動尊に參拜する。
年頭始業日には新勝寺に參賀し、當日及毎月末日には故石川僧正の墓前に燒香する。

八、大護摩修行及び坊入
報恩感謝の誠意を表するため、卒業式翌日不動尊に參詣大護摩修行をなし、ついで新勝寺に謝恩の挨拶をなす。

六 時局對應施設

時局に關しては、常に訓話・掲示其の他により認識を高めて來たが、本年度中實施せる主なる事項を記せば、次の通である。

一 校友會を解消し報國團を結成す
一 訓話・事變寫眞・畫報・ポスター等掲示
一 不動尊・埴生神社參拜
一 下志津飛行學校見學
一 生徒父兄の出征者に慰問袋二十七個を贈呈す
一 本校國民貯蓄組合貯蓄金增額
一 三里塚御料牧場・成田公園・成木新田縣營農場に集團勤勞奉仕
一 公津新田甚兵衛渡・滑河町に强行遠足
一 戰病死者の墓參並に遺族慰問
一 出征家族の慰問
一 町内戰歿者の町葬參列
一 成田町軍人援護奉公會に金五拾圓寄附
一 成田町主催大政翼贊會三國結盟記念式に參列
一 父兄の出征せる生徒の授業料減免

第參 生徒狀況

一 年度別郡別卒業生數

年度別	郡別	印旛	香取	山武	千葉	市原	東葛飾	匝瑳	海上	長生	夷隅	君津	安房	他府縣	計
明治四四		一〇													一〇
四五		七		一								一			一二
大正二		一九								一			一	一	二一
三		二〇	一	一	一						一			四	二八
四		二二	二			一	一								二六
五		二五								一				三	二九
六		二三	一		一									一	二七

七	二二																																		
八	二九																																		
九	一九	一	二																																
一〇	二八				一	一																													
一一	三三	三	一																																
一二	三六	五																																	
一三	四〇	一																																	
一四	三八	三	二																																
一五	三九	五	一																																
昭和二	四七																																		
三	四一	三																																	
四	四一	五																																	
五	四〇	一	一																																
六	四一	二	一																																
七	三九																																		
八	四九	二																																	
九	四四	二	二																																
計	一〇八三	四七	二二	六	二	六	二	一	五	二	一	五	五四	一二三六																					
一〇	四一	一	二	一		一																													
一一	四五																																		
一二	四九	二	一																																
一三	四一	三	二			一																													
一四	五三	一			一																														
一五	五〇	一	二																																
一六	五二	二	二																																
計	一〇八三	四七	二二	六	二	六	二	一	五	二	一	五	五四	一二三六																					

二　本年度（三十一回）卒業生氏名（五十六名）

（昭和十七年三月卒業）

住所	氏名	生年月日	志望
成田町寺台	石川政子	大正一五、一、二九	家事
富里村日吉倉	石川みつ	同 一四、一〇、一五	進學
成田町花崎町	石渡芳江	同 一四、八、三〇	同
成田町田町	石橋康枝	同 一四、七、一七	家事
本埜村押付	石塚すい	同 一四、五、三〇	進學
同	伊藤とし	同 一四、一〇、一六	同
成田町士屋	井上聰子	同 一五、三、一三	同
安食町安食貧	飯田福代	同 一五、二、一〇	家事
成田町寺台	飯塚信子	同 一四、七、一二	進學
木下町小林	濱田英	同 一四、一、一	就職
成田町花崎町	原文子	同 一四、九、一九	家事
山武郡千代田村大里	戸村尙子	同 一五、二、三	進學
遠山村駒井野	富樫トシ子	同 一四、四、一九	就職
香取郡日吉村篠本	小川節子	同 一四、五、一八	家事
成田町幸町	岡野友江	同 一五、三、二六	進學
本埜村安食ト抗	大久保和子	同 一四、一二、六	同
成田町仲町	大野益世	同 一四、七、二六	同

成田町幸町	大野政子	同	一四、七、二六	同
中郷村赤萩	大木てる	同	一四、四、一九	家事
中郷村芦田	大木文子	同	一三、五、一一	豆腐
八生村押畑	大島信子	同	一四、三、三一	同
同	大島トヨ	同	一四、六、一七	同
成田町土屋	渡邊悦子	同	一四、一二、一〇	同
遠山村大清水	神崎百合子	同	一三、八、五	同
成田町花崎町	神作とし子	同	一五、一、一七	同
成田町幸町	加藤和世	同	一四、一〇、二〇	同
成田町不助岡	吉田房子	同	一四、五、一六	就職
成田町仲町	田中英子	同	一五、三、三	家事
久住村磯部	大德斐子	同	一四、五、一	進學
富里村七榮	長澤千代子	同	一三、五、一	就職
安食町安食	卯之木基枝子	同	一五、二、六	同
山武郡千代田村岩山	内田さち子	同	一四、六、一三	家事
富里村根木名	上草よし	同	一五、三、一一	進學
八生村山口	山田悦子	同	一五、一、二六	同
公津村北須賀	山崎美知	同	一四、九、一三	家事
香取郡多古町多古	山崎好子	同	一四、一、三	同
成田町幸町	山崎久和子	同	一四、一二、二七	進學
安食町安食	山本常子	同	一五、二、二五	同
成田町伸町	古川濤	同	一四、五、一	家事
遠山村東和田	藤崎英子	同	一四、五、一三	同
遠山村小菅	藤崎文江	同	一四、一〇、二〇	進學
成田町花崎町	福田セツ	同	一五、二、二一	家事
成田町幸町	小泉トシ	同	一四、六、三〇	進學
八生村押畑	後藤しづ子	同	一四、八、一	同
安食町酒直	後藤雅子	同	一五、三、三	同
久住村飯岡	青野方子	同	一五、一、五	家事
成田町土屋	佐藤勝代	同	一五、二、一三	進學
成田町東町	三橋サト	同	一四、七、五	家事
成田町上町	水野綾子	同	一四、九、二六	進學
木下町小林	東海林かな子	同	一四、五、二九	同
中郷村芦田字海老川	一鍬田えつ	同	一五、二、二八	同
成田町上町	諸岡智惠子	同	一四、四、一三	家事
成田町本町	諸岡保枝	同	一四、一〇、九	進學
成田町上町	諸岡喜代子	同	一五、二、二七	同
中郷村赤萩	關屋ふみ	同	一四、七、一〇	同
安食町安食	杉野美彌	同	一四、八、二八	就職

三　本年度卒業生の卒業後狀況調

（昭和十七年四月末調）

各種學校入學者	二九
職業從業者	七
其他	二〇
計	五六

四　本年度卒業生の各種學校入學調

（昭和十七年四月末調）

學校名	氏名
佐倉町。大石裁縫女學校	石川みつ
東京市。榮養學校	石渡芳江
佐倉町。佐倉高等女學校補習科	石橋康枝
東京市。和洋女子專門學校	石塚すい
東京市。昭英學院	伊藤とし
東京市。日本女子高等商業學校專修科	井上聰子
東京市。日本女子經濟學校	飯塚信子
佐倉町。佐倉高等女學校補習科	戸村尙子
東京市。家政學院本科	大野益世
佐倉町。佐倉高等女學校補習科	大木てる
佐倉町。佐倉高等女學校補習科	大木文子
東京市。女子高等學院	大島信子
佐倉町。大石裁縫女學校	大島トヨ
佐倉町。大石裁縫女學校	渡邊悦子
佐倉町。佐倉高等女學校補習科	神崎百合子
佐倉町。佐倉高等女學校補習科	神作とし子
東京市。女子高等學院	加藤和世
千葉市。千葉高等女學校專攻科	大德斐子
千葉市。土岐裁縫女學校研究科	上草よし
東京市。實踐女子專門學校家政研究生	山崎久和子
千葉市。土岐裁縫女學校	山本常子
千葉市。千葉高等女學校專攻科	小泉トシ
佐倉町。大石裁縫女學校	後藤しづ子
千葉市。土岐裁縫女學校	後藤雅子
東京市。和洋女子專門學校	佐藤勝代
東京市。家政學院專科	水野綾子
東京市。ドレスメーカー女學院	東海林かな子
佐倉町。大石裁縫女學校	一鍬田えつ
東京市。實踐女子專門學校家政研究生	諸岡保枝

五　學級數並びに生徒數

（昭和十七年四月末現在）

學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
學級數	一	一	一	一	四
生徒數	六三	六二	六〇	五一	二三六

六　各學年別生徒氏名

（昭和十七年四月末現在）

◎級長　○副級長　⊠小隊長　△分隊長　□旗手

第一學年（六十三名）

主任　切替　彰

池田不二、木下　吉田靜江　成田
石井泉　成田　高久幸安食
石井夫貞子　山武郡千代田　竹村節子　富里
石井房子　富里　瀧澤京子　成田
石井幸江　豐住　堤鳳子　八生
石井久尹　山武郡千代田　根本しづ　安飯
石川和子　富里　△成田靜香　成田
林節　遠山　宇井京子　成田
長谷川和子　第久住二　内田喜久　山武郡岩山
堀越喜久江　山武郡千代田　内田侑　岩山
邊田己代子　香取郡高岡　◎海上美津　成田
豐田昭代　中郷　野村昌子　成田
渡邊みき子　成田　△○大河利子　第久住一
海保八重子　安食　大野校　富里
香取政子　六合　大野清子　成田
加藤松枝　大須賀　大木とし子　中郷
加藤靜子　成田　大木澄子　成田
龜谷エイ　成田　岡田規巳子　第本埜二
神谷絢子　前林　葛生敏重　北邊田

山田とよ　長沼　淺野きみ　豐住
山田みち子　八生　秋山芳子　中郷
山田重代　成田　佐藤幸子　成田
山崎久子　遠山　坂本富子　成田
山本菊枝　成田　櫻井タキ　成田
丸智子　公津　△清水倭子　成田
松田くに　木下　平山啓子　遠山
松永操　大森　日暮宣子　成田
増村壽野　成田　鈴木恒子　成田
藤崎照代　成田　鈴木康子　遠山
藤崎弘子　成田　鈴木ゆき子　遠山
△福智節子　成田　鈴木廣子　遠山
小泉照子　成田

第二學年（六十二名）

主任　圓城寺悅作　小倉治子

伊藤富子　遠山　井上芳枝　遠山
伊藤芳子　成田　池田充　富里
市川文子　同　石井富　遠山
井田妙子　同　石橋敬子　成田
磯山敏子　公津　石原てる子　成田
稻垣かつ子　成田　飯塚ゆう　久住

波木保子　香取郡
◎戸村トシ　多古
大增貞子　大森　八生
大須賀洋子　安食
小川ヨシ　成田
小川もと　山武郡千代田
小川しげ　成田
小川和子　成田
小倉昭代　成田
小野寺きくい　成田
若林みつ　富里
片山愛子　成田
神尾禮子　成田
神崎ふみ子　遠山
神崎美奈子　遠山
△吉岡久子　中郷
谷靜江　公津
立花美代子　富里
田谷サト子　成田
内田亨　山武郡千代田
宇井久子　成田
鵜澤みわ　成田

野々宮豐子　成田
山田郁子　八生
山田和　公津
山本多英子　安食
藤江秀子　安食
後藤千惠　八生
後藤よね　安食
後藤ゆき子　安食
江口あい子　成田
△秋山廣子　遠山
齋藤幸子　木下
北澤政代　布鎌
木内ふみ　成田
金仙玉　成田
宮崎瑠璃子　成田
△○椎名ミヨ　大森
篠田菊子　中郷
島村房子　成田
東明子　成田
△平野和代　成田
平山和子　成田
關川靜枝　成田

鈴木ケン　遠山
鈴木昌子　成田
鈴木清子　木下
鈴木志津　木下
片山圭子　戚田
小川博子　成田

第三學年（六十名）

主任　海寶愛次郎　麻生百合子

岩館初代　久住
岩館とみ江　中郷
△岩澤てる　中郷
岩井麗子　富里
伊藤邦子　木下
伊藤幸江　豐住
池田美代子　第三長崎
石橋てる　公津
石井愛　成田
石井千惠子　成田
飯塚芳子　成田
飯嶋けい　公津
幡谷ゆた子　八生
原俊子　成田
萩原よしい　山武郡千代田

△長谷川禮子　成田
堀口文子　成田
野老あさ　遠山
小田垣千惠子　成田
大野節子　成田
大木住子　中郷
及川澄子　成田
小倉サト　酒々井
渡邊和子　成田
川島貞　布鎌
河合和子　千葉市神明町
加藤タカ　中郷
加藤コト　成田
加藤明子　成田
加藤久子　成田
梶谷昌子　安食

神田よしゑ　公津
多田きみ　公津
葛生和子　安食
倉波照子　中郷
山崎紀江　遠山
山本ちか　安食
山本宣世子　安食
藤田富久枝　八生
藤崎知子　成田
藤崎恭子　成田
藤崎光以　遠山
福田美代子　大森
榎田トク子　成田
柯波崎たみ　久住
麻生よし子　遠山

◎齋藤文子　成田
△齋藤博子　布鎌
澤田正子　中郷
坂本晶子　成田
笹川靜枝　山武郡千代田
三品あや子　山武郡千代田
清水範子　成田
檜垣朝江　久住
日暮コウ　中郷
△○日暮美知子　成田
菅澤たつ　遠山
鈴木正枝　富里
鈴木みよ子　安食

第四學年（五十一名）

主任　齋藤好雄
東種子

岩澤直子　遠山
伊藤智　木下
伊藤久榮　成田
稻垣タカ　成田

飯田千鶴子　木下
飯田和子　遠山
飯倉喜久江　成田
服部福　富里

長谷川悅子　成田
細谷靜子　成田
鳥居ふく子　成田
土井初子　成田
土肥きみ子　公津
岡田喜美子　本埜
小川尊子　成田
小川しん　山武郡千代田
◎萩原みや　豐住
大友恭子　成田
大見川タケ　中郷
大野智惠子　安食
渡邊節子　大森
若松てる子　茨城金江津
○川村禮子　遠山
△梶谷みち　安食
吉岡貞子　本埜
高橋俊江　成田
高岡みね　遠山
多田明子　公津
武内牧子　遠山
△永井恒子　安食

中島暢子　富里
武藤德子　永治
黑川治子　成田
黑田てる　成田
山田美子　成田
山田くに　八生
山田昭子　公津
後藤晃子　八生
出山ミサオ　八生
△青柳美代子　成田
淺野ふゞ　豐住
會田富佐子　大森
櫻田久子　成田
△君塚照子　成田
湯淺直子　八生
三橋鳩世　成田
森田美芙枝　永治
清宮くみ　八生
諏訪原ゆき　八生
須藤誓子　安食
鈴木瑞枝　成田

七　生徒出身地方別調

（昭和十七年四月末現在）

出身地 ＼ 學年	一年	二年	三年	四年	計
成田町	一八	一八	一四	一六	六六
安食町	三	五	五	二	一五
木下町	三	三	一	二	九
大森町	一	二	一	一	三
佐倉町	一	一	一	一	一
公津村	一	四	四	三	一二
八生村	三	四	二	六	一五
富里村	四	二	三	一	一〇
中郷村	二	三	七	一	一三
本埜村	一	一	一	二	三
遠山村	五	五	三	一	一四
久住村	二	一	三	一	六
豐住村	三	一	二	二	八

八　生徒家庭職業別調

（昭和十七年四月末現在）

郡	布鎌村	六合村	根郷村	永治村	八街町	千葉郡	香取郡	山武郡	夷隅郡	匝瑳郡	東葛飾郡	長生郡	他府縣	合計
	三	二	一	一	一	一	四	四	一	一	一	一	五	六三
	一	一	一	一	一	一	三	三	一	一	一	一	六	六二
	二	一	一	一	一	一	二	二	一	二	一	一	六	六〇
	一	一	一	二	一	一	二	一	一	一	一	一	六	五一
	三	三	一	三	一	一	一一	一〇	一	三	一	一	二三	二三六

職業＼學年	一年	二年	三年	四年	計
農業	二一	一七	二四	一六	七八
商業	一九	一五	一七	一六	六七
工業	二	五	四	一	一一
交通業	二	一	一	二	四
公務自由業	一四	二一	一二	一三	六〇
其他有職	四	一	一	一	四
無職	一	四	三	四	一二
計	六三	六二	六〇	五一	二三六

第四　歷代校主・校長顧問・主監

一　校主

石川照勤（明治四十四年二月―大正十三年一月）

荒木照定（大正十三年二月―現在）

二　校長・顧問・主監

荒木照定（名譽校長）（昭和二年三月―現在）

中島喜一（校務主監）（明治四十四年四月―大正二年九月）

菅野皆可（同　）（大正二年十月―大正六年十一月）

中村安之助（同　）（大正六年十一月―大正八年十月）

矢野太郎（同　）（大正八年十二月―大正十二年十二月）

笹川種郎（校　長）（大正十三年二月―大正十四年三月）

佐藤國二（校務主監）（大正十三年五月―大正十四年三月）

笹川種郎（顧　問）（大正十四年四月―現在）

佐藤國二（校　長）（大正十四年三月―昭和十七年三月）

舟越文教（校　長）（昭和十七年六月―現在）

第五　職員

（昭和十六年四月現在）

受持學科	職名	氏名	原籍	就職年月日
	校主	荒木照定	千葉縣	大正十三年二月
	名譽校長			
	顧問	笹川種郎	東京府	大正十三年二月
	文學博士			
修身	校長兼教諭	舟越文教	岩手縣	昭和十七年六月
國語・歷史	教諭	平野太市	千葉縣	昭和九年六月
圖畫・習字	教諭	齋藤好雄	群馬縣	昭和十三年四月
英語・公民	教諭	切替彰	千葉縣	昭和十六年七月
裁縫・作法	教諭	小倉治子	千葉縣	昭和三年十二月
國語・歷史	教諭	圓城寺悅作	千葉縣	昭和十六年四月
裁縫	教諭	東種廣子	島縣	昭和十七年四月
體操	教諭	麻生百合子	千葉縣	昭和十五年四月
地理	書記兼教諭心得	神尾純	千葉縣	昭和十三年四月
博物・地理	教諭心得	海寶愛次郎	千葉縣	昭和十五年四月
音樂	囑託教師	岡崎政子	茨城縣	昭和十六年四月
挿花・茶道	同	櫻井文吉	千葉縣	大正十五年四月
按摩	同	酒井泰作	福島縣	大正十四年三月
弓道	同	布施明治	千葉縣	昭和十三年十一月
	學校醫	山內平次郎	千葉縣	明治四十四年四月

學校醫（齒科）　三須重五郎　千葉縣　昭和五年五月

第六　經費

本校に於ける昭和十六年度經費決算は次の通りである。

昭和十六年度決算額	俸給	雜給	校費	修繕費	退職給與金死亡賜金	計
一五、四五一・四円	一、一四〇・二〇円	五、六五二・五一円	三一〇・三六円	五、一八三・〇〇円	二七、七三九・二一円

成田幼稚園

成田幼稚園

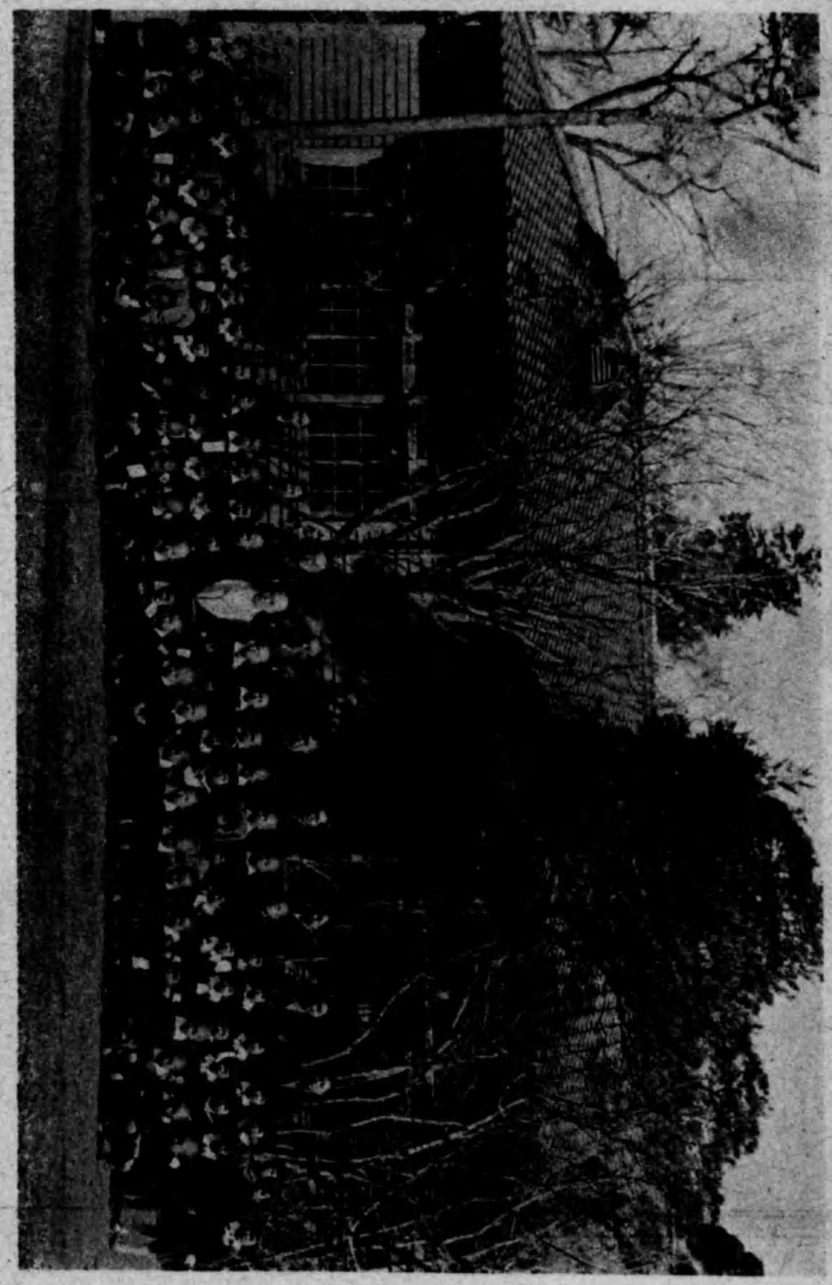
寫眞

成田幼稚園々歌

昭和十六年度成田幼稚園一覽

目次

第壹　位置並びに沿革……六一頁
一　位置……六一
二　沿革……六一
第貳　設備並びに教育……六二
一　設備……六二
二　保育方針……六二
三　園則……六三
四　保護心得……六四
五　年中行事……六五
六　保育の狀況……六五
七　保育の施設……六六
第參　園兒狀況……六七
一　年度別修了兒數……六七
二　本年度入退園調……六九
三　本年度修了兒氏名……六九
四　各組別園兒氏名と保護者……七〇
第四　歷代園主・園長・主任……七二
第五　職員……七三
第六　經費……七三



（昭和三年七月）生了修回七十三歳

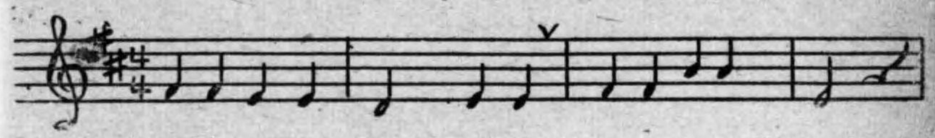
成田幼稚園々歌

大和田建樹氏作歌
小山作之助氏作曲

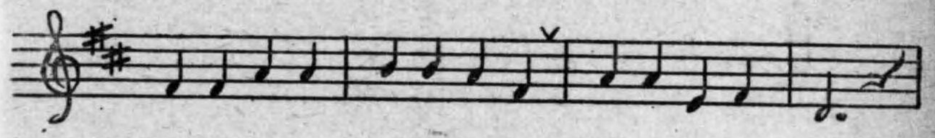
御寺の山をあけ暮に
見わたす成田の幼稚園
園に生ひたつ撫子の
花にめぐみの露しげし
我等も日々に集りて
雲雀となりて謠はまし
そのゝ惠のうれしさを
御世の惠のたのしさを

昭和十六年度 成田幼稚園一覽

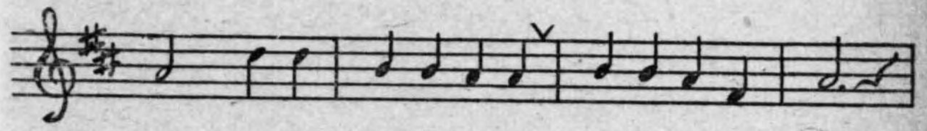
位置	千葉縣印旛郡成田町成田六百四十七番地、省線並京成成田驛ヨリ凡ソ三町ノ距離ニ在ル高燥閑雅ノ地（電話成田五九番）
沿革	本園ハ成田山ノ經營ニ屬スル幼兒保育ノ教育事業ニシテ明治三十八年六月成田尋常小學校ニ開園、同時ニ前貫首故石川僧正園主並ビニ園長トナル、同三十九年六月現地ニ園舍新築移轉、大正十三年一月園主並ビニ園長示寂、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ園主並ビニ園長トナル、創立以來修了兒ヲ出スコト三十七回、此間主任ノ交迭三名
設備	敷地　三、一八九坪、遊園二、九三〇坪、園舍ハ木造平屋ニシテ保育室四、遊嬉室一、玩具室一、靜養室一、其他各室四アリ、此坪數二五〇坪、外ニ職員住宅並ビニ附屬建物アリ
目的	幼兒ニ對スル心身ノ發達ニ留意シ善良ナル性情ト良習慣トヲ養フヲ主眼トス
入園	滿三歳ヨリ學齡ニ至ル迄ノ幼兒
保育施設	保育課目＝唱歌、遊嬉、談話、手技、觀察 訓練的保育（自治心ノ養成、清潔整頓勤勞ノ習慣養成、團體的生活ノ馴致） 體育運動＝自由運動＝五個聯絡運動具、庭園各種類自動車、タンク等 情操陶冶＝ラヂオ、蓄音器、紙芝居、人形芝居等ニ依ル 衛生的施設（手洗用トシテ藥水使用勵行、園內外ノ清掃、共有具ノ消毒使用）
修了並保育料	修了＝一年乃至三年 保育料＝月壹圓五十錢
園兒狀況	修了兒總數　男七五〇　女七二三　計一四七二 年度內入園兒　男五七　女五一　計一〇八 年度內修了兒　男四一　女四四　計八五 現在園兒數　昭和十七年四月末現在組數　男八六　女八九　計一七五
園長	成田山貫首大僧正　荒木照定
主任	山口政子
職員	一一
經費	昭和十六年度決算額　九七八一、一四円



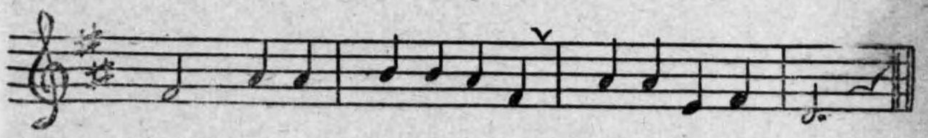
ミテラノヤマヲアケクレニ
われらもひびにあつまりて



ミワタスナリタノヨーチエンし
ひばりとなーりてうたはまし



ソノニオヒタツナデシコノ
そのゝめぐみのうれしさを



ハナニメグミノツユシゲシ
みよのめぐみのたのしさを

成田幼稚園

第壹　位置並びに沿革

一　位置

本園は、成田驛を距ること約三町、成田町成田六百四十七番地の高燥なる地に在り、翠黛滴る森に包まれ、人家を離れた閑靜廣濶なる地域を占め、南西北の三面は成田市街に臨み成宗電車を崖下に瞰下し、東部は田圃が廣々と開けて清澄の氣漂ひ、夏は涼しく冬は暖かく、幼兒保育の地としては最適の場所である。

二　沿革

本園は成田山の經營に係る幼兒保育の教育事業であつて、前貫首故石川僧正の慈愛により、明治三十八年六月一日成田尋常小學校に於て開催され、同時に同師本園の園主兼園長となり經營の任に當られた。次いで明治三十八年十月地を向臺にトし、參千百八十九坪といふ廣濶なる地域を敷地と爲し、文部省技手服部市太郎氏設計、同川田初太郎氏工事監督の任に當りて同月二十九日新築工事に着手、翌三十九年二月二十八日竣工六月一日移轉、此の日を以て本園の記念日と定め、六月三日盛大なる落成式を擧行した。當日來賓として臨席せられたのは、貴族院議員子爵本莊壽巨閣下、同子爵板倉勝達閣下其の他二百七拾餘名であつた。大正十三年一月三十一日石川僧正示寂せらるるや、荒木現貫首代つて園主兼園長に就任した。

而して當時の入園兒は、其の數七十名、木村良主任としてこれが保育の任に當つたが、其の後明治四十年四月より猪狩ゑい、大正三年十月より山口政子主任として保育の任に當り以て今日に至つてゐるが、園兒の數も年と共に增加して、現在（昭和十七年四月）は百七十五名となり、創立以來年を重ねること三十七年、明治三十九年三月第一回の修了式を行つて以來、昭和十七年三月第三十七回の修了式までに其の修了兒數は實に一千四百七十二名の多きに達す。

又創立以來理事として、石川甚兵衛、三橋重郎兵衛（幹事兼任、大正十四年病氣の爲め辭職）關川博道　園醫兼任昭和五年十二月逝去）の三氏の外、會計主任として、淺井儀助氏

（昭和十年三月病氣の爲辭職、同十三年一月逝去）囑託を受けて就任、園長を補佐されて來たのであるが、昭和十三年四月石川理事は逝去された、今は理事制を廢し六和會に移る。

第貳　設備

一　設備

本園は成田町向臺と稱する、綠の森に包まれた三千餘坪の高燥の地に設置された、全國稀に見る幼稚園の稱あり、保育室は南面して、冬期と雖も日光室内に滿つ。北に廊下を控へたれば冬の寒さを防ぎ、夏は涼風を送る。全園みどりの芝生にして、夏季日光の直射を少なくす。數へきれぬ樹木は創立第三十七年を迎へて空高く繁茂して夏のあつさを忘る、又塵も揚らず往來の雜音にも遠ざかり、極めて靜か、春の花に續いて、藤、つゝじ美を添へ新綠の頃は全園の眺め又一入、庭一面には雜草の花、秋は園内の樹木紅葉して花にもまさる趣を呈す。幼兒は人工を加へないこの廣大な自然の庭に、求めずして鳥の聲をきく、餘念もなく花を摘みて自然を觀察、幼兒は能ふ限り天惠の庭に或は屋内に固定せるもの、移動するもの種々の遊びの材料に依つて惠まれた日常を送る。

敷地　三、一八九坪
園舍建坪　二五〇坪
遊園　二、九三〇坪

園舍は木造平屋で其の内譯は次の通りである。

保育室	四	（五四坪）
玩具室	一	（一・五坪）
遊戯室	一	（四八坪）
園長室兼圖書室	一	（三坪）
職員室	一	（九坪）
靜養室	一	（四坪）
應接室	一	（四坪）
小使室附屬建物	一	（七坪）
職員住宅	二	（六三坪）
昇降口・電話室・廊下其他		

二　保育方針

本園は幼稚園令に則り、幼兒の健康を第一とし、之に伴ひ將來の爲め幼兒時代よりの正しい用意を以て、善良なる性情と、良習慣を養ふを以て主眼としてゐる。

三　園則

本園は滿三歲より學齡まで滿一年以上在園の者に入園を許し、其の心身の發達及び善良なる情操を涵養す。

入園期は四月、九月の兩度とす。

入園志願者には園所定の入園願書を交付し、簡易なる方法にて考査をなし選擇の上、三月末許可の通知をなし入園を決定す。收容人員は其の年度保育終了者と同數を選定し、四月入園後事故退園等の爲め人員に異動あるも臨時の補充をいさず、九月の新學期に於て同樣考査の上入園を許す。

入園證書

原籍
出生地
現住所
族籍
職業
幼兒氏名
生年月日

右は今般貴園に入園御許可相成候に就ては本人に關する一切の事件捌者引受可申候也

右保護者
千葉縣印旛郡成田町何番地
昭和　年　月　日　何　某

私立成田幼稚園長荒木照定殿

經歷書項目

一　生父健否　年齡
一　生母健否　年齡
一　兄姉
一　弟妹
一　生母ノ乳　乳母ノ乳
一　牛乳　里子
一　生來重病ニカヽリタルコトノ有無
一　性質習慣ノ著シキモノ

右報告申上候也

昭和　年　月　日
幼兒保護者　何　某㊞

私立成田幼稚園御中

保育料
保育料は月額金壹圓五十錢とす

休園日
夏季休園　自七月二十一日至八月三十一日
冬季休園　自十二月二十五日至翌年一月七日
學年末休園　自三月二十一日至四月三日
法會式日　七月八日
氏神祭　七月十七日
（大祭祝日以外）

四　保護者心得

家庭と幼稚園の連絡に關する事

家庭と幼兒保育の連絡に就いては、相互に協力するにあらざれば效果を得る事能はざるはいふまでもなき事なるべし、されば家庭と幼稚園とは常に氣脈を通じ、內外相應じて保育の效を全くせざるべからず。

今彼此の連絡に關し當園の冀望を掲ぐ。

一　家庭より當園の事に關し疑問あるか、又は幼兒の事に關して擔任保姆に問合せ協議せられたき事あらば、遠慮なく口頭又は書面にて申出でられたし。

一　父母兄姉並びに直接幼兒の保育に關係ある人は、時々來園して當園の實況を視察し、これを家庭保育の參考にせられんこと本園の最も冀望する所なり。

又春秋の頃子供の會を開き、保護者諸君の來會を請ふを例とせり、これ一は實地保育の模樣を諸君に示し、又一は諸君より家庭の狀況を聞き、幼兒の保育に關し相互に懇話せんが爲めなり、日時は其の都度通知すべければ成るべく來會ありたし。

一　幼兒付添人に關する事

本園に於ては付添を斷る。

但し往復の送迎は隨意たるべし。

一　幼兒の遊嬉に關する事

遊嬉は實に幼兒の仕事にして、心身の發達はこれによるものなれば、最も自由快活にこれを爲さしむること必要なれども、野鄙亂暴に涉るものはこれを制せざるべからざるは勿論玩具等に就きても亦よく其の良否を選定し、繪本の如きは色彩の良否、說明せる字の如何により幼兒を害する事は恐るべき事なれば、其の內容を充分に取調べられて、幼兒に與へられる樣注意せられたし。

一　幼兒の服裝に關する事

服裝は園制定のものを着用すること。

一　幼兒の携帶品に關する事

幼兒在園中に用ふべき器具其の他は總て園のものを使用することとなれば、手拭鼻紙等必要なるものゝ外は幼兒に携帶せしめざる樣致されたし。

帽子雖當携帶品、マント靴等にも必ず氏名を記されたし、

一　幼兒の往復に關する事

幼兒の往復は、近來自動車其の他の爲めに事故生じ易ければ、風雨其の他には注意保護せられたし、格別の事情なき限り必ず徒步せしめられたし。

幼兒の缺席一週間を超ゆるときは、口頭又は書面にて詳に其の事由を屆出でらるべし。凡て多人數の集る所は充分注意を爲すにあらざれば、或は惡疾傳染の媒をなす虞あるを以て幼兒の家族に傳染病者ある時は、直ちに其の病名を記して屆出でられたし。

但し玆に傳染病と稱するは、痘瘡及び假痘、猩紅熱、腸窒扶斯、發疹窒扶斯、虎列刺、赤痢、ヂフテリア、ペスト等をいふ。

一　保護者の異動に關する事

保護者の變更は勿論、其の轉任改氏名等異動ありたる時は直ちに屆出でられたし。

五　年中行事

一月八日　新年始業式
二月十一日　紀元節（梅の節句）
三月六日　地久節
三月二十日　保育修了式
四月七日　入園式
四月八日　花祭り
四月二十九日　天長節
五月五日　端午節句と幼兒愛護日
六月一日　創立記念日
七月七日　七夕祭
十一月三日　明治節

六　保育の狀況

昭和十七年四月現在全園兒百七十五名之を年齡別に三組に編成更に年長組及中組を各二組に年少組を一組とし合計五組に編成八名の職員に依り指導保育す。

保育の時間は季節に依り一樣でなく、長きは五時間短きは夏季の二時間とす。

保育は幼稚園令施行規則第二條に依り、唱歌、遊嬉、談話、手技、觀察等各項目に涉り聯絡を取りつゝ之を施行す。

昭和十六年度より小學校は國民學校と改稱され、且其內容に於ても最も躾を尊重さるゝに對應して、就學前の正しき躾

の用意を必要とするため、幼稚園に於ける日常幼兒の生活上この躾を强調し、國民學校入學後も永く良習慣の持續し得る等注意を拂ふ。

又登園下園に於ける種々の心得身の廻り品の始末より、庭の落葉の清掃、花壇の手入保育室内の幼兒相當の整頓、保育用品の取扱注意等、將來の基礎となるべき德性の涵養より、團體生活に慣れしむるやう指導に重きを置く。

體育運動としては、空氣清き綠の森に包まれた三千餘坪の廣大な地域を、西に東に鳥を追ひ花を尋ねて遊ぶのみにても、既に充分な運動であるが、更に園内の此處彼處に、數多き運動具に依り、又は季節的運動及精神訓練として、秋の頃には幼兒用熊手を手にして、庭の落葉掻掃を行ひ、勤勞を樂しむ運動に伴ふ精神上の美點を養ふ。

衛生的方面としては、傳染病豫防上よりも又幼兒に清淨に對する感覺練習等日を重ねて、習慣となる衛生的美風を養ふために、登園の際のハタキの使用、藥水の手洗ひ、食鹽應用の口嗽ぎ、頻繁に使用する積木の如き藥水にて洗ふ事　强烈な太陽に消毒する外黑板の如きも庭園用小黑板を庭園に使用して、可成保育室内の使用を避け、以て室内の清潔を保つ。

尙情操方面としては、十六年度より施行された國民學校の教科に依り、幼稚園に於ても音樂的に意を用ひ、ラジオ、蓄音機レコードの鑑賞遊嬉及唱歌に伴ふピヤノ、オルガン等の音程の練習にも意を注ぎ、國民學校に於ける音感教育を參考として幼兒を導く。

七　保育の施設

本園の保育は各種の恩物。玩具。其他の諸施設に依りて之を行ふ數年前本園に於て考案せる五個聯絡の運動具を始め富士山と鐵橋。紙芝居兼人形芝居又は十臺餘の自働車乘用タンクなど他の運動具と併用し庭園に或は雨天の際の室内用として活用す繁茂せる大樹芝生の庭を飾る愛らしき雜草自然の惠み深き天與の庭に運動具に優る活動を情操を養ひて味ふ事を得る幼兒の幸福は多大の效果を收む。

昭和十六年十一月十六日成田幼稚園を會場として第五回そのふ會の總會を開かれた。

川名御院代を初め警察署長事業關係の方々愛國國防兩婦人會支部長外二名そのふ會員も多數會員集合されて會計報告其他の事項は進み最後に發會以來會の爲にお盡し下された會長諸岡市郎左衛門氏は公私御多用のため御辭退のため三橋吉兵衛氏新に會長に幹部の方は從來のまゝ會のためにお力を頂く事となり諸岡氏の御盡力を感謝し新會長並に會關係の方々の今後に於けるお力添へを只管願ひ上げた。

かくて會員一同親しみ深い會食は樹々の木の葉も紅葉する芝生の庭に幼兒時代の遠足にも等しい童心になつて樂しい時を過した。午後は園兒の遊嬉を始として庭園の遊びに移つた庭には河合成訓氏の御考案になれる庭園裝飾を寄贈せられ一入庭に美しさを添へて嬉しかつた。

數々の催しものゝ中でも隣組回覽板送りの競爭は秀逸なものであつた幼兒もリレーのお仲間に入れて頂き迎も大喜び數數の樂しみも重ねて夕刻頃まで幼なき頃無邪氣に遊んだ思ひ出深いこのそのふに十二分の喜びを味はゝれて又來年の第六回の總會を約して閉會した。

昭和十六年十一月廿七日成田幼稚園及そのふ會合同下志津陸軍病院を慰問する事となつた。

この日成田幼稚園に集合下志津陸軍病院慰問の旗を先頭に幼兒の歩みも勇ましく成田驛より省線に乘車した車中幼兒の元氣に滿ちた喜びの内に四街道へ下車幼兒の歩行にも極めて近き病院へ到着慰問金及慰問品を贈呈す。

この慰問品中幼兒の手に依り各病室を飾るべく心をこめた輪つなぎの幾つかを送り又拙なき自由畫も幼兒のやさしい贈りものであつたこの輪つなぎや、まゆ玉、くす玉等は全快に近い兵隊さんに依つて大喜びの聲に賑はひつゝ高く低く又香り高い菊花百本もそのふ會若き婦人の手に依り病床を飾られた紅黃白紫いろとり〳〵の裝飾に病室はやさしい明るさに滿されて送るものも送らるゝものも互に滿足を感じ幾分にてもお慰めになつた事は嬉しい限りであつた。幼兒の最も樂しいお辨當も頂き午後は兵隊さんに幼兒の遊嬉をおめにかけたおぼつかない手足の運びも笑傾けらるゝ種ともなり暫らくは童心にかへつて頂いた又省線で無事成田驛着保護者に勞はられつゝ家路についた慰問のためにやさしい氣分で物を作り、やさしい氣分で物を送る幼兒は面のあたりお國のために盡された兵隊さんの御苦勞を偲ぶと共に幼ない心に云ひしれぬ情操を實地に養ふ基を得て保育上嬉しい結果を得た事は仕合せであつた。

第參　園兒狀況

一　年度別修了兒數

	男	女	計
明治三十八年度	一三	九	二二
明治三十九年度	二二	一五	三八
明治四十年度	二二	二〇	四二
明治四十一年度	一二	一五	二七

明治四十二年度	男 二〇	女 一九	計 三九
明治四十三年度	男 一七	女 二〇	計 三七
明治四十四年度	男 二三	女 一七	計 四〇
明治四十五年度 大正元年度	男 一九	女 一九	計 三八
大正二年度	男 二九	女 二六	計 五五
大正三年度	男 一三	女 一六	計 二九
大正四年度	男 一九	女 一六	計 二五
大正五年度	男 二五	女 二〇	計 三五
大正六年度	男 二二	女 一八	計 四〇
大正七年度	男 二一	女 二〇	計 四一
大正八年度	男 二一	女 二四	計 四五
大正九年度	男 二一	女 一六	計 三七
大正十年度	男 二三	女 一九	計 四二
大正十一年度	男 一二	女 二〇	計 三二
大正十二年度	男 一八	女 一七	計 三五

大正十三年度	男 二六	女 二四	計 五〇
大正十四年度	男 二一	女 二一	計 四二
大正十五年度 昭和元年度	男 二〇	女 一七	計 三七
昭和二年度	男 一六	女 二一	計 三七
昭和三年度	男 二八	女 二三	計 四一
昭和四年度	男 一五	女 一五	計 三〇
昭和五年度	男 一八	女 一六	計 三四
昭和六年度	男 一五	女 一六	計 三一
昭和七年度	男 一三	女 一八	計 二一
昭和八年度	男 一三	女 一二	計 二五
昭和九年度	男 一三	女 一〇	計 二三
昭和十年度	男 二五	女 二一	計 三八
昭和十一年度	男 二一	女 一〇	計 三一
昭和十二年度	男 二五	女 二三	計 四八
昭和十三年度	男 二六	女 二四	計 五〇

昭和十四年度	男 二九	女 四一	計 七〇
昭和十五年度	男 三六	女 三四	計 七〇
昭和十六年度	男 四一	女 四四	計 八五
計	男 七五〇	女 七二二	計 一、四七二

二　本年度入退園及年度末現員調

成田幼稚園

年度	性別	入園	卒業	半途退園	死亡	年度末現員
十六年度	男	五七	四一	九	〇	四〇
	女	五一	四四	七	〇	四一

昭和十七年四月末日調査現在園兒數

男 八六　女 八九　計 一七五

三　本年度保育修了幼兒數

男 四一　女 四四　計 八五

（保育期間及修了幼兒姓名）

三年　福田常雄
三年　鶴岡一枝
三年　森岡正臣
三年　三橋昭子
三年　田中照枝
三年　三橋和代
三年　伊藤昭男
三年　山田美智子
三年　淺野利津子
三年　飛田早智子
三年　青木寛子
三年　石原久子
三年　久保田順一郎
三年　石橋利之
三年　小川恒子
三年　高野和子
三年　横山マサ子
三年　伊藤一枝
三年　椿良勝
三年　村上むつ子
三年　小坂順子
三年　磯山敏子
三年　木内聰男
三年　瀧澤幸吉
三年　芝倉美佐子
三年　若葉佑弘
三年　野口尙則
三年　若葉享宏
三年　内海謙一
三年　稲吉憲一郎
三年　鶴山悟
三年　古郷孝
三年　鈴木陽子
三年　石橋二郎
三年　張替禮子
三年　高橋計雄
三年　小倉恭子
三年　江副泰正
三年　積田とき江
三年　油橋久司
三年　津田治
二年　加藤美江

二年　渡邊富子　一年　佐藤高廣
二年　石原靜江　一年　平根和江
二年　三橋智子　一年　根本亘
二年　伊藤利己　一年　飯田敏子
二年　深山一郎　一年　瀧崎千恵子
二年　日暮重信　一年　江波戸愛子
二年　諸岡美津子　一年　小川久子
二年　豫渡邊翠　一年　高橋弘毅
二年　岩澤清　一年　中込英雄
二年　高石繁　一年　宮田春子
二年　黒田庸子　一年　萬來道子
二年　庄司見ひろ子　一年　佐々木勇
二年　根本公子　一年　西川洋一
二年　大德惠美子　一年　森秀臣
二年　渡邊義夫　一年　武士田忠
二年　小川一江　一年　鵜澤初男
二年　高橋敏枝　一年　大野鋼太郎
二年　廣野瀞明　一年　金子誠
二年　泉谷正誼　一年　龜谷春雄
一年　石井靜　一年　佐藤トモ子
一年　長谷川貞子
一年　鈴木健彦

四　各組園兒氏名と保護者

（昭和十七年四月末現在生年月日順）

第一壹の組（七歳）男二四　女一七　計四一

幼兒氏名	保護者氏名	幼兒氏名	保護者氏名
小林紀美子	小野寺弘	大見川幸三	大見川庄藏
大塚壽子	大塚謹三	渡邊次朗	渡邊民彌
渡邊修好	渡邊三男	瀧澤孝行	瀧澤誠
小倉堯義	小倉格司	大島利康	大島きぬ
鈴木基和子	鈴木達衛	出山登志子	出山千代松
京須愛子	京須忠雄	諏訪原尙子	諏訪原貞夫
石井一雄	石井良平	岡島秀介	岡島國助
中村智英子	中村弘	大山啓一郎	大山哲次郎
田谷和子	田谷中	伊藤美智子	伊藤三郎
大島紹代	大島忠平	加瀨君子	加瀨三郎
京須弘子	京須善太郎	下田仁三郎	下田九二三
中村孝	中村弦	岩井正雄	岩井春雄
吉橋三郎	吉橋純之助	藤崎文夫	藤崎貢太郎
加藤公勇	加藤光太郎	江副隆之	江副篤二
松川和子	松川直吉	藤本文子	藤本三郎
福智宏昌	福智七郎	石橋弘次	石橋木三郎

雉瀨正子　岩瀨慶治　鬼澤伸夫　鬼澤幸治
大木肇　大木保　足立享子　足立留吉
箱川志郎　箱川勝　畑中耕一　諸岡勝太郎
木内功郎　木内芳男　中島初惠　中島貫司
石川榮　石川福次　（以上七歳）

第二壹の組（七歳―六歳）男一六　女一七　計三三

金井一成　金井重二　海老原庄一　海老原秀吉
勝又理惠子　勝又坦治　高山正廣　高山德太郎
米本眞佐子　米本照全　大木國江　大木茂
三橋基臣　三橋醇　黒川ときい　黒川友吉
加勢京子　加勢胖　池谷唯和　池谷唯一郎
增田薫　增田義男　岩崎輝夫　岩崎直
夏海和子　夏海千濤　土屋圭子　土屋太一
佐藤公久　佐藤寅吉　大木つる　大木用三
稻岡常三　稻岡さだ　明石光男　明石倉次
出口進一　出口友雄　澤田良夫　澤田秀一
田中咲子　田中盈之助　（以上七歳）
小田垣文代　小田垣松三郎　青野薫　青野俊一郎
田中秀子　田中勇　高安薫　高安盈仁
川村カウ　川村幹　高安綠　高安盈仁
莇崇一　莇半藏　森田桂子　森田政吉
淺野利昭　淺野利一　柴内伸彥　柴内留次郎

雙庭康允　雙庭貞雄
日暮乃理子　日暮務
（以上六歳）

第一二の組（六歳―五歳）男一八　女二八　計四六

萩原正司　萩原竹三郎　石原ひろみ　石原淺吉
鈴本和子　鈴木勇助　細谷隆　細谷四季之介
寺内君江　寺内政義　秋山芳子　秋山寛
平山惠以子　平山清　齋藤福夫　齋藤源兵衛
大木敎子　大木安治　三橋幸江　三橋清次郎
上原明　上原健吉　赤池嘉子　赤池龜六
鈴木俊夫　鈴木幸一　油橋富佐子　油橋久吾
川口敏子　川口清太郎　石原園子　石原一義
小川チヨ子　小川房吉　關良一　關正次
磯山公子　磯山茂　湯淺守彥　湯淺守之助
萬來暎子　萬來親　小川昭子　小川留吉
京須壽子　京須壽雄　鈴木千惠　鈴木なみ
鶴岡窈千　鶴岡秋藏　京須理　京須守雄
橋美也子　橋昌夫　山田守一　山田勇安
小坂稀一　小坂靜子　吉田榮子　吉田延秋
森岡克子　森岡實英　淺井尙子　淺井金治
押尾靜江　石井なか　吉田貞子　吉田秀雄
山田富美子　山田正治　高根健　高根豊吉
渡邊一雄　渡邊吉太郎　宇井英夫　宇井常吉

山田稅子　山田一郎　中込富美子　中込　遜
尾高晴美　尾高敏明　早斐邦士　甲斐久松
本間義章　本間賢吉　桑田大地　桑田留吉
（以上六歳）　金子　保　金子良助
小田垣勝隆　小垣田利郎　（以上五歳）

第二二の組（六歳—五歳）男一二女一三計二五

林　よし子　林　金司　篠田由紀子　篠田敏行
渡邊壽子　渡邊　淑　佐久間久子　佐久間忠久
宮本征子　宮本未夫　齋藤達彦　齋藤保藏
重田賴安　重田榮雄　吉田光枝　吉田與次
石井正一郎　石井清吉　小川久子　小川德造
張　世强　張　捷喜　中臺秀雄　中臺宇吉
諸岡鈴子　諸岡高信　小田倉　巖　小田倉憲司
中里美津子　中里ゆき　佐久間房枝　佐久間　弘
伊藤利夫　伊藤熊太郎　木内　勤　木内季男
（以上六歳）　山崎千鶴子　山崎勝男
後藤　聖　後藤雄太郎　（以上五歳）
中根正二　中根倉藏
諏訪原一彦　諏訪原貞夫
高柳まさ子　高柳喜和藏
小倉當子　小倉格司
飯塚光男　飯塚　正

第参の組　五歳—四歳）男一四女一四計二八

津田美智子　津田　薫　中島重昭　中島貫司
清宮　公　清宮　清　櫻井美枝子　櫻井忠治
宮島成男　宮島　靜　野口和子　野口利平
栗田博光　栗田英一　清宮照子　清宮昇平
片山義郎　片山辰雄　大野勝也　大野政治
青木正夫　青木宗平　青木昌江　青木　明
杉山邦子　杉山久松　押尾一男　押尾千代松
椿　文子　椿　良　（以上五歳）
鵜山幸子　鵜山重樹　稲吉英雄　稲吉憲作
山口幸子　山口幸二　三橋美智枝　三橋・幸吉
鵜澤美智子　鵜澤義次　北田義郎　北田久夫
石井昭男　石井三郎　下田歌子　下田九二三
岩間秀吉　岩田那吉　莇　宏二　莇　文雄
鈴木了一郎　鈴木達衛　本間節子　本間賢吉
大宮昭子　大宮五郎　（以上四歳）

第四　歷代園主・園長・主任

園主・園長

石川照勤　自明治三十八年四月至大正十三年一月
荒木照定　自大正十三年二月　現在

主任

木村良　自明治三十八年五月至同九月

猪狩ゑい　自明治四十年四月至大正三年三月
山口政子　自大正三年十月現在

第五　職員

職名	氏名	原籍	就職年月
園主兼園長	荒木照定	千葉縣	大正十三年二月
主任	山口政子	德島縣	大正三年十月
保姆	若命喜美	神奈川縣	大正三年三月
保姆	瀧澤よし	千葉縣	大正七年十月
保姆	高田よしゑ	千葉縣	大正十年五月
保姆	高岡たい	千葉縣	昭和十二年四月
保姆	須田ひろ	千葉縣	昭和十五年四月
保姆	横尾みつ	千葉縣	昭和十七年四月
保姆	宍倉利子	千葉縣	昭和十四年五月
園醫（醫學博士）	藤崎公道	千葉縣	昭和六年一月
齒科醫	竹村秀壽	千葉縣	昭和十六年四月

第六　經費

本園には豫算なるものがない、從つて年により其の金額は一樣でないが、臨時の支出なき限りは、每年大體左記決算額の金額によつて經營してゐる。

昭和十六年度決算額　九、七八一、一四

成田學園

園壽田成

第壹　成田壽園園長略歷……一
第貳　昭和十六年度成田學園園則……二
第參　同　學園園則……五
第四　同　學園園則……四
第五　同　學園園則……三
第六　同　學園園則……三
第七　同　學園園則……一
第貳　同　學園園則……二
第參　同　學園園則……一
第四　同　學園園則……一
第五　同　學園園則……一
第六　同　學園園則……一
第七　同　學園園則……一
第貳　同　學園園則……一

成田學園々歌

大友惟誠作歌
弘田龍太郎作曲

天地の恵みを籠めて
濁りなき心をいだき
教の道の嬉しさよ

二

仰ぎ見る御姿尊く
我が胸に正しく映し
教の園の明るさよ

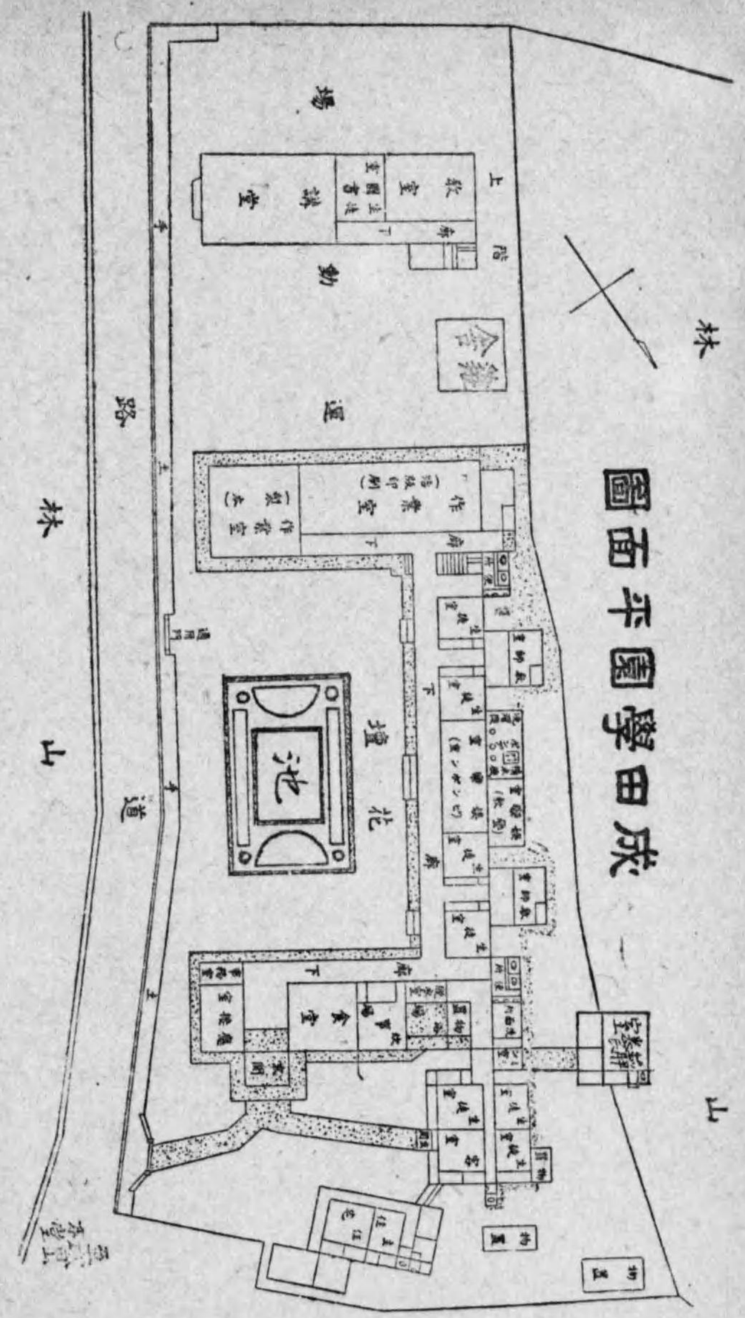
三

法燈のかゞやき絶えぬ
聳え立つ杉の林に
教の窓の尊さよ

鳴り出づるみ寺の鐘に
眞直なる希望に生きん

さゝぐるは降魔の劍
曇りなき叡智磨かん

靈境は淨くすがしく
剛毅き性いよゝ鍛へん


成田學園平面圖
林
山
道
路
林
山
道
花壇
池
動物場
上階
教室
寄宿舎
講堂
作業場
(裁縫室)
作業場
(木工場)
作業場
(鍛冶場)
作業場
(機織室)
寄宿舎
寄宿舎
寄宿舎

昭和十六年度　成田學園一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町四〇二番地、成田山新勝寺境内ノ西北部（電話成田一〇三番）

沿革

本園ハ成田山ノ經營ニ屬スル少年教護事業ニシテ千葉感化院ヲ前身トスルモノ、其ノ沿革左ノ如シ

明治十九年五月千葉感化院トシテ千葉町ニ創立、同二十一年四月成田山ノ經營ニ移管、同時ニ前々貫首故三池僧正院長トナル、同二十七年五月三池院長辭職、同年四月前貫首故石川僧正院長トナル、同四十一年三月成田山感化院ト改稱シ現地ニ院舍ヲ新築シテ移轉、同四十三年九月教育勅語謄本並ニ戊申詔書謄本下附セラル、大正十三年一月石川院長示寂、同年二月現貫首荒木照定其ノ後ヲ承ケテ院長トナル、昭和三年三月成田學園ト改稱、同十一年十一月創立五十周年記念祝典擧行、大正十一年以降宮内省、内務大臣（明治四十二年以降）厚生大臣、千葉縣知事、其他官廳並ニ諸團體ヨリ年々御下賜金又ハ助成奬勵金品ノ交付アリ。創立以來主任ノ交迭六名（内副院長四名、主任二名）

設備

土地總坪數三、一三五坪、此ノ内譯建物敷地九七二坪、運動場三五〇坪、耕作地（農業實習地）六七五坪其他一、一三八坪、建物ハ木造平屋建並ニ木造二階建ニシテ其數八棟二九六坪、園生宿舍、講堂、教室、作業場、靜養室、職員室、其他各室ニ分レ外ニ職員住宅アリ。

目的

不良行爲ヲ爲シ又ハ爲ス虞アル兒童ヲ收容シ少年教護法ニ準據シテ之ヲ保護教養シ其ノ資質ノ改善向上ヲ圖ルヲ以テ目的トス

入園退園

入園ニ滿七歳以上十六歳未滿ノモノ

退園ニ行爲改善後半年乃至壹ケ年ノ成績ヲ考慮シテ之ヲ定ム

在園費用

一ケ月　金拾五圓

但シ家計ノ都合ニ依リ一部又ハ全部ヲ減免ス

教護施設

日課

午前五時　起床・掃除
同　六時　ラジオ體操
同　六時卅分　御拜ニ宮城・大廟・不動尊・祖先訓話ニ御拜前行フ
同　七時　朝食（職員兒童共食）
自午前八時至正午　學科ニ個人指導
正　午　晝　食（同前）
自午後一時至同四時　實科（農業實習・活版印刷・簡易製本・手工）（心身鍛錬勤勞性ノ養成ヲ主眼トス）
同　六時　夕　食（同前）
自同六時卅分至同八時　學科ニ個人指導
同　八時　禮拜・訓話・就床（年長者ハ九時）

時局對應施設

說話・寫眞・揭示
不動尊・埴生神社ニ參拜
武運長久・國威宣揚ノ祈願
戰死者町葬ニ參列燒香
慰問文及慰問品ノ發送

其他

獻金
其他

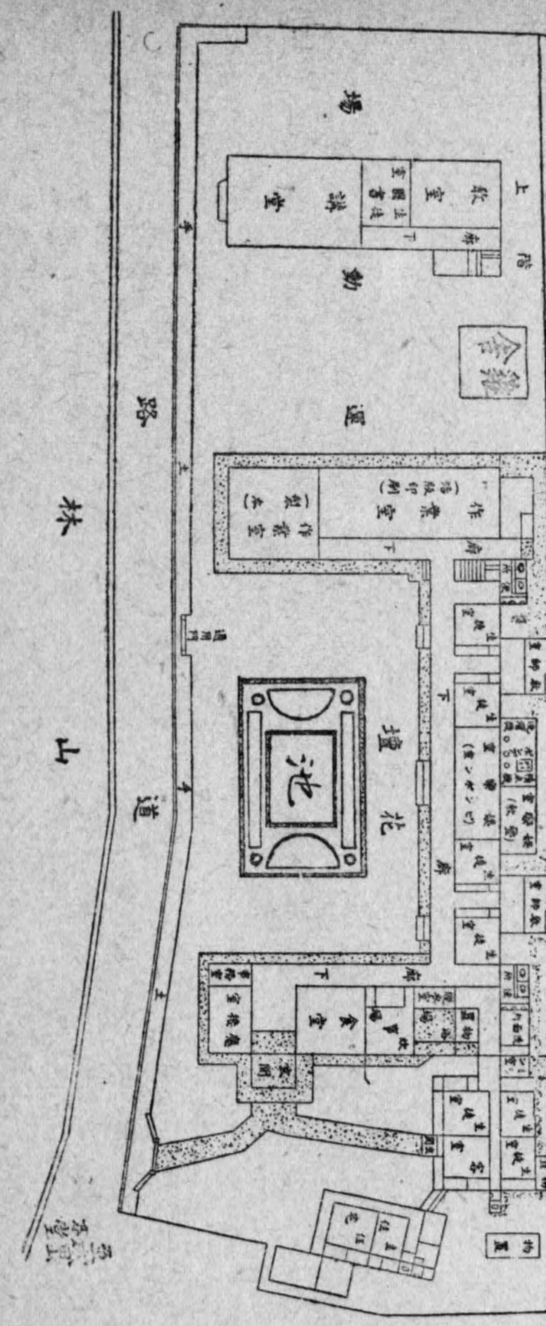
其他

娯樂運動ニ庭球・野球・ピンポン・遠足
角力・其他
自學自習ニ圖書室ニテ圖書閲覽
おやつニなるべく毎日實施
奉仕作業
劍道ニ毎週一回

園生狀況

最近二ケ年間ニ於ケル退園生一五五名ノ成績	成績良好ノモノ	一〇七
	成績良好ナルモ死亡ノモノ	一六
	成績未定或ハ不明ノモノ	三二
入園生總數		三〇六
年度内入園	入園生數	一三
年度内退園	退園生數	一六
在園生數	昭和十六年三月末現在	一七

園長主任	成田山貫首大僧正　荒木照定　大友惟誠
職員	六
經費	昭和十六年度決算額　二一、七三六・九九円
基本金	御下賜金・助成奬勵金・寄附金等ヲ基本金ニ蓄積
蓄積	現在蓄積高ニ現金　三三、〇〇〇・〇〇　有價證券　一、九三〇・〇〇



成田學園

第壹　位置並びに沿革

一　位置

本園は成田町成田四〇二番地（電話成田百三番）成田山境内西北に位する裏山に在り、東部は出世稲荷を經て、奥之院光明堂・本堂並びに公園に通じてゐる。西部は成田町幸町、南部は裏參道を隔てゝ、境内山林に面し、北部は同町土屋の街衢を丘上より眺め得る所の高地で、古木鬱蒼閑雅幽靜の地域を占めてゐる。

二　沿革

本園は成田山の經營に屬する少年教護事業にして其の沿革左の如し。

一　**設置**　明治十九年五月二十四日千葉感化院と稱し、本縣内佛教各宗寺院共同事業として千葉町に設置。

一　**開院式**　明治十九年十一月二十八日。

一　**維持經營の變更**　明治二十一年四月以降成田山新勝寺一手に本園を維持經營することに變更。

一　**創立當時の奔走者**　服部元良師・石井實禪師・金山堯範師・白井知三郎氏・坪井善四郎氏。

一　**新築並びに移轉**　明治四十一年三月二十五日現在地に園舍を新築してこれに移轉。

一　**御謄本下附**　明治四十三年九月七日、教育勅語謄本並びに戊申詔書謄本各一通下附。
大正十三年四月五日　國民精神作興に關する詔書謄本一通下附。
昭和十四年十一月三十日　青少年學徒に賜りたる勅語謄本一通下附。

一　**皇族御來園**　明治四十四年十月十七日　山階宮芳麿王殿下・久邇宮朝融王殿下・華頂宮博忠王殿下・久邇宮邦久王殿下・山階宮藤麿王殿下・本園へ御成り遊ばされた。尚ほ同月二十二日、更に　山階宮大妃殿下には、御姫君　安子女王殿下を御伴ひ、本園へ御成り遊ばせられ、生徒一同へ御菓子料を下賜せられた。

一 **宮内省より御下賜金** 本園事業御奬勵の思召を以て、大正十一年以降殆ど毎年紀元の佳節に當り御下賜金一封宛を拜受してゐるが、之は今や本園基本金の首位を占めてゐる

一 **内務大臣・厚生大臣より下附金品** 本園に於ける事業の功績を認め、且つ事業奬勵の趣旨により、明治四十二年二月十一日以降殆ど毎年金品御下附の光榮に浴してゐるが、夫等は總て基本金中に蓄積して多額に上つてゐる。外に花瓶一對（市岡榮雲作青銅製松上の鶴模樣）がある。

一 **司法大臣より下附金** 少年保護事業も併せ行ふ故を以て昭和十二年以降毎年下附金を拜受。

一 **本縣知事より奬勵金** 大正十一年以降毎年金圓を下附せられ、前と同樣基本金中に蓄積してゐる。

一 **平和記念東京博覽會より銅牌受領** 大正十一年七月十日曩に出陳した本園一覽に對し、賞狀並びに銅牌を贈られた。

一 **名稱變更** 明治四十一年三月廿五日成田山感化院と改稱昭和三年三月二十五日成田學園と改稱。

一 **恩賜財團慶福會より助成金** 本園講堂改增築助成金として昭和九年二月十一日、金五百圓の交付があつた。

一 **記念祝典擧行** 昭和十一年十一月二十八日、創立五十週年記念祝典を擧行。其の際記念事業の一として「成田學園五十年史」を編纂刊行した。

一 **本年度感謝錄** 昭和十六年度に於て各官衙より交付された奬勵金補助金並びに、一般寄附金品は次の通である。

宮内省	御下賜金	壹封
厚生省	補助金	壹千貳拾圓
司法省	奬勵金	貳百圓
千葉縣	補助金	五拾圓
金拾圓也		成瀨金太郎殿（成田）
金參圓也		坂上倉之助殿（成田）
金五圓也		川野邊茂雄殿（成田）
金貳百圓也		岩崎家殿（東京）
金貳拾圓也		山内登和子殿（成田）
金貳拾圓也		細谷理一殿（東京）
金拾圓也（生徒菓子料）		右同人殿（東京）
金拾圓也		成瀨ふく子殿（成田）
金五圓也（生徒菓子料）		田中正雄殿（廣島）
金參拾圓也		渡邊山松殿（成田）
金拾圓也（生徒菓子料）		愛婦千葉支部殿
理髮（毎月一回）		平澤光殿（成田）

以上

尙ほ本園の沿革を年表にて示せば次の通りである。

成田學園沿革年表（昭和十七年迄）

								（一）千葉縣下各宗寺院共立時代（二年間）
								（二）成田山新勝寺經營時代（五十四年經過）
								前期（い）
								千葉感化院時代（二十二年間）
								千葉縣下各宗寺院共立時代
								二年間
								總院
								船橋渡服石解三 長藤長 越邊島長部井良池 正健衛畅禪良俊鳳 元實教照
								二年間
								自 明治十九年五月三十四日
								至 同二十一年四月
								皇紀（二五四六）
								（二五四八）
								中期（ろ）
								成田山感化院及成田學園時代（三十四年經過）
								成田山經營時代
								二十年間
								（A）三池僧正時代（此ノ一部ハ（一）中ニ加ハルモ便宜ココニ加フ）
								（B）石川僧正時代
								（歸朝迄）
								（C）石川僧正時代（歸朝ヨリ成田院舍新築移轉迄）
								六年間
								自 同二十一年五月
								至 同二十七年五月
								自 同二十七年六月
								至 同三十三年四月（明治三十一年三月初外遊同三十三年四月末歸朝）
								（二五六〇）
								（二五五四）
								（二五五四）
								（二五六〇）
								八年間
								自 三十三年四月
								至 四十一年三月二十四日
								（二五六〇）
								（二五六八）
								後期（は）
								成田學園時代
								十四年間
								（C）荒木現山主時代
								十四ヶ年經過
								自 同三年三月二十五日（同年同月同日成田山感化院ヲ轉ジ二十年記念ト現山主歸朝ノ機會ニ成田學園ト改稱）
								（二五八八）
								（二六〇二）
								成田山感化院時代
								二十年間
								（B）荒木現山主時代
								四年間（四年二ヶ月）
								自 同十三年二月
								至 昭和三年三月二十四日
								（二五八四）
								（二五八八）
								（A）石川僧正時代
								十六年間（十五年十ヶ月）
								自 明治四十一年三月二十五日（千葉ヨリ成田ヘ移リ成田山感化院ト改稱）
								至 大正十三年一月三十一日
								（二五六八）
								（二五八四）

第貳　設備並びに教護

一　設備

土地總坪數　三、〇三五坪
内譯
建物敷地　九七二坪
運動場　三五〇坪
耕作地（農業實習地）　六七五坪
其他　一、一三八坪
建物　八棟　二九六坪

大部分は明治四十一年の竣工に係る木造平屋であるが、内作業室、教室、講堂は、昭和八、九兩年度の増改築に係り木造二階建である。

内譯
園生宿舍　七五坪
講堂及び教室　五一坪
作業場（活版印刷並びに製本室）　四八坪
職員室並びに職員住宅　三〇坪
靜養室　九坪
其他　八三坪

詳細は別紙平面圖の通り。

二　目的

本園は不良行爲を爲し、又は爲す虞ある兒童を收容し、少年教護法に準據して之を保護教養し、其の資質の改善向上を圖るを以て目的としてゐる。

三　入退園に關する内規

入園に關する内規

年齢　滿七歳以上十六歳未滿（何れの地何れの家庭より依頼せらるゝも差支なし）

謝絶　白痴、不具者、病者、不良程度のあまりに深き者

手續　本園の教育を依頼せんとするときは學校の通信簿を携へ保護者來園のこと。但し遠隔の地に在る方は郵送相談せらるゝも差支なし、而して愈々入園の節は本園所定の書式（別に印刷せる用紙ありそれに記入のこと）による書類と戸籍謄本を差出さるべし。

在園費　在園中は在園費として金拾五圓を毎月三日までに前納するを要す。但し家計の都合により其の一部若しくは全部を減免す。

備考　入園の手續は前記の如く何等面倒なく極めて簡單なり。

又前記の書類と雖も依頼人の希望によりては本園に於て代書するも差支なし。

入園の際は書籍文具衣類夜具等現に所有するものを持參のこと。

保證人は戸主にして身元確實なるものを選定せられたし。

新に入園生ある時は、先づ入園前の非行に對して、懇々と訓戒を加へたる後、本園生活の要領を知らしめ、不動明王の御惠みによつて、全く生れ更つた人となり、善良に進むべきことを諭し、講堂に於て入園式を行ひ、本園の人とならしめる。

退園に關する内規

生徒の改善を認め、退園を許すまでには、種々の階段を附ける。第一に不動尊を信仰する態度、第二に園外へ使に出し時々金錢を携帶せしめ、毫も不都合なき時、及び日常操行の良好右半年以上乃至一ヶ年間、同樣に持續した時を以て、改良生と認め、退園せしめる。若し不良の原因が、其の家庭にある時は　成るべく直ちに家庭に歸さないことを以て適當とし、父母の同意を得て、本園より直ちに本人の性行に適當する職業を選び、其の家へ紹介し、就職せしめることにして居る。此の場合に於ても、其の家庭及び周圍に十分注意を拂ひ、選擇することは勿論である。

本園の最も心勞するのは、實に此の退園後の成績効果である。何となれば在園中全く改善の成績を擧げ得たと確信せらるゝ生徒であつても、退園後には環境其の他によつて、動もすれば逆戻りをなし、其の效果が破壞せられる虞あるからである。故に本園に於ては、退園後の成績效果に對し、周到な注意をすると共に、油斷なく左記の保護視察を行つてゐる。

第一、本園職員の視察。第二、本園と書面の往復。

就中書面の往復は、本園の努めて勵行する所で、これは甚た平凡なやうであるが、最も有力な效果がある。尙ほ事情の許す限り、退園者とは親戚同樣の關係を持續して行くことに努めてゐる。（別項退園生の手紙參照）

四　園内教護の狀況

本園の生活は、普通一般の家庭生活と毫も異なる所はない尤も普通教育とは違ひ、ある一定の時間を限つて、教育するのではなくして、普通教育の時間以外に家庭教育として一般の躾をなすと共に、信仰の觀念を生ぜしめるのが、實に本園生活の精神であるから、此の根本精神に基いて、總ての施設方法を實現して居る。其の生徒待遇の方法に至りては、慈悲仁愛の情を以て、これに當るは勿論、一面には又整然たる規

律生活をなさしめ、亂雜放肆に流れない樣注意してゐる。然し乍ら本園は、悉く豫て定めたる成文によつて行動せしめ、監督するといふが如き方法ではなく、常に便宜を主とし、溫き家風　自然の慣例によつてこれを訓練し、力めて愉快な朗な生活をなさしめるを以て主眼としてゐる。約言すれば本園の生活は、信仰ある、規律正しい明朗な家庭生活といふことが出來る。

日課及び其の說明を擧ぐれば、左の如くである。

午前五時起床　直ちに掃除
午前六時　ラヂオ體操
午前六時三十分　御拜
一、皇室の萬歲を奉祝す　二、大廟遙拜
三、成田山不動尊禮拜　四、各自祖先敬拜
午前七時　朝食
自午前八時至正午　學科
正午　晝食
自午後一時至四時　實科(年長者は五時迄)
午後六時　夕食
自午後六時半至同八時　學科(年長者は九時迄)
午後八時　禮拜後就床

以上の如く定めてあつても、時季によつて時々變更するは勿論、便宜上臨時變更することもある。

起床　朝起は新勝寺の曉鐘に警醒せられ、蹶起せざるを得ないと云ふ習慣を作つてゐる。

清潔　清潔は本園の最も努めてゐる所で、每朝掃除の外日に數回これをなし、時々大掃除及び各室の清潔整頓を檢査してゐる。

衣服　普通の衣類、主として洋服を用ひてゐる。曾ては制服を用ゐたこともあつたが、今はこれを行つてゐない。

御拜　每朝講堂に於てこれを行つてゐる。兒童に敬虔の心を養成せしめる爲め、職員は特に敬虔的態度で、之に臨んでゐる。本園修身教育の大本としては教育勅語の御聖旨を奉戴することは勿論であるが、これが實踐躬行の實を擧ぐるには信仰の力を喚起しなければならないと信じてゐる。本園の特徵として、成田山不動尊を信仰せしめる所以も、卽ちこれである。

訓話　一般に對する訓話は、每朝先祖敬拜の際、及び就褥前不動尊禮拜の時、これを行つてゐるが、平易簡單なもので、これが爲めに、多くの時間を費してゐない。何となれば職員は生徒と起臥を同じうして行住座臥の間、これが師たり父兄たるの心を持し、實踐躬行所謂行を以て訓ふるのを旨としてゐるからである。然し個人に對しては、機會を捕へこれに投じて、其の兒童に適切に徹底的に訓話をなしてゐる。

食事　常に兒童の榮養狀態を考慮し、食事には相當の意

を用ひてゐる。而して職員生徒は皆一堂に集つて、食を共にしてゐる。

單に食事のみでなく、本園の生活は總てに於て「共に」といふことに最も留意し、學ぶにも、働くにも、遊ぶにも、常に職員生徒が其の行動を共にし、美しい圓滿な家庭を作ることに努力してゐる。此の「共に主義」は、特に兩者の親しみを深めるばかりでなく、教育上最も大切な、兒童の個性觀察といふことが、種々なる場面に於て、なし得る便宜が多いのである。

學科　概ね少年教護法施行令に據る教科目にて、午前中三時間乃至四時間（但し雨天又は冬期は午後に及ぶことがある。）夜間は一時間半、殆ど個人的に教授をなし、特に重きを實用方面に置いてゐる。而して向上の見込ある兒童であつて、品行も差支ないと認めた時は、國民學校又は上級の學校へ通學せしめることもあり、現在數名のものが通學中である。

實科　農業・活版印刷及簡單な製本・手工等を課してゐる。但し冬期は農業を行はない。耕地は目下二段二畝餘歩を有してゐる。印刷部は未だ完備の域に達しないが、普通の設備を有し、專ら新勝寺關係の印刷物を、其の實習材料に充て生徒中嗜好性能これに適する者を選んで習得せしめてゐる。

園內に於ける實科に對しては、生產的職業的技能を與へ、實社會に出でて、直ちにそれによつて自活し得るものを選ばなければならないと論ずるものもあり、本園も固より考慮したことであつて、先年印刷部を創設したもの、其の一端であるが、二、三の業務を設備したからとて、到底全生徒の個性嗜好に悉く適せしむることは至難であり、强いて職業を狹い範圍に押込むる嫌がある。殊に學園に適する授業師たる人物を得ることが至難で、施設の繁多な割合に好果を收められない憾みがある。よつて本園は教育終局の目的を主眼とし身體の鍛錬、精神の訓練、特に勤勞性の養成を目的として、以上のものを施設してゐる。

劍道　正科としてとりいれ劍道錬士加勢胖氏の篤志により一週一回一時間半宛教授して頂いてゐる。

娛樂　兒童の性情を圓滿に發達せしめ、愉快の中に教化の目的を遂げしめるため、娛樂には相當の意を用ひてゐる。

一　娛樂室　疊敷九疊　板敷十二坪の二室より成る娛樂室を設け、ラヂオ、（電氣蓄音機兼用）ビンポン・カロム・碁將棋等の娛樂具を此所に集めてゐる。

一　生徒圖書室　此所に有益なるお伽噺雜誌・小國民新聞・寫眞・繪畫等を置き、兒童の閱覽に供してゐる、尙ほ圖書は備付以外、時々圖書館より貸出を受けることもある。

一　散步遠足及び旅行　每月一日・十五日・二十八日、及び日曜日の午後には不動尊に參拜し、終つて散步せしめてゐる。又附近神社佛閣の參拜・水泳・船遊・魚釣・茸狩・栗拾

ひ、或は單なる山遊等で、數々山野の跋渉、郊外の遠足をなし、以て娯樂を兼ねた體力の養成を圖つてゐる。尚ほ春秋二回には、汽車・電車・自動車等に乘つて、遠方へ修學旅行もしてゐる。

一　四大節及本園記念日　當日は祝賀式後に、種々なる餘興をなして、一日を祝はしめるので、兒童は頗る樂しみとしてゐる。

一　誕生祝　園長を始め、職員生徒の誕生日には、其の夜職員生徒一堂に團欒し　茶話會を行つてゐる　特に生徒の誕生日には、該兒童に一日の休暇を與へ、早朝不動尊に參詣、其の立身出世を祈らしめ、本園より祝の意を表して、小遣を與へ、又は特に御馳走してゐる。

一　五月節句　柏餅にて茶話會を開いてゐる。

一　降誕會及義士祭　毎年四月八日・十二月十四日の日に祭祀を行つた後、園生希望の餘興を行つてゐる。

右の外、生徒各自が時節により、流行によつてする遊戯、例へば野球、輪廻し、獨樂・歌留多・雙六・陣取・鬼事・軍艦遊戯其他のものは、大抵自由に任かせ、濫りに拘束を加へないばかりでなく、多くの場合職員も亦これに參加するのを常としてゐる。

賞　罰　總て普通の家庭と狀態を同じくする希望で、賞罰の如きも固より格別の定めがない。毎年三月二十五日は本園の記念日で、當日は特に賞與を與へることを例としてゐるが平日は格別の善行ある場合の外は、賞與を與へない。

生徒の席順は一日より月末に至る一ケ月間、各生徒の操行成績を調査し、右の結果により（日々の成績表によるの外、更に職員の意見を附加す）翌月一日席順を改めることを例としてゐるのであるが、又其の席順並びに勤勞振りによつて、更に優劣を附け、夫々手當を支給して貯金させてゐる。

おやつ　毎日之を與へてゐる。尚ほ篤志の人々より、時々菓子等を生徒に寄贈せられることもあり、園長手許より生徒を慰めよと、特に珍菓・水菓子等を贈らるることも屢々あり又園職員へ他より贈られたる菓子等も、大抵は生徒に分與するを常としてゐるので、實際に於ては間食の度數も割合に多くなり、是等の點も一般家庭とあまり變る處がないのである。しかし最近は物資の不足から以上の如く實施し難くなつてゐるのも止むを得ない。

五　時局對應施設

今回の大東亞戰爭に就いては、園生にも時局の認識を深からしむることが最も緊要であることを痛感して、或は新聞にラジオに寫眞に、又は說話揭示等によつて其の徹底を期し、緊張の生活を送らしむることに努めてゐると同時に、一面には他と合同又は單獨にて、不動尊並びに埴生神社に參拜、國威宣揚武運長久の祈願をなし、更に出征將兵の歡送より、戰死者町葬參列、慰問文及慰問品を送つたりしてゐる。

從つて本年度は恒例の臨海生活を廢し、修學旅行等もなるべく控目とし、只僅に香取神宮への武運長久の祈願旅行、及千葉海岸に海水浴をなさしめ近所への遠足を數回行つただけである。

第參　教護の成績

明治十九年開園以來、入園生は三百六人であつて、歷史の古い割合に、其の數甚だ少いかの感もあるが、これは此の教護思想の未だ普及しなかつたことゝ、又本園の所在が都會地でなかつた爲めとに原因するのは勿論であるが、更により大なる原因は、本園が敢て在園生の多きを欲しないことである。

在園生の多數といふことは外見上極めて立派であるが此の教育の性質上からは、決して望ましいことではなく、教育本位にこれを考へるならば、寧ろ少數程效果的であることは明らかなことである。本園は幸に經營上に困難なく、專ら教育的效果を本位に考へ、敢て外見を飾るの必要がなかつた爲め、常に園生の多いことを欲しなかつたのである。

現在としても優に三四十名を收容するの設備はあるが、成るべく二十五名位より多くしないことも此の故である。

以上記載した如く、形式は兎も角實質に於ては、飽くまでも子供本位にして居るから、其の成績は割合に良好である。

試に最近の成績をあぐれば、左の如くである。

大正十年以降の入園者百七十二名　一五五名

退園生　一〇七名

内

時々文通あり、成績良しきもの　一六名

成績良好なりしも、死亡したるもの　三二名

文通なく、成績不明憂慮中のもの　一七名

現在生

第四　生徒狀況

一　本年度入退園狀況

本年度に於ける園生入退園狀況左の如し

前年度繰越生	二〇名	本年度入園生	一三名
本年度退園生	一六名	現在園生	一七名

二　入園時に於ける調査

入園當時に於ける園生の「教育程度と年齢」、「保護者の職業」を示せば次の通りである。

入園時教育程度と年齢（明治三十四年以降）

教育程度＼入園年齢	9歳以下	10	11	12	13	14	15	16以上	計
不就學	三	五	三	五	三	二	一	一	二三
尋一	一三	二	二	一					二〇
尋二	五	三	一	一	三	三	二		一八
尋三	三	八	三	二	四	三	二		二七
尋四		二	四	九	五	四	四	五	三四
尋五			五	一〇	一三	二	二	五	三七
尋六				四	一五	九	八	五	四一
高一					二	一一	八	一六	三七
高二以上							三	一六	一九
計	二四	二一	一八	三二	四五	三四	三二	五〇	二五六

入園時保護者と年齢（明治三十四年以降）

保者＼入園時年齢	9歳以下	10	11	12	13	14	15	16以上	計
實父母	二	二	三	九	一九	一一	一三	一六	七一
實父	二	二	三	三	四	二	二		一七
實母	三	一	二	五	六	九	二	九	三五
繼父・實母	二	二	三	二	二	二	二	二	一七
實父・繼母	二	八	五	八	六	五	二	一三	五〇

入園時保護者の職業（明治三十四年以降）

| | | | | | | |

◇

拜啓其の後先生にはお變りは御座居ませんか、僕は元氣で毎日一生懸命にやつて居りますから御安心下さい。

此ちらへ來ると皆知らない人ばかりですが、なんだかもう二三年前からの友だちのやうになつてちつともさみしくはありませんし又いろ／＼と教官殿の話を聞くととてもよいところです僕は先日先生に言はれた事をよく守つて一日も早く國家のお役に立つ人に成らうと思つて居ますいろ／＼こちらの生活の事は後文にておしらせします。

◇

はいけい、しばらく、ごぶさたいたしました、大友先生も皆さんもおかはりありませんか、僕の家も皆な元氣で居りますからごあんしん下さい。

僕が、これまでりつぱな人間となれたのも皆な大友先生のおかげです。

僕も今〇〇國民學校の三年となつて、一生けんめいに勉强をして居ります。

僕も、はやくりつぱな人になつて東京へ歸つて大友先生に恩をかへしたいと思つて居ります。

先生お體を大切に。

先生のおかげで、こんなに勉强ができるようになつたと、お父さんも、お母さんも喜こんで居ます。さうなら

精一よりお父さんもよろしく

大友先生へ

◇

拜啓帝國が米英國に宣戰の大詔渙發され時局は、重大となりました久しく御無沙汰致して居りましたが皆樣にはお變りありませんか當方も皆んな元氣に暮して居りますれば他事ながら御休心下さい。

其の後、子供も至極元氣にて、お乳も澤山ありますしめき／＼と太つて行きます、これからさき自分にも、何時、召集が無いともかぎりません、一度お伺ひして先生並に奥さんにお目に掛りたき考へで居りますが私としては隣組防空群長として、すでに防空實施を下命された今日忙しくなり、あるひはお會出來ないか知れません出來るだけの事をして少しの時間でもたつた一眼でもお會したいと想つてゐます、私しには出來ないと思つた子供も出來ました何時召集が來てもけつして人に負けない體に成りました萬が一召集されない時は、組長として町の爲め國の爲めに一身をさゝげて働く考へで居ります小さい時から、さんざ、御心配を掛け今なほ、何につけ御心配下さる、先生や奥さんに何んの御おんがえしもせずざんねんですが今後の私しの働きを遠い成田より見てゐて下さい。

さて今年の春旅立つた改之君から上京するからとの知らせを受取り非常に喜こんで待つて居ましたが、今日に至るも何んの便りもありませんがざんねんです取急ぎ亂筆にて失禮しました增々寒くなります、皆樣にも御身體を大切にして下さい。

その内にお伺ひ出來るかも知れませんそれを樂しみに一生懸命働きます。さやうなら

◇

前略御便り有難く拜見致しました。

先生はじめ皆樣御壯健の由小兵心より悦んで居ります、内地はとても大變の雪だつたそうです、でも色々と作物が良くとれる事と存じます、小兵も熱砂に負けず一生懸命軍務に勵み居りますれば何卒御休心下さい。

當地は此の四五月が一番暑い時です、小兵達ももう此の暑さになれて心持良いものになりました、それに果物が一番とれる時なのですよ、椰子、バナナ、マンゴー、色々のおいしいものがあります。

此の御便りが先生の所に着く頃は櫻も葉櫻に變るでせう、櫻の花は見たくもありませんよ花は皆どく／＼しい一色花です、眞赤、眞黄、といつた樣にうすい色だとか美しくまざつた色の花はいくら探がしてもありません一寸淋しいです。

椰子は大分たべました、うまいですね、くるみと同じ樣な味です此の寫眞は〇〇で寫して居ります後はみなバナヽと椰子の林です頑張つて居るでせう大東亞戰爭の勝利を目指して言葉も良くおぼへました、もう鬼に金棒警備に宣撫に一日一日と進軍できる事を感謝致して居ります。

きつと奮鬪して先生にお目に掛けます待つて居て下さい。年をおとりになつた先生充分御身御大切にして〇〇は毎日遠く南國の空から先生奥樣はじめ皆樣の御多幸と御壯健であらせられる樣に心より御祈り致しております。

先づは亂文にて御返事旁々御禮まで

敬具

◇

拜啓兎角御無音に打過失禮致して居ります。向寒の折柄先生奥樣には益々御壯健にて御落しの事と存じます。……當方も御蔭樣にて過し居りますれば先は御休神下さい。

本年も愈々押詰つて參り先生には益々御多忙の事と拜察致します小生も御蔭樣にて風邪一つ引かず元氣にて毎日仕事に精出して居ります、先日小生にも愈々適齡屆が參りました、檢査には是非共甲種合格に成つて御國の爲に働いて、成田山の御恩の萬分の一つでも返し度いと存じて居ります。時局正に風雲急ならんとする時萬一の御用におくれを取らぬ樣日夜身体に氣を付けて居ります。

◇

過日第一日曜日に友達と筑波山へ行つて參りました。成田に居つた時先生に伴れられて、一度登山しましたが其の時はそんなくたびれも致しませんがしたが今度は、すつかり參つてしまひました。

成彦さん恭子さんは元氣ですか、宜敷しくお傳へ下さい。奥さんにもどうぞ宜敷御傳へ下さい、先生にも向寒の折柄お體に充分氣を付けられて、御健康御自愛の程をお祈り申上ます。

右簡單乍近況お知らせ致します。

敬具

◇

拜啓長らく御無沙汰致しまして申譯有りませんでした先生奥樣御一同樣にも御變り御座居ませんでせうか私も相變らず元氣にて丈夫で一生懸命國の爲働らいて居りますから御安心下さい。

自分は手紙を出そう／＼と途中まで書きますが文句と字が下手なので出さずにいつもそのまゝにしてしまひました御許し下さい。

手紙が突然なのでさぞ吃驚致す事と思ひます先生の所へ十一歳の時に行きましたがもう二十歳になりました月日のたつのは早いもので御座居ます來年は兵隊ですが今から死を覺悟で仕事に突進致して

居ります。

先生印刷の方は物資の不足でこまる事でせう、夜なんかよく成田の公園なんかが夢に出て來る日がたび〳〵有りました、御正月には成田へでも遊びに行こうと思ひます、よいでせうか三年も御無沙汰致しましたのでなんだかしかられるかと思ひます、高崎と成田はすこし遠いので行かずにしてしまひましたが、こんどは土浦です遊びに行くのには日曜のたんびに行けると思ひます。

成彦さん恭子ちやんも大きくなりました事で御座居ませう、まだおぼえて居てくれる事と思ひます。

自分は今、土浦市外の寄宿舎に居ります、高崎で十月四日に徴用令がまゐりまして茨城縣阿見村にある海軍の第一海軍航空廠といふ工場で國の爲働いて居ります寄宿舎生活も先生の所で朝五時起床して居たのでとても樂です。

先生方御一同と筑波山へ來た時土浦でおりましたですね、私も土浦に來た時はすぐに先生につれられて來た事が目にうかんで來ました、まるで夢の樣です、始の内仕事が骨折でしたが今はすこしなれました私も　且召されたからは最後までがんばつてまゐります。

先生お年を取りましてお勤めに隨分お骨折の事で御座居ませう、御寒に向ふ折り御體を御大切にして下さい私は土浦の地よりお祈り申上げます其の内面白いニュースがお知らせできる事と思ひます。

便り致さねば自然無沙汰續きに成りますが元氣一ぱいに働いて居る事と思つて戴きます。

文句や字が下手ですがお許し下さい。さようなら

◇

前略大變暖に成りましたさすがに雪の〇〇と云はれた此方も今日は雪など全く無く近頃では雨さへ降らず日中などは仕事をして居りますと暑いくらゐです櫻の花も最早開きそうです春が來ると又思ひ出されます三里塚の櫻講堂の櫻公園の櫻當時がとても懐しう御座います未だ御正月を過したばかりだと云ふに又來る正月が待ちどうしくて成りません成田へ行けるからです、近頃工場の方も忙がしくて本當に幸はせです、大抵の月は九拾何圓ぐらゐが毎月のきまりですが三月の月は百六圓七拾錢も戴きました其の上妻が五拾參圓五拾錢鐵工場へ行つて居る弟が參拾圓、家内の者三人して百七拾圓以上も稼ぐので母も大變に喜んで父が亡くなつて子供ばかりの處へ來て毎日一心に働いて呉れて本當に濟ないと云つて常に子の私しに感謝し居りますそう云はれゝば云はるゝ程嬉しくて益々々働き度くなります御不動樣や先生の御蔭樣で今の自分は全く世の中に救ひ出されたと思ひ居ります。（中略）今日は工場の休で朝六時半に起きて御手紙を書きました九月か十月頃何うやら子供が生れそうですから母も私しも何んなに樂しみか知れません生れたら早速先生から名前を付けて戴こうとこれも又樂しみにして居ります、では又後便で、さようなら。

第五　歴代園長並びに主任

總　長（千葉感化院時代は總長を置く）
船越　衛、藤島　正健、渡邊　暢
院　長（昭和三年以前は院長と稱す）

各宗共立時代

服部　元良　自明治十九年五月至同二十年四月
石井　實禪　自明治二十年五月至同年十一月
解良　敎俊　自明治二十年十一月至同二十一年四月
三池　照鳳　明治二十一年四月

新勝寺經營時代

三池　照鳳　自明治二十一年四月至同二十七年五月
石川　照勤　自明治二十七年六月至大正十三年一月
荒木　照定　自大正十三年二月至現在

副院長（副院長は後主任となる）

坪井善四郎　自創立至明治三十一年十二月
松田　宥禪　自明治三十三年八月至同年十一月
大友　秀松　自明治三十三年十一月至同三十五年二月
峯川　照和　自明治三十五年二月至同四十二年八月

主　任

大友　秀松　自明治三十五年二月至大正十年一月
大友　惟誠　自大正十年一月至現在

第六　職　員

（〇印は園内常住者）

園主兼園長　荒木　照定
主　任　〇大友　惟誠
會計主任　淺井　照次
敎　師　押尾　清
敎　師　〇石原　重固
保　姆　〇大友　靜子
篤志園醫　醫學博士　藤崎　公道
篤志眼科園醫　醫學博士　山崎　一雄
篤志齒科園醫　新橋　利吉
篤志整骨園醫　小倉　桂
篤志劍道敎師　加勢　胖

職員一同は、園長の指導監督を受くるは勿論、能く園長の精神と、本園職員たるの自覺とにより、職務に從ふの外、現在としては別に職員に對する成文の訓令はない、唯協同一致して圓滿に、且つ規律ある家庭を作るのを目的とし、而も此の範圍に於て、自由に活動を許し、濫りに牽制を加へない組織である。

藤崎公道氏は、嚴父關川博道氏（前篤志園醫）のあとを受けて其の職に在るが、其の經營に係る如春堂病院醫員を擧げて常に園生の保健に留意せられ、殊に疾病治療に際しては、熱心親切にこれに當られ、更に山崎眼科醫院長山崎一雄氏は眼科を、眞木齒科醫院新橋利吉氏は齒科を、小倉整骨醫院長小倉桂氏は整骨外科を、擔任せられてゐる爲め、入園し來る兒童は精神狀態が薄弱で身體强健でないもの多いに係らず、

日を經るに從つて、健康狀態良好となり、稀に疾病、負傷等あるも後害を遺した者の少いことは、本園の最も欣幸とし、最も誇りとする所で、是等諸士の高情に對し深く謝意を表してゐる次第である。

第七　經費並びに基本金

一　昭和十六年度決算

本園には嚴密なる豫算はないと云ふ方が事實に近い、固より大體の豫算を定めて置き、右を標準として支出をなし、嚴に濫費を防ぐ事は申す迄もないが、實際には必要に重きを置き、必要なる以上は實費を支出するのに躊躇しない、從て亦豫算内だからといつて必要もない費途に無理に消費するやうなことのないのは無論であり毎月定日本園經費の金額を新勝寺會計主幹から領收し、之を支出する慣例であるが會計上園長及主幹より未だ曾て一言の注意質問を受けたこともない。全く深い信頼を與へて、濫りに細小の監督を加ふるやうなことはないのである。此結果は自然、局に當る者に對し、自制心を與へ、求めないで總ての節約が行はれ、其效果は慥に豫算を限定する以上であつて更に頗る便利を極めて居る。左に記載するのは昭和十六年度の決算である。

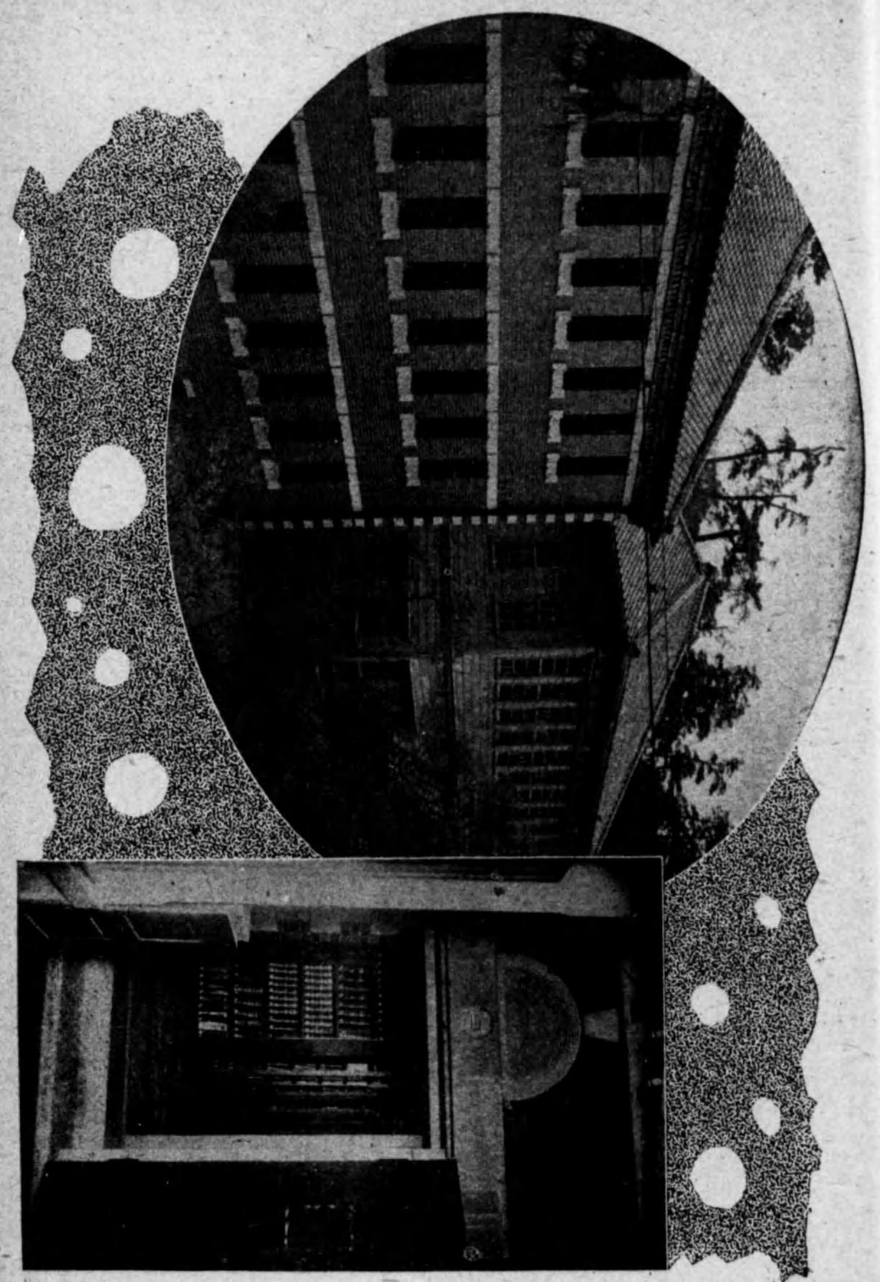
昭和十六年度決算

歳入	經常部	二〇、二一二・〇三円
同	臨時部	五、〇九四・六五
合計		二五、三〇六・六八
歳出	經常部	一五、五七三・八三
同	臨時部（基本金積立を含む）	六、一六三・一六
合計		二一、七三六・九九
歳入歳出差引殘高		三、五六九・六九

二　基本金の蓄積

明治四十一年三月、本園を千葉町より成田町へ移轉して以來、前掲の如き官公衙の奬勵助成金及び各篤志家より本園へ寄附せられた金員を蓄積して、基本金を作るの方針を採り、目下着々實行中である。しかし本園は自ら進んで一般より寄附金を受けようとするの方法はこれを採らず、專ら篤志家の同情、義捐に任せて來たのであるが、現在金參萬參千圓と、有價證劵千九百參拾圓を蓄積するに至つてゐる。

成田圖書館



成田圖書館

庫書

寫眞

昭和十六年度成田圖書館一覽

圖書分類要目表

目次

第壹　位置並びに沿革……九一頁
一　位置……九一
二　沿革……九一
第貳　設備並びに施設……九二
一　建物・設備……九二
二　館則……九二
三　藏書……九四
四　目錄……九五
五　施設……九六
國民學校との連絡……九六
參籠堂文庫……九六
團體貸出……九六
婦人のための家庭配本……九六
佛教雜誌論文索引編纂……九七
刊行物……九七
第參　閲覽狀況……九八
第四　歷代館長・顧問・主事……九九
第五　職員……一〇〇
第六　經費……一〇〇
第七　昭和十六年度錄事……一〇〇
第八　昭和十六年度圖書寄贈者芳名……一〇一
第九　昭和十六年度雜誌、新聞寄贈者芳名……一〇四

圖書分類要目表

0 總類

00 鄉土資料
01 圖書•圖書館
02 叢書
03 統計
04 叢書•全集
05 新聞•雜誌
06 協會•學會
08 稀覯書
09 隨筆•雜書

1 宗教•哲學•教育

10 宗教
11 神道
12 佛教
13 基督教
14 哲學
15 論理
16 心理
17 倫理
18 支那哲學
19 教育

2 文學•語學

20 文學
21 日本文學
22 支那文學
23 歐米文學
24 小說•戲曲•講談落語
25 兒童文學
26 論說•演說•式辭速記
27 語學
29 外國語

3 藝術•演藝

30 藝術
31 美術
32 書畫
33 書道
34 繪畫
35 彫塑•骨董•美術工藝
36 寫眞
37 印刷
38 音樂
39 演藝

4 歷史•傳記•地理•紀行

40 歷史
41 日本史
42 東洋史
43 西洋史
44 傳記
45 地理•紀行
46 日本地誌
47 亞細亞地誌
48 歐羅巴地誌
49 亞米利加其他諸國誌

5 政治•法律•經濟•軍事

50 法制
51 政治
52 外交•國際
53 植民
54 法律
55 經濟
56 財政
57 軍事
58 陸軍
9 海軍

6 社會•風俗•家庭•娛樂•運動

60 社會
61 社會政策
62 社會運動
63 社會思想
64 社會問題•社會事業
65 家族及兩性問題
66 風俗
67 家庭及家政
68 娛樂
69 運動

7 理學•數學•醫學

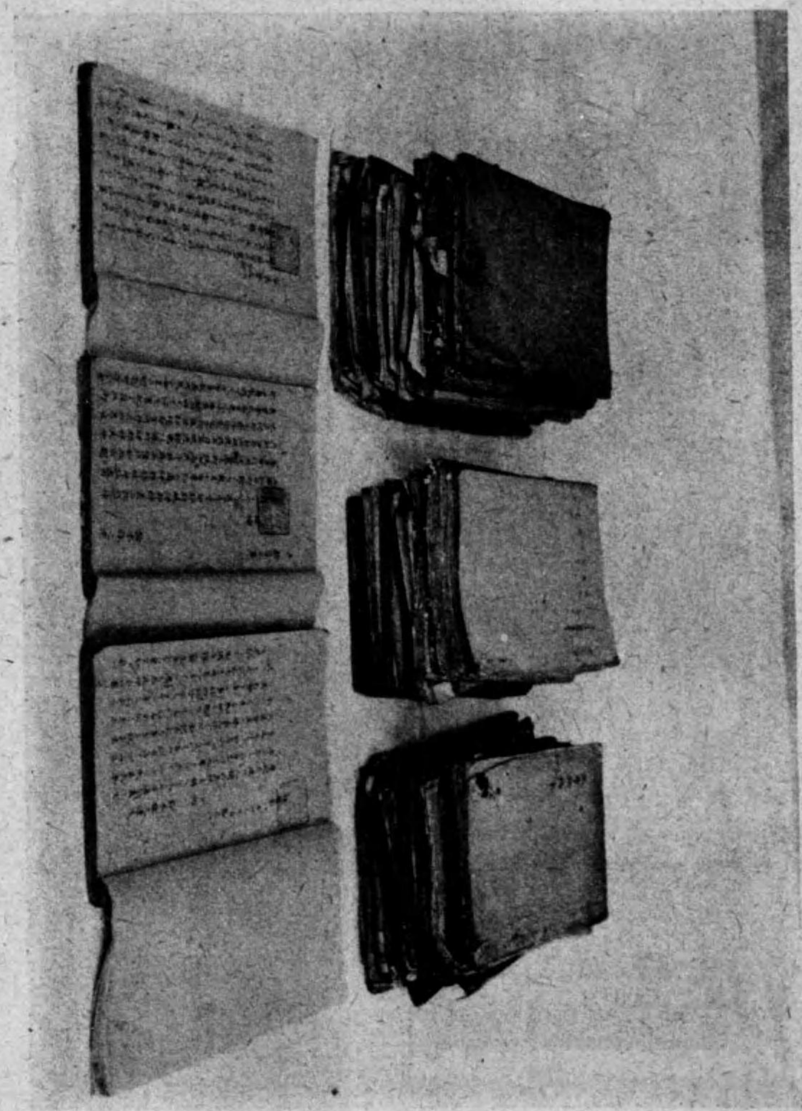
70 理學
71 數學
72 物理•化學
73 天文學•地文學
74 博物
75 醫學
76 基礎醫學
77 臨床醫學
78 治療學
79 保健法

9 工學•交通•通信

80 工學
81 土木工學
82 建築
83 機械工學
84 電氣工學
85 鑛山學
86 造船學
88 交通
89 通信

9 產

90 產業
91 農業
92 園藝
93 林業
94 畜產業
95 蠶業
96 水產業
97 工業•工藝
98 鑛業
99 商業



蔡謹，五氏之雅木鈴

位置

千葉縣印旛郡成田町成田三百十二番地　成田山新勝寺境内ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹（電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續）

本館ハ成田山ノ經營ニ屬スル圖書館事業ニシテ前貴族文石川曾王ノ發意ニ依リ明治三十四年一月父瑞司

昭和十六年度 成田圖書館一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田三百十二番地　成田山新勝寺境內ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹（電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續）

沿革

本館ハ成田山ノ經營ニ屬スル圖書館事業ニシテ前貫首故石川僧正ノ發意ニ依リ明治三十四年一月設置同時ニ同師本館ノ館長トナリ同三十五年三月開館閱覽ヲ開始ス、同四十年三月書庫落成、大正十三年一月館長示寂、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ館長トナル、此間主事ノ更迭四名

設備

敷地一、〇二八坪、建物ハ木造二階建一棟、煉瓦造三階建書庫一棟、附屬建物木造平屋建六棟、此ノ坪數三三〇坪ニシテ閱覽室・事務室・目錄室・雜誌書庫・書庫其他各室並ニ便所・小使室・職員住宅等ニ分ル

目的

圖書雜誌ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閱覽ニ供ス

藏書

藏書數	特別集書
一二三、八四七冊	兒立栗園文庫 一、三四冊　木村泰賢文庫 一、六八七冊　石川鴻齋文庫 古二冊　白鳥庫吉文庫（一部受理）　望洋文庫 三、六〇〇冊　依田學海文庫 二、五六冊（前貫首石川僧正遺文庫）

施設

開館日數：三二四日　前年度開館日數：三二一日

- 館內閱覽
  - 和洋共覽ニ右半敷
  - 和裝書ニ二種十二冊
  - 洋裝書ニ二種二冊
- 貸出
  - 一週間乃至三週間
  - 和裝書三冊洋裝書一冊
- 閱覽施設
  - 貸出文庫ニ新更會巡回文庫用トシテ貸出
  - 團體貸出ニ青年團體並ニ其他團體ヘ
  - 參籠堂文庫ニ斷食參籠者ヘ
  - 家庭配本ニ各家庭ノ婦人ヘ配本
  - 佛教雜誌論文索引編纂
- 讀書奬勵施設
  - 國民學校トノ連絡
  - 講話ニ兒童生徒・青年團其他
  - 刊行物配布
    - 青年讀物百選
    - 館報

備考

圖書館ノ附帶施設トシテ行フベキ社會教育的事業ハ新更會ニ於テ實施セラルヽニ付本館ニテハ只單ニ讀書奬勵ノ施設ノミヲ行フ

圖書閱覽狀況

分類別	百分比	分類別	百分比
文學・語學	五九・六	總類	二・七
宗教・哲學	五・三	產業	一・七
教育	四・九	工學・交通通信	一・三
醫學・數學	四・八	〇	
歷史・傳記・地理・紀行	三・二	兒童圖書	一〇・三
社會・風俗	三・一	計	一〇〇・〇
娛樂・運動	二・九		
藝術・演藝			
政治・法律・經濟・軍事			

（順位ニヨリ列記）

職業別	一日平均	職業別	一日平均
學生・生徒	七三・七	官吏・軍人	〇・四
其他	三八・七	兒童	一六・二
農業・水產業	一〇・六	計	一五〇・八
商業・交通業	六・四		
教育・宗教・家記者	三・八		
鑛工業	〇・六		

（順位ニヨリ列記）

一日平均ノ閱覽者	一五一人
一日平均閱覽冊數	一八〇冊
閱覽延人員	八七四人
配本冊數	八七四冊

職員

館長	成田山貫首大僧正荒木照定
顧問	今澤慈海
主事	成田善亮
職員	一〇

經費

昭和十六年度決算　一八、四五六・一四七

成田圖書館

第壹　位置並びに沿革

一　位置

成田圖書館は、成田町成田三百十二番地に在りて、成田山の東南麓景勝地の中央に位し、東は成田高等女學校に、西は成田山本堂に隣し、南に成田町市街地を控へ、北は丘陵地帶の成田山公園に接し、翠滴る老樹を以て蔽はれ、冬は暖かに夏は涼しく、圖書館としては最好の位置である。

二　沿革

本館は成田山の經營に屬する圖書館事業であつて、明治卅四年一月十一日設置を開申し、翌卅五年二月一日を以て開館した。卽ち前貫首故石川僧正が明治卅一年歐米視察の途に上り、同卅三年四月歸朝後直に列國の風潮に鑑み、積年の理想を實現する爲に設置せられたものであるが、館主は取り敢へず現地に建築されてあつた一府三縣農水產物品評會々場の跡を、そのまゝ使用することになつたのである。

斯くて開館に際し、從來新勝寺に所藏せられてゐた佛書・漢籍約七千冊、是れに石川僧正所藏の宗教・哲學・教育・文學・語學・歷史・地理・傳記・紀行其の他の新刊書約七千冊と、洋書五百餘冊、合計約壹萬五千冊を藏書として開館し、尙ほ更に當町石川愛一郎氏・三橋金太郎氏・鳥居直哉氏・大野市平氏・小川叡應氏を始め、其の他の有志者より多數の圖書を寄贈され、同年五月までに其の數一千餘冊を增加したのである。然るに當時は書庫もなく、目錄も具備せず、只同建築物の四周に書架を列べ、只一人の事務員にて閱覽事務を取扱つてゐたが、其の後漸次閱覽人の增加と共に圖書も增加し職員も增加となり、同三十五年六月には和漢書分類假目錄完成、次いで同三十八年二月より館外貸出を開始　爾來年を追つて藏書數も益々增加したので、書庫の必要を感じ、同三十九年三月書庫新築着手、同四十年六月九日之が落成式を擧行此の日を以て本館永遠の記念日と定めた。

藏書數も同四十一年には四萬冊となり、愈々印刷目錄の急務を告げたので、同四十四年十月には和漢書分類目錄第壹編を刊行、更に大正三年には同第貳編を刊行し、又閲覽方面に於ても、同四十四年一月より夜間開館を實施して、一層閲覽者の便益を圖ることゝなつた。

然るに大正十三年には、不幸にして館長石川僧正が物故せなれたが、現貫主荒木僧正には直に其の後を襲ひて館長に就任、鋭意館勢の發展に留意され、時代の趨勢に順應して圖書備付の充實・鄕土資料の蒐集を始めとして、貸出文庫・團體貸出・參籠堂文庫並びに家庭配本の實施・印刷物の刊行・各種展覽會の開催等を行ひて從來の面目を一新し、藏書數も十二萬餘を算し、閲覽人も頓に增加して一日平均百五十餘名を數ふるに至つた許りでなく、本館をして眞に積極的進出の現代的圖書館とせられたのである。

此の間事務主任たる主事の交迭は四名に及んでゐる。卽ち初代の主事は高津親義で、其の功績も少くなかつたが、昭和二年十二月勇退して顧問（同十一年十一月卒去）となり、其の後小林力彌・高井觀海の兩主事を經て、同九年には司書成田善亮昇格して主事となり、以て今日に至つてゐる。

第貳　設備並びに施設

一　建物・設備

書庫を除く外の本館建物は、もと〳〵舊物利用のものであるから、圖書館として遺憾の點多々あることは免れないが、從來之を適當に區分し、階上を一般閲覽席に、階下を婦人・新聞の各室に指定してゐる。卽ち閲覽室其の他の建物設備を略記すれば次の通りである。

閲覽室（木造二階建）延七十七坪、目錄室（木造）六坪、事務室（同）九坪、宿直室（同）四坪　使丁室（同）三坪休憩室（同）三坪、應接室（煉瓦造）（六坪）書庫（煉瓦造三階建）延九十坪、雜誌書庫（木造）六坪、兒童室（木造）十四坪住宅其他附屬建物（木造）百二十六坪餘

就中書庫は明治四十年の新築に係るが、藏書充滿、增築の必要急なるものがある。

一　館　則

成田圖書館貸出規則

第一條　本館ハ主トシテ一般圖書、雜誌等ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閲覽ニ供シ社會ノ智德啓發ニ裨益スルヲ以テ目的トス

第二條　何人ニテモ滿十二歲以上ノ者ハ本館ニ來リテ圖書ノ借覽ヲナスコトヲ得

第三條　本館ハ左ノ時限ヲ以テ開閉ス

	開館時限	閉館時限		開館時限	閉館時限
四月	午前八時	午後八時	十一月	午前九時	午後八時
五月			十二月		
六月			一月		
七月			二月		
八月			三月		
九月					
十月					

第四條　本館ノ休日ハ左ノ如シ但臨時休館ハ其時々揭示ス

歲首　自一月一日　至同七日　館內掃除　每月末日
紀元節　二月十一日　天長節　四月二十九日
記念日　六月九日　明治節　十一月三日
曝書期　九、十月中　凡十日以內　歲末　自十二月二十八日　至同三十一日

第五條　本館ノ閲覽ハ總テ無料トス

第六條　圖書閲覽希望者ハ閲書閲覽證ヘ求需ノ書名冊數番號及住所職業氏名月日ヲ記入シ出納所ヘ提出シテ借受クベシ

第七條　佳附圖書ノ員數ハ求覽人ニ對シ一時ニ和裝書ハ二種十二冊洋裝書ハ二種二冊ヲ限リトシテ和洋併借ノ時ハ各其ノ半數ヲ過グルヲ得ズ
但語學ニ關スル辭書ノ併借ハ此ノ制限外トス

第八條　借受ノ圖書ハ閲覽室外ヘ携帶スルコトヲ得ズ

第九條　過失ト故意トニ關セズ借受ケノ圖書ヲ紛失シ又ハ汚損毀傷シタル時ハ同一ノ圖書若クハ相當代價ヲ辨償セシム但シ汚損ノ狀況ニヨリ本文ヲ斟酌スルコトアルベシ又其行爲ノ次第ニ依リ一ケ月乃至一ケ年登館ヲ謝絕スルコトアルベシ

第十條　本館ノ規則ニ違背シ又ハ不法ノ行爲アル者ハ其ノ情況ニ依リ登館ヲ謝絕スルコトアルベシ

第十一條　閲覽室ヲ一般・婦人・兒童ノ三種ニ別チアレバ猥リニ他席ヲ侵スベカラズ

第十二條　閲覽室內ニ於テハ一切音讀・談話・喫煙ヲ禁ズ

第十三條　何人ニテモ圖書ヲ寄贈セラルヽトキハ其ノ目錄員數及ビ住所氏名ヲ詳記シ寄贈圖書ニ添テ送付セラレタシ但寄贈圖書ノ運搬費用ヲ自辨シ難キ向ハ時宜ニヨリ本館ヨリ支辨ス

第十四條　凡ソ公衆ノ閲覽ニ供シ若クハ保管ヲ請フノ目的ヲ以テ本館ニ圖書ヲ委託セント欲スル者ハ其ノ事由目錄員數ヲ詳記シ必ズ本館ヘ照會シ承諾ヲ得タル後其ノ圖書ヲ送附セラルベシ委託ノ圖書ハ館藏ト同一ノ取扱ヒヲナスベシ委託ノ圖書ハ厚ク保藏スト雖モ不幸火災盜難其ノ他天災ニ罹リテ損失敗亡ヲ來スコトアリトモ本館ハ其責ニ任ゼズ

第十五條　館外圖書貸出ハ別ニ之ヲ定ム

成田圖書館貸出規則

第一條　本館圖書帶出ノ希望者ハ左ノ手續ヲナスベシ
一　圖書帶出願書ヲ差出スベシ（用紙ハ本館交附）
二　圖書帶出願書ニハ本館ノ承認セル保證人ヲ要ス

三　帶出料金壹圓ヲ據納スベシ
四　成田中學校・成田高等女學校・成田學園・成田幼稚園・新更會ノ教職員ハ同校長・主任若クハ理事ノ保證ニ依リ帶出ヲ許可ス
五　新勝寺徒弟詰合員ニ限リ同寺執事ノ證明ニ依リ成田國民學校職員ニ限リ同學校長ノ保證ニ依リ帶出ヲ許可ス
六　四・五ノ場合ニハ帶出料ヲ要セズ

第二條　本館ハ前條ノ手續ヲ了シタル上ニテ帶出簿ヲ交附ス

第三條　帶出有效期間ハ一ケ年トス

第四條　貸出圖書ハ一回ニ付和裝書ハ三冊以内洋裝書ハ一冊トス

第五條　貸出期間ハ一週間以内ノ範圍ニ於テ本館ノ見込ヲ以テ其時々之ヲ定ム

第六條　期間ニ至リ尙繼續セントスルモノハ一旦返納シ更ニ借受ケノ手續ヲナスベシ
但他ニ同書借覽ヲ請フモノアル時ハ續借ヲ謝絕スルコトアルベシ

第七條　借受ノ圖書ト雖モ本館ニ於テ必要アル時ハ臨時返戻セシムルコトアルベシ

第八條　帶出券ヲ得タルモノニシテ他所ヘ轉居シタル場合又ハ改名シタル場合ハ其ノ都度屆出ヅベシ

第九條　保證人死亡其他事故ニ依リ資格ヲ失ヒタル時ハ更ニ保證人ヲ定メ定式ノ證書ヲ差出スベシ

第十條　左記ニ該當スル圖書ハ帶出ヲ許サズ
一　大部ノ圖書
二　各學科ノ事彙・辭書類・書目・新聞
三　館内閲覽ノ請求多キ圖書
四　新刊圖書ハ二ケ月乃至三ケ月後定期刊行書雜誌類ハ裝訂ノ上ニ非ザレバ貸出セズ

第十一條　借覽期限ヲ經過シ本館ノ注意ヲ受クルコト二回ニ及ビ尙返戻セザル時ハ本館ハ圖書帶出ノ效力ヲ取消シ其事情ニヨリ再ビコレヲ許可セザルベシ此ノ場合ニ於テハ帶出圖書ノ代金ハ保證人ニ辨償セシムベシ

第十二條　借受圖書ヲ紛失シ若クハ汚損シタル時ハ本人又ハ保證人辨償ノ責ニ任ズ

第十三條　圖書帶出ハ開館期間中ニ限ルモノトス

第十四條　圖書帶出ヲ中止セントスルトキハ其旨屆出ヅベシ但帶出料ハ返戻セズ

第十五條　圖書帶出有效期間滿期トナリ引續キ希望ノモノハ更ニ帶出願書ヲ差出スベシ

三　藏　書

本館圖書は明治三十五年開館當時は、僅に壹萬五千冊に過ぎなかつたが、爾來年々二・三千冊を增加し、昭和十七年三月末現在では次の通りとなつた。

和漢書　一一八、七一七冊
洋書　五、一三〇冊

計　一二三、八四七冊

藏書に就いては、取り立てゝ特色あるものとてはないが、佛書の貳萬餘冊、就中密教關係書の豐富なことは特徴としてよい。又白鳥博士の厚意によつて得たる朝鮮本の一部等は、本館の稀覯書として聊か誇りとするものである。此の外康平弘安の古寫本・慶應以前の版本・古德碩學の書入本・手澤本並びに洋書に於ては壹千五百年代の古刊本其の他多少の由緒歴史附のものもある。尙ほ所藏中の文庫としては、望洋文庫（石川僧正文庫）・依田文庫（依田學海文庫）・栗園文庫（足立栗園文庫）・石川文庫（石川鴻齋文庫）・木村文庫（木村泰賢博士文庫）・白鳥文庫（白鳥庫吉博士文庫）・池田文庫（池田僧正文庫）等があるが、これ等は特殊の關係で寄贈又は移讓されたものである。以上文庫に加ふるに、慕末の國學者鈴木雅之の遺著撞賢木外大部分未刊の自筆稿本八十餘冊の寄贈が本年度に於てあつたことは特筆すべきで、本館はすべてこれ等の稀書の保管に任じつつある。

藏書の增加率は、大體寄贈のものを合して年々貳千餘冊で現在約拾貳萬參千餘冊を算するに至つた爲め、成田町の人口に對して、壹人常り平均拾壹冊强となり、又これを成田町現在戸數に割當れば、壹戸常り平均五十五冊强となるのであるから、都會中心に偏重し勝な今日眞に地方的貢獻をなしつゝあるといつてよいのである。

尙ほ雜誌は新聞を合して、約貳百五拾餘種の備付けがあるが、此の中雜誌は年々合冊製本して一般圖書と同樣の取扱をもなしてゐる。殊に佛教雜誌に至つては、明治後半期より蒐集してゐるので、近時遙々東京より專門の學生の來館者日に多きを加ふるに至つたことは誠に喜ばしいことである。

四　目　錄

目錄は大別して來館者の爲めのカード目錄と、外部にある者に對する印刷目錄との二種に分ける事が出來る。

本館備付のカード目錄は「分類」と「書名」の二種であるが、實際上使用率の多いのは矢張り分類目錄である。更にこれを時代別に見るときは、舊きものよりは新しきものが利用されてゐる。尤も大正二年前の分類は多少杜撰であるのに加へて、其の後のものは從來の八門分類を廢し、新制の十進分類に改めたるを以て、無論組織も一變し、精密となつた爲め檢索上の利便を增大したことにもよる。

印刷目錄は第二編までの刊行成り、大正元年末期までの藏書を發表し得たのであるが、其の後種々の關係上印刷の機會がなく、今日まで遷延してゐるけれども、事實其の內容は優に第四乃至第五編まで刊行し得る見込である。隨つて他日續編上梓の曉は一段の貢獻をなし得ることゝ思ふ。

次に、新着圖書の紹介方法としては整理濟の圖書を閲覽室の新刊書架に排列公開し、此の中主なるものは「成田圖書館報」に登載して希望者に頒布してゐる。

五 施設

本館は公共圖書館であり、從つて圖書閲覽以外に、附帶施設として社會教育的事業をも行はなければならない筈であるが、當山に於ては斯の方面の施設として、別に新更會と稱する機關を設け、こゝで青年並びに一般成人の社會教育や修養を目的とする講演・講習其の他種々の事業を實施し、更に青年團巡回文庫等をも行つてゐるので、本館の附帶事業とすべき社會教育的施設としては、專ら讀書奬勵に關する施設だけに止まつてゐる。今其の施設の主なるものを擧ぐれば次の通りである。

國民學校との連絡

讀書の皷吹と云ふことは、成人間に之を求むるよりも、寧ろ幼少年時代より書物に親しむの習慣を涵養するの要あることは、今更言を俟たない事柄である依つて本館にては國民學校と連絡し、常に各學級の兒童を適宜本館に收容して自由讀書をなさしめ、併せて圖書館利用の指導をなしつゝある。

而してこれが爲めには別館の專用兒童室を設け、この室において書架の兒童讀物圖書を公開式に自由に兒童をして閲覽せしむることとしてゐる。

參籠堂文庫

成田山に參籠する斷食者の信仰・修養の資として、昭和十一年七月五日より參籠堂内に貸出文庫を開設したが、參籠者より相當に利用され、良好な成績を收めてゐる。

團體貸出

四隣町村青年團 又は其の他團體に對して、希望の圖書を一纒めにして貸出してゐる。

婦人のための「家庭配本」

規定

一、家庭配本とは、御家庭にある主婦の方を始め、いろ〳〵の事情で圖書館へ通ふことの出來ない御婦人方の爲めに自宅に居ながらにして本を讀める樣にお好みの本を圖書館からお届けすることです。

二、加入者の範圍は、成田町（當分のうち土屋、寺臺、鄕部、圍護臺不動ヶ岡を除く）に居住する方ならどなたでも差支ありません。

但し場合により保證人を要することがあります。

三、加入御希望の方は『申込書』をお出し下さい。『申込書』は本館から差上げますが、お申込の形式は口頭、電話葉書何れでもかまひません。

四、申込は凡て月キメとし、一家族のうち何人でも差支ありませんが、一人一口として御申込下さい。

五、加入された方には、希望の本を選ぶべき『配本用圖書目錄』をお貸し致し、又新刊書の目錄を發行の都度差上げます。

六、目錄によつて御希望の本がきまりましたら配本手が伺つた時、請求用紙（配本手持參）に記入の上お渡しになれば次回に配本致します。

七、毎回貸出期間は一週間とし、配本は月四回、册數は一人一册と致します。

八、配本料及雜費として一口一ヶ月金廿五錢の手數料を申受けます

九、借りた本は必ず期日にお返し下さい。これを守らないとお互の迷惑になります。尙本をなくした場合はそれと同樣の本、又は代價を頂きます。

十、『家庭配本』と『一般貸出』とは全然別に扱ひますから假に一家庭のうちで兩方御加入になつてゐても『一般貸出』の方は配本手に托すことを堅くお斷り致します。

實施の成績

圖書館に於ける閲覽者中、婦人の閲覽者が男子に比して殊に少數であることは、一般的に見る傾向であるが、家庭教育の衝に當り、一家の主婦として將又母として立行くべき婦人が此の狀況に在ることは大に憂慮すべきことである。此の缺陷を幾分にても匡救しやうとする目的を以て、昭和九年十月より「家庭配本」と稱し、前揭の如き規定によつて、極的積に各家庭の婦人に呼びかけ、希望の圖書を直接配達することにして來たが、是に依つて婦人の讀書心を啓導し、年々其の效果の頗る多かつたことを認めるのである。而して其の讀書傾向は、大體小說類並に家庭に關するものが第一を占めてゐる。

佛敎雜誌論文索引編纂

本館に於ける佛敎雜誌には、明治後半期時代より蒐集したものが多數あり、從來專門學徒研究の資料として相當に貢獻して來てゐるが、廣汎に涉るこの雜誌に索引のない爲め、調査上に不便とする所が少くない。依て本館にては此の缺陷を補ふため 目下一々該雜誌の內容を調査し、之が索引の編纂をなすべく努力中である。

刊行物

一 青年讀物百選

一般青年に對する讀書奬勵の目的にて、昭和十一年度圖書

館週間に際し「青年讀物百選」第壹輯を刊行、遍く一般に頒布して讀書の便に供し、各方面より多大の歡迎を受けた効果に鑑み、その後も引續き刊行、本年度はその第六輯を發行、過去一箇年間本館備付の圖書中より、特に青年に適する良書百餘冊を選定し、之に解題を付して一般に頒布した。

一、館　報

新着圖書を一般に周知せしめる目的を以て發行頒布し來れる「增加書の知らせ」は昭和十四年三月を以て廢止し、同時に「成田圖書館報」と改題して隔月刊行、從來同樣讀書層に便益を圖りつゝある。その内容は、增加書の案内はもとより新刊良書解題、讀書奬勵に關する記事を初め、本館所藏の佛教關係雜誌主要論文目錄等を掲載したものである。

防空設備

本年度に至り時局は愈々切迫を告げ、遂に年末大東亞戰爭の勃發を見るに至つたが、開戰以前より階上閲覽室及び階下の閲覽室並びに事務室全部を夜間に於て遮蔽し、空襲警戒警報下にあつても完全に燈火を管制し、以て閲覽に支障なからしむるやう四壁硝子戸に暗幕を設け、管制下の夜間閲覽設備を整へた。

第參　閲覽狀況

閲覽圖書の第一位が文藝物にあることは、何れの公開圖書館に於ても同樣の現象ではあるが、讀書の階梯は先づ文藝物から入るのが通例であるから、これ等の大衆は寧ろ誘拔指導すべき讀者層として　大切なるお得意と見做すべきである。

尙、堅實なる方面の特殊傾向は、近年佛教關係雜誌を研究する遠來の學徒が增加して來た事である。これは本館が比較的舊刊の佛教雜誌を收藏し居ることゝ、一方都會に於ける有數圖書館は　其利用上地方のそれと異り、手續煩雜且つ不便なる點多々ある爲である。

次に、一般入覽者の種別を見るに、從來男子に比して婦人は極めて劣勢であつたが、別揭の如き家庭配本を實施してより斷然面目を一新した傾きがあり、また帶出および館内に於ける婦人閲覽者も年を遂ひ增加しつつある。

又、館外貸出は、個人としては現在五九三名を算し、而も累年增加の傾向にあり、團體としては、隣接町村青年團への貸出をなしてゐる。

昭和十六年度　**閲覽統計**（開館日數三二四日）

閲覽圖書類別

種別	館内	館外	合計	百分比例
總類	八七三	六七六	一、五四九	二・七
宗教・哲學・教育	一、八九六	一、一九五	三、〇九一	五・三
文學・語學	八、九八一	二五、九九六	三四、九八三	五九・六
藝術・演藝	一、二七三	五一二	一、七八五	三・一
歷史・傳記・地理・紀行	一、五四八	一、二三三	二、七八一	四・八
政治・法律・經濟・軍事	八〇四	八八二	一、六八六	二・九
社會・風俗・娯樂・運動	一、二三七	六九八	一、八九五	三・二
理學・數學・醫學	二、三七八	四六六	二、八四四	四・九
工學・交通・通信	四五八	二七八	七三六	一・三
產業	五六四	四二二	九八六	一・七
兒童圖書	四、六八八	一、三五四	六、〇四二	一〇・三
合計	二四、七〇六	三三、六七二	五八、三七八	一〇〇・〇
一日平均	七六・三	一〇三・九	一八〇・二	

閲覽人職業別

種別	館内	館外	合計	一日平均
農業・水產業	七二五	二、七二〇	三、四四五	一〇・六
鑛業・工業	八五	一〇四	一八九	〇・六
商業・交通業	五二三	一、五六四	二、〇八七	六・四
教育家・宗教家・新聞雜誌記者	一五九	一、〇五六	一、二二五	三・八
官吏・軍人	五四	九〇	一四四	〇・四
學生・生徒	八、二二五	一五、六六〇	二三、八七五	七三・七
其他	一、七九五	一〇、八五〇	一二、六四五	三八・七
兒童	三、八一七	一、四三四	五、二五一	一六・二
合計	一五、三七三	三三、四七八	四八、八五一	一五〇・八

第四　歷代館長・顧問・主事

本館の歷代館長・顧問・主事は左の通りである。

歷代館長

石川照勤（自明治三十四年一月十一日至大正十三年一

月三十一日）
荒木照定（自大正十三年二月一日至現在）

歷代顧問

高津親義（自昭和三年一月一日至同十一年十一月二日）
今澤慈海（自昭和十一年五月二十八日至現在）

歷代主事

高津親義（自明治三十五年六月一日至昭和二年十二月三十一日）
小林力彌（自昭和三年五月四日至同四年四月十七日）
高井鵜海（自昭和五年五月五日至同六年四月十九日）
成田善亮（自昭和九年一月一日至現在）

第五　職員

昭和十七年三月末現在本館職員は左の通りである。

館主兼館長　荒木照定
顧問　今澤慈海
主事　成田善亮
司書　小川益藏
同　武士田文哉
同　岩館衛
司書補　綿貫實
囑託　木村莊太
助手　八木しげ
同　寺内清

第六　經費

本館昭和十六年度決算は次の通りで、これを所在地成田町人口に割當ると一人當金壹圓七拾錢となる。

昭和十六年度決算額　一八、四五六、一七円

職員給及雜給	九、五三四、〇〇
圖書費	五、四一四、三一
需用費其他	二、五六七、八〇
營繕費	九四〇、〇六

第七　昭和十六年度　主要錄事

四月一日　過般古寫本「住吉物語」複製につき古典保存會より交渉あり許可す。
五月十六日　日本圖書館協會五十週年記念式に際し、館長猊下及今澤顧問感謝狀を受く。

六月九日　創立記念日。
七月九日　藤原縣知事視察。
九月廿八日　豐住村鈴木茂松氏より國學者鈴木雅之氏遺著寄贈さる
十月一日－十日　曝書及調査。
十一月十七日　夜間閲覽用として防空暗幕を設備す。
十一月十七日　菅野縣學務部長視察。
十二月八日　米英に對し宣戰布告。閲覽室内にラヂオを設け戰況を閲覽人に聽取せしむることゝす。尙夕刻より防空下令あり、暗幕を垂れて開館す。
十二月九日　戰勝大護摩修行あり職員一同參拜。
十二月十日　本日より節電のため燭光切下げをなす。
二月十八日　戰勝第一次祝賀式を町主催にて成田山堂庭に擧行職員一同參列。
三月一日　岡野清豪氏著「金物心」を全國八十餘の圖書館へ寄贈。
三月廿七日　日本圖書館協會にて皇軍慰問圖書及購入資金を募集す依て本館よりも購入資金を寄附。

第八　昭和十六年度　圖書寄贈者芳名

（五十音順　敬稱省略）

高松宮家	二	井上正義	一
威仁親王行實　別卷		井上禪定	一
有栖川宮總記	一	上田廣	一
秋守常太郎	一	王孟羣	一
淺井照次	一	小川繁子	四
猪狩好清	三	小田保夫	一
磯ヶ谷紫江	三	小野圭次郎	一
市川億次郎	一	小野幸	一二
伊藤至郎	三	川北不二雄	一
稻村書圃	六	川崎克	一
稻村冽	一	川瀨一馬	一
井名源太	一	川村昌助	二六
北里闌	一	高田定吉	一
北山亥四三	一	木村莊太	三
木村令男	四	黑川富夫	一
五味松塘	一	佐藤國二	二一
柴田伸吉	三	白鳥庫吉	一
杉浦丘園	一	鈴木茂松	七九

高橋照空　二
高橋省次　二
高橋登美　一
竹村猛壽　一
寺内清　二
友松圓諦　三
行方喜一　二
忍頂寺務　一
長谷岩吉　四
長谷川尙一　四
長谷川正道　一
平田親勵　二
藤井佐兵衛　一
本多隆瑜　三
三上義夫　二
宮島太一　一
宮武外骨　二
三好照嘉　三
村上一郎　一
森寛紹　二
諸岡市郎左衛門　二
山上八郎　一
米田莊一郎　一

○
淺田宗伯先生遺德顯彰會　一
朝日新聞大阪本社調査部　一五
硫黃鑛業化學研究會　三
育德財團　一
石原產業海運株式會社　一
大阪紙商同業組合　二
恩給金庫　一
外務省調査部第三課　二
家庭週報編輯部　一
加藤大將傳編纂會　一
華北事情案內所　一
樺太廳文書課　一
關西共同火力株式會社　一
紀元二千六百年奉祝會　一
貴族院　二
木戸侯爵家　二
京都市役所觀光課　三
金融研究會　六
慶應義塾豫科會　二
啓明會　六
建國大學研究院　一
興亞宗教協會　九
厚生科學研究所國民榮養部　三
神戸商工會議所　四
國史回顧會　一
國民精神文化研究所　一
近藤記念海事財團　一
齋藤子爵記念會　四
佐倉種畜揚　二
絲價安定施設組合清算事務所　一
住宅營團　二
尙志寮　一
食品科學研究會　一
白金書院　一
神宮徵古館農業館　一
新更會　七
眞言宗々務所　四
新勝寺　八
誠心高等女學校出版部　一
赤十字博物館　一
大政翼贊會宣傳部　二
大同海運株式會社　一
臺南高等工業學校　一
大日本騎道會　四
大日本飛行少年團　一

大日本紡績株式會社　一
臺北帝國大學庶務課　一
高良神社々務所　一
拓務省　二
拓務省拓北局監理課　一
辰馬海事記念財團　三
千葉縣學務部　一
千葉縣社會教育課　四
朝鮮古蹟研究會　六
朝鮮總督府　二
朝鮮總督府中樞院　一
筑波研究所　一
津田英學塾　一
帝國農會　三
天理教廳總務部調査課　一
獨逸國大使館　二
東亞經濟懇談會　二
東京地下鐵道株式會社　一
東京日日新聞社　一
東京府立工業奬勵館　二
東洋大學　一
同和奉公會　一
成田山明王院　寫眞四枚

成田町役場　一
成田郵便局　二
南滿鐵總裁室弘報課第二係　一
南洋廳長官々房文書課　二
日伊協會　一
日伯協會　三
日佛會館　一
日滿中央協會　四
日支問題研究會　六
日清汽船株式會社　二
日泰學院事務所　一
日本醫科大學　一
日本學術振興會學術部　一
日本機械學會　三
日本絹人絹輸出振興會　一
日本興業銀行調査課　二
日本弘道會　二
日本香料藥品株式會社　一
日本赤十字社　一
日本大學法文學部　二
日本中央蠶絲會　一
日本文化中央聯盟　一
日本ポルトラントセメント同業會　一

農林省農政局耕地課　一
福岡縣史蹟名勝天然紀念物係　二
佛報同願會　一
文藝春秋社　二
貿易局第一部南方課　一
保險院簡易保險局　二
北海道人造石油株式會社　一
北海道帝國大學北方研究室　一
本願寺財務部　一
松本幹一郎傳記編纂會　一
滿洲帝國協和會中央本部　一
滿洲帝國興農部開拓總局　一
無窮會　八〇
明治大學政經學會　一
蒙疆聯合自治政府總務部弘報課　一
文部省社會教育局成人教育課　二
矢野恒太君保險關係五十年記念會　一
山田市治郎氏功勞顯彰會　一
輸血法研究所　一
芳川顯正伯遺業顯彰會　二
讀賣新聞社企畫部　二
林業試驗場　三
六大新報社　二八

○

池上文庫　五
愛媛縣中央圖書館　一
大橋圖書館　一
鹿兒島縣立圖書館　一
華中鐵道股份有限公司圖書館　一
金澤文庫　二
九州帝國大學圖書館　三
協調會圖書館　二
熊本縣中央圖書館　一
惠化專門學校圖書館　八
高野山大學圖書館　一
國學院大學圖書館　二
國立中央圖書館籌備處　一
互尊文庫　二
下鄉共濟會文庫　一
市立名古屋圖書館　二
市立函館圖書館　一
駿河臺圖書館　一
宣川圖書館　二
臺南市立圖書館　一
大連圖書館　一
臺灣總督府圖書館　二
朝鮮總督府圖書館　一
帝國圖書館　四
東京帝國大學圖書館　二
東洋大學圖書館　一
東洋文庫　七
鳥取縣立圖書館　一
戸畑市立圖書館　一
富山市立圖書館　二
新潟縣立圖書館　二
日本大學圖書館　一
光丘文庫　一
前橋市立圖書館　一
滿鐵哈爾濱圖書館　五
立正大學圖書館　一
龍谷大學圖書館　一
早稲田大學圖書館　一

第九　昭和十六年度　雜誌新聞寄贈者芳名

（每號寄贈者のみを掲ぐ）
（五十音順、敬稱省略）

愛土千葉縣農會
宇宙社
海外交時報
海を越えて日本拓植協會
英語青年社
英文大阪每日
大阪出版社
石川富士雄
宇宙社
海防義會
大阪商船株式會社
科學知識
山室靜
日本學術振興會
世音
丸善株式會社
家政理學研究會
香取
香取神宮社務所
華文大阪每日
石川富士雄
綠田共濟會雜誌
鎌田共濟會
觀世音世界運動本部
鄉土社
組合金融
組合金融研究會

クリチック
クリチック社
柔道講道
軍人援護會
軍人後援會
修驗修驗社
研究社月報
研究社
珠道編輯所
興亞
大日本興亞同盟
昭和詩文雅
公園綠地
成田町役場
昭和の光
鑛工滿洲
滿洲鑛工技術員協會
書
大正大學史學研究室
眞言宗々務所
鴨臺史報
甲鳥書林
甲鳥書林
信託の友
弘道
日本弘道會
高野山時報
高野山時報社
神變
日本神變
高野山時報社
水產
滿川高之助
校友會誌
成田高等女學校
政界往來
木村莊太
國際月報
情報局第三部第二課
選擧肅正時報
選擧肅正中央聯盟
國際事情
同
禪の生活
禪の生活社
國民六年生
成田祝子
創元
創元社
護國
東寺事務所
大東文化
大東文化協會
互尊獨報
日本互尊社
太陽映畫教育時報
野田商事映畫部
齊藤報恩會時報
齊藤報恩會
東京鮮滿案內所
大陸資料
サンデー每日
駒林清
旅行
東京科學博物館
自然科學と博物館
千葉縣教育會
實業之世界
實業之世界社
中央大學々報
千葉縣教育會
實用新案公報
特許局
肇國精神
中央大學々員會
社會教育
文部省社會教育課
調査月報
紀元二千六百年祭祀會
十善會
十善寶窟
朝鮮總督府官房文書課
東京工業大學報
東京工業大學
東京堂月報
東京堂月報部
同願月刊
佛教同願會
統計
千葉縣統計協會
動物愛護
動物愛護社
東洋大學護國會々報
護國會宣傳部
圖書
岩波書店
特許公報
特許局
塗料の研究
關西ペイント株式會社
成田町報
成田町役場
日文國民政府資料彙報
中國和文出版社
日滿經濟論壇
日滿經濟調査局
日本勸業銀行債券月報
新勝寺
日本圖書館學
日本圖書館學研究所
鷄の研究
鷄の研究社
博愛
日本赤十字社
反共情報
國際反共聯盟
被服
被服協會
婦人倶樂部
高田芳枝
文化日本
日本文化中央聯盟
遍路
遍路發行所
放送時報
新勝寺
ホームグラフ
木村莊太
朗
日本電建株式會社

北電　華北電信電話株式會社
北隆館月報　北隆館
法華　法華社
マルゼン、アナウンスメント、ニューブツク　丸善株式會社
無線資料　東京電氣株式會社
謠曲界　謠曲界發行所
よろこび　よろこび會
鄰人の友　隣人の友社
勞働時報　厚生省勞働局
ローマ字　ローマ字ひろめ會
ローマ字世界　日本のローマ字
早稲田學報　早稲田大學校友會

○

愛育新聞　愛育會
高野山大學新聞　高野山大學新聞部
駒澤大學新聞　駒澤大學報國團
淨曲新報　大日本淨曲協會
龍谷大學新聞　龍谷大學新聞社

○

青森縣文化　青森縣立圖書館
秋田圖書館報　秋田縣立圖書館
池坊華道圖書館報　池坊華道圖書館
川縣中央圖書館報　石川縣立圖書館
今治市立明德圖書館報　今治市立明德圖書館
愛媛縣中央圖書館報　愛媛縣立圖書館
神奈川縣圖書館月報　神奈川縣圖書館協會
京城府立圖書館報　京城府立圖書館
公正圖書館閲覽者會報　公正會圖書館
高知縣立圖書館報　高知縣立圖書館
興風會圖書館新着圖書案内　興風會圖書館
小村侯記念圖書館報　小村侯記念圖書館
斯道文庫報　斯道文庫
彰化市立圖書館報　彰化市立圖書館
書香　大連圖書館
書滲　北京近代科學圖書館
市立函館圖書館多與利　市立函館圖書館
資料公報　國立中央圖書館籌備處
臺灣總督府圖書館新着圖書目錄　臺灣總督府圖書館
寶塚文藝圖書館月報　寶塚文藝圖書館
千葉文化　千葉縣圖書館
帝國圖書館報　帝國圖書館
讀書信州　長野縣立圖書館
讀書山梨　山梨縣立圖書館
鳥取縣中央圖書館報　鳥取縣立圖書館
礦波圖書館協會報　中島圖書館
トピック　大橋圖書館
奈良縣立圖書館月報　奈良縣立圖書館
新潟縣中央圖書館報　新潟縣立圖書館
福岡縣立圖書館報　福岡縣立圖書館
撫順圖書館報　撫順市立圖書館
文獻報國　朝鮮總督府圖書館
文庫　光丘文庫
北窗　哈爾濱圖書館
宮城縣中央圖書館月報　宮城縣立圖書館
山口縣中央圖書館報　山口縣立圖書館
翼賛富山　富山縣立圖書館
四日市圖書館報　四日市圖書館
旅順圖書館報　旅順圖書館

新更會

支部聯合大講演會

新更學院卒業生

寫眞

新更會綱領

昭和十六年度新更會一覽

目次

第壹　位置並びに沿革……一〇七頁

第二　沿革……一〇七

第貳　組織並びに設備……一〇九

一　趣旨・使命……一一一

二　會則……一一三

三　役員及び職員……一一四

四　支部準則……一一四

五　支部並に會員分布狀況……一一五

六　施設……一一八

第參　講習會……一一八

一　講演會……一一九

二　映畫會……一二三

三　展覽會……一二四

四　出征會員家族慰問……一二四

五　巡回文庫・慰問文庫……一二四

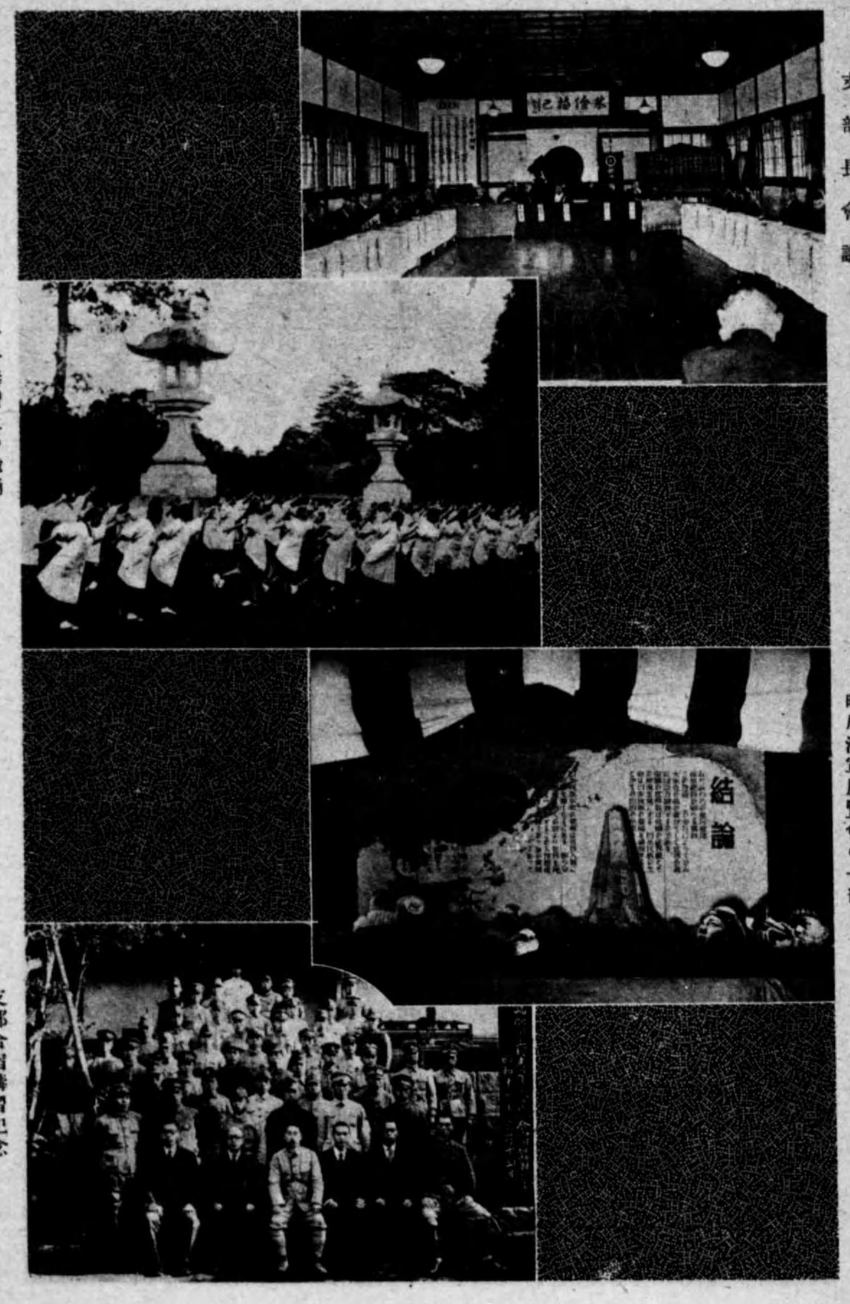
六　職員研究會・視察其他……一二五

七　時局對應施設……一二五

八　出版物……一二六

九　新更學院……一二七

〇　經費……一三六



支部長會議

女子講習生の舞踊

時局海軍展覽會の一部

支部合宿講習紀念

新更會綱領

天業翼賛

一、われ等の營みは日日創造に生きんが爲なり

一、われ等の營みは大和歸一に生きんが爲なり

一、われ等の營みは感謝報恩に生きんが爲なり

一、われ等の營みは至誠勤勞に生きんが爲なり

一、われ等の營みは不動信念に生きんが爲なり

右五條われ等は相共に歡喜奉行せん

昭和十六年度　新更會一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田一番地成田山新勝寺境內ノ北部　（電話二三四番）

沿革

本會ハ成田山經營ニ屬スル成人教育事業ニシテ現貫主荒木僧正ノ發意ニシテ昭和三年六月創立、現地ニ存置セラレタル舊千葉縣物產陳列館建物ヲ改造シテ會館トナシ同時ニ同猊下本會ノ總裁ニ推戴セラレ、同八年五月新更學院設置、同十年七月弘誓寮新築落成今日ニ至ル

設備

敷地、一八〇〇坪・會館ハ木造二階建ニシテ階上ハ講堂階下ハ鄉土資料陳列場並ビニ控室、此ノ坪數二四七・五坪・弘誓寮ハ木造二階建ニシテ階上ハ靜觀室・會議室・總裁室・應接室・講師室・宿直室・圖書室・醫務室・階下ハ合宿講習室・食堂・事務室・炊事室・小使室・洗面所・浴室等ニテ此ノ坪數三二八・五坪・新更學院教室ハ二二・五坪

目的

皇國傳統ノ健全ナル思想ト鞏固ナル宗教的信念ノ下ニ國民精神ヲ作興スルヲ主眼トス

組織

役員職員	會員數
總裁一名・會長一名・理事若干名・參事若干名・評議員若干名・主幹一名・主事・主事補若干名・書記若干名	會員（縣內外）三、五〇四 支部會員（同前）五、三一八 合計　八、八二二

施設

一般的施設

- 講習會
  - 女子實務講習會
  - 中堅幹部錬成定期合宿講習會
  - 一夜合宿講習會
  - 聯合支部實務講習會
  - 特殊講習會
- 研究會
  - 年數回、時局問題ニツキ權威者ヲ聘シテ開催
  - 他道場ノ視察研究、參禪
- 講演會
  - 本部講演會
  - 聯合支部講演會
  - 支部出張講演會
- 展覽會＝成田山緣起展覽會
- 圖書刊行
  - 新更叢書（年四回）ノ刊行
  - 修養圖書・「パンフレット」「ポスター」「リーフレット」ノ刊行
- 巡回文庫
  - 支部巡回閱覽冊數　四、五一八冊
- 共ノ他＝建國祭・奉仕團の活動

時局對應施設

- 出征軍人家族慰問
  - 千葉縣下支部所在地（印旛、香取、山武、千葉、君津、安房ノ六郡）
  - 他府縣下支部所在地（茨城、靜岡、埼玉ノ三縣）
- 支那事變記念並ニ大東亞戰完遂講演會（千葉、茨城、埼玉、靜岡ノ四縣四十三支部）
- 時局映畫大會（出征軍人家族慰安ニユース）四十三支部四十三回
- 國民精神總動員强調教育映畫大會
- 陸軍病院慰問文庫（千葉、佐倉ノ二病院へ回付）
- 傷病兵接待（佐倉、習志野、國府臺、千葉、下志津ノ五陸軍病院）
- 出征兵登山接待（霞ケ浦航空隊、橫須賀海兵團、佐倉步兵第六十四聯隊等）
- 時局劍道講習會（新更學院生徒並ニ地方劍士講習會・支部講習會）
- 銃後强化週間特別行事
- 防空演習
- 武運長久祈願旅行（伊勢神宮・明治神宮靖國神社・香取神宮・鹿島神宮）
- 町村葬慰靈使派遣（支部所在地へ）
- 皇軍慰問號發送
- 一、部落常會指導

設

新更學院

- 沿革
  - 昭和六年六月創立
  - 同八年十二月本縣知事ヨリ設置認可アリ
  - 同十年十二月文部・陸軍兩省ヨリ青年學校ト同等以上ノ認定アリ
- 設備
  - 二十二坪ノ教室ヲ有シ弘誓寮ヲ併用ス
- 目的
  - 德性ヲ涵養シ地方有爲ノ材ヲ養成スルヲ目的トス
- 修業
  - 入學資格　高小卒業程度
  - 修業年限　壹ヶ年
- 職員
  - 院長　荒木照定
  - 主幹　神崎照惠
  - 職員　一一名
- 卒業回數　一〇
- 卒業生數　四三五
- 在學生數　昭和十七年三月末現在五九

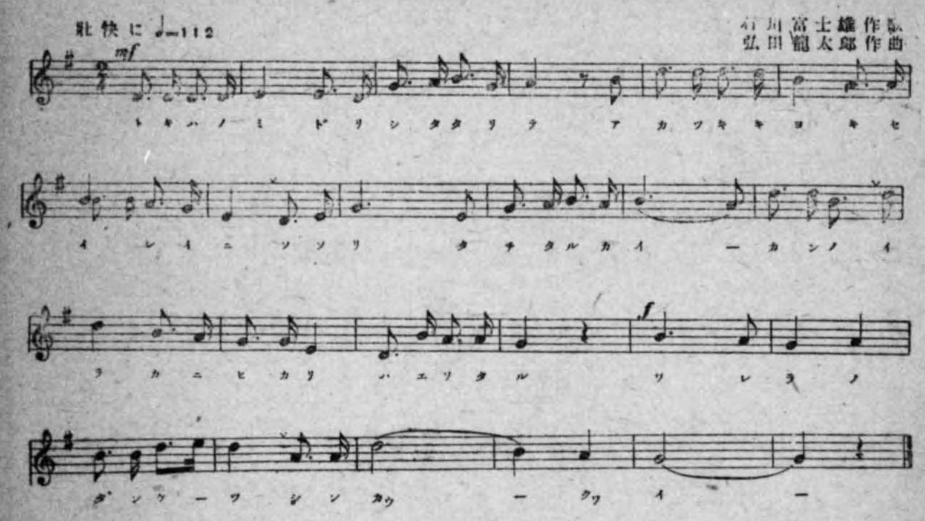
總裁　荒木照定

會長　三橋金太郎

主幹　神崎照惠

經費　昭和十六年度決算　四六、〇〇六・八七円

新更會歌（男子部）



一、常磐の翠滴りて
曉淨き成嶺に
そゝり立ちたる會館の
甍に光り映えわたる
我等の團結 新更會

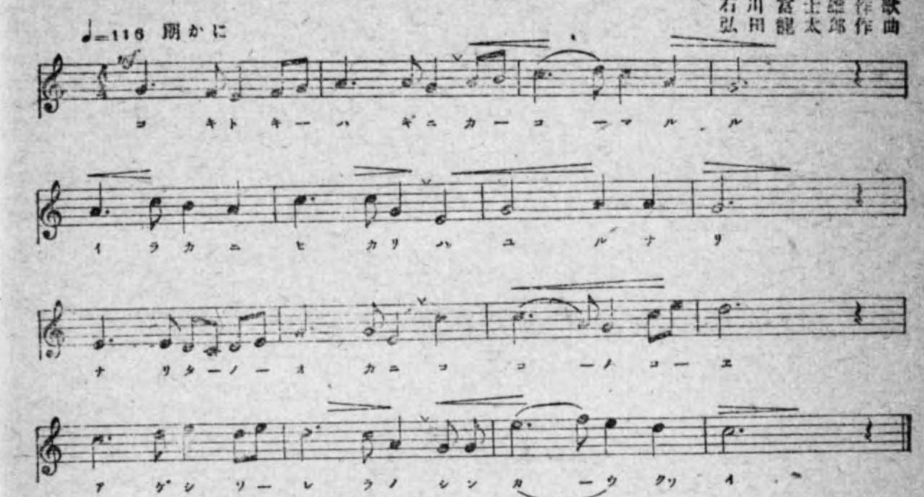
二、世に魁けし旗標
成人教育基礎固く
皇道精神高揚の
氣魄に滿ちて搖ぎなし
我等の團結 新更會

三、智德の練磨重ねつゝ
道にいそしむ春秋の
行事に理想偲ばるゝ
鞏き固めを結びたり
我等の團結 新更會

四、杜に籠りし鐘韻の
清爽の氣を湛へたる
胸に誓し使命もて
世路の波濤を乘り切らむ
我等の團結 新更會

新更會歌（女子部）

歌詞 石川富士雄作
曲 弘田龍太郎作



一、濃き常磐木に圍まるゝ
蕚に光映ゆるなり
成田の岡に呱々のこえ
あげし我等の　新更會

二、叡智の鏡淨めつゝ
思想の波を乘り切らむ
皇道精神顯揚の
旗をかざせる　新更會

三、清く育ちし少女子の
矜恃を高く抱きつゝ
婦德を磨き精進の
道に輝やく　新更會

四、杜をわたれる鐘の音を
胸に湛ふや爽やかに
誓ひも固き使命もて
進む我等の　新更會

新更會

第壹　位置並びに沿革

一　位置

新更會は、當山境内の北部に在り、東は公園の山林地帶、西は境内に接し、南は公園の勝景に臨み、北は成田町土屋を瞰下し、眼界遠く開けて、一望數里の田圃を見渡すことを得る當山第一の高地に位し、高燥閑雅で實に成人教育・社會教育の指導として、將又一般修養の殿堂として、絶好の位置を占めてゐる。

二　沿革

本會は、現成田山貫主荒木照定僧正の發意によるものであつて、僧正は常に社會教育の必要なる事を痛感せられ、昭和三年二月六日當時の檀家總代であつた關川博道・山内平治郎・古矢大助・小野寺弘・諸岡勝太郎の諸氏、及び石川甚兵衛・高津親義氏等と協議の結果、茲に其の要望を實現することに決し、成田町の有力者三十一人を招いて、二月九日成田圖書館樓上に於て發起人會を開き、滿場一致社會教育を目的とする會の設立を可決し、次いで、會名の選定、會則の起草、會員の募集、其の他必要なる事項の處理に關しては、關川博道・石川甚兵衛等の前記七名を特別發起人として、これに一任することゝした。

會名の選定に就いては、意見の百出を見たが、衆議容易に決せず、三月一日に至り、御本尊不動明王の御寶前に於て靈籤を拜受したところ

第十大吉
舊用多成破　新更始見財　政求雲外望　枯木遇春開

に接したので、衆議一決「新更會」と定めた。

かくて昭和三年六月五日、創立總會開催の結果新更會は創立せられ、現地に存置せられたる舊千葉縣物産陳列館建物を改造して會館とした。

昭和三年六月六日、創立當時事務主任として諸般の事務を擔當した高津親義氏は、後任者佐々木祖門氏に事務引繼を行つた。

昭和五年十二月二十五日、理事會開催、佐々木祖門氏辭任されたので、適當なる後任者選定まで、神崎照惠師その事務を擔當することゝなつた。

昭和六年一月二十五日、理事會開催、左記職員を設置した。

主幹　澤田五郎氏

幹事　神崎照惠氏・諸岡市郎左衞門氏・渡邊和一氏

（內、神崎照惠師を常任幹事とす）

昭和六年三月、從來機關紙として發行し來つた新聞紙型の「新更」を雜誌型のものに改めた。

昭和六年六月六日、本會の精神に基き、地方青年に、日本國民としての智德を涵養させる爲め、新更學院を開設した。

昭和六年十一月、本會は其の目的達成の爲め、春に青年講習會、夏に夏季大學を開催して來たが、未だ女子に對する施設がなかつた爲め、玆に第一回女子講習會を同月二十一、二十二、二十三の三日間に亘りて開催し、これから毎年これを行ふことにした。

昭和七年八月、從來臨海圖書館、文庫貸出等、隨時文庫の運用を爲し來つたが、本年度から外地支部組織の完成に伴ひ巡回文庫部を設置し、各支部に右文庫を貸出して廣く會員にこれが利用の便を圖ることゝした。

昭和八年五月二日、曩に設立された新更學院は、本日千葉縣知事岡田文秀より正式の認可を得た。

昭和十年三月本會には從來合宿道場がなかつた爲め、合宿講習の如き場合には不便を感ずることが多大であつたが、昭和九年秋に右道場起工、同十年三月落成、總裁猊下これを、「弘誓寮」と名付けられ同二十日より之を使用した。

昭和十年七月、右「弘誓寮」落成により、爾來新更會各支部を始め、各種團體の講習會を弘誓寮に於て、隨時行ふことにした。かくて現在會員數六、六四一名、支部數四五、月刊雜誌「新更」發行部數七、〇〇〇に達した。

昭和十年十二月、新更學院は同月三日附を以て、陸軍・文部兩省令第一條第一號の規定により、青年學校と同等以上であることの認可があつた。

昭和十二年六月三日、第五回評議員會に於て理事十名となつた。

昭和十五年十月十一日、紀元二千六百年奉祝教化大會に於て中央教化團體聯合會長正二位勳一等伯爵清浦奎吾閣下より社會教化の功勞により選奬狀を受けた。

昭和十六年四月、社會教化上映畫利用の必要極めて大なるため、新らしく映畫班を組織し、全支部に亘り巡回映畫を行ふこととした。

第貳　組織並びに設備

一　趣旨・使命

本會の趣旨・使命は左の如し

荒木照定

新更會を組織して

近時外來思想の浸潤漸く著しく、社會相には種々の波紋を畫き、人心は極度の動搖と不安とを感ずるに至れり、此の動搖と不安とに對し、世の先覺者は、極めて眞面目に、識家の前途を憂慮し、これが對策として『宗教の必要』を叫ぶもの、是れ亦漸く多きを加ふるに至れり。

『宗教の必要』は、敢て今日に限れるにあらず、人生と宗教、絶對に不可分の關係にあるものなるが、只現時は異常なる思想的刺戟を受け、その之を憑ふるもの、特に甚だ急なるのみ。曾て我國には、或は政治的に、或は武力を以て、或は法權によりて外來思想を防壓せんと試みたる、尊き幾多の經驗を有せり。然も今日の情勢は、何の威力を以てするも、到底其の不可なるの結論に到達し、遂に『思想には思想を以て抗する。』外なしと、識者間の輿論殆んど一致して、玆に『宗教の必要』を高唱さるこゝに至れり。

明治維新以後に於ける我國は、特に歐米文物の移入に專らにして、深く內容の適否を顧みるの暇なく、新を逐ひ、奇に走り、國情の如何を省みず、一掃的に舊文明を破壞して、徒らに外來文明の模倣にのみ急なりしの感ありき。其流弊は、今日に至りて事新らしく『建國精神の顯揚』及び『宗教の必要』を絶叫せざるを得ざる立場に至りしを悲しむ。然れども先覺者の既に此に氣附きたるは、恰も山巔に達したるもの、先づ旭光を拜するが如く、一道の光明地上を照すも、蓋し甚だ遲きにあらざるべし。然も此等の叫びは、聲尙微にして一部の有識階級に限られたるの感あり。此に於て吾等は自ら其力の甚だ弱少なるを知ると雖も、一片の丹心自ら禁ずる能はず、此叫びを滿天下に徹底せしめ、以て人心の不安と、社會の動搖とを除去し、轉一歩更に創造の世界へ、其心境を進ましめんと希ふに外ならず。

今回吾等の『新更會』を組織せる本旨は、實に此に在り。而して世に思想善導を目的とせる團體は、其數甚だ多し。今吾等の『新更會』も、蓋し其一ならんのみ。只本會は、單に講話・講演、若しくは宣傳雜誌發刊等を專旨とする機關にあらず。又新たに所謂社會事業を創設せんとするものにあらず。要は會員各自、靜思反省・實踐躬行、以て現代社會の純

化淨化に資せんと欲するのみ、特に記して本會々員諸氏に告ぐ。

昭和三年五月中浣

新更會の使命

總裁　荒木照定

○

本年二月來創立準備に取り掛り、去る六月五日成田圖書館樓上に於て、盛大なる發會式を擧行したる、我新更會の使命に就き、一言を費したい。

現今我國の世相は、頗る不安の狀態に陷りつゝあることは識者の等しく痛歎する所である。然も此事が眞に國民意識として、國民の總意に上つて居るや否や、甚た疑なきを得ない。

曾て我國が明治維新以來、歐米文物の移入に力を致し、上下擧つて今日の文化を實現せしめ、今日の富强を養成した。之れは云ふまでもなく、全國民の向ふ所を明かにし、全國民の總意が、同一方向に一致し、然も夫れが確立不動の精神を以て一貫した、即ち全國民の努力の賜であると信ずるのである。

然るに明治の末葉より今日に至るの間、此國民意識の上に甚だ鮮明を缺き、一種の暗影を生じ來つた感がある。爲めに人心漸く弛緩倦怠の狀を呈し、其當然の結果として、倨傲自尊の風を生じて來た。其間隙に乘じて、外的刺戟は近時彌々强烈を加へ、內的思想は漸次惡化し、今日の如き異常なる、世相の動搖を見るに至つた。

此時に際し、畏くも　今上陛下には、朝見式の際「創造ニ勗メヨ」との御詞を下し賜はつた。此御詞は實に現代及び將來の、我國民の向ふ所を御示しなされた、誠に尊い御詞である。即ち現今の我國は、正に模倣時代より、一歩創造の時代に入り來つたのである。故に吾人は大に此氣運を釀成し、助長し、徹底せしめて、以て國民意識の嚮ふ所を明かにし、社會人心の不安を除去して、玆に新日本の文化を創造建設し、一は以て全國民と與に、永く其慶に賴ることを勗めねばならぬ。

是れ吾々が本會を設立したる第一使命である。

○

我國は東洋の一孤島、永く蓬萊宮裡の甘夢を貪つて居た。然るに現代文明は之を速度文明とも稱すべく、特に交通機關の發達は、陸上に、海洋に、空中に、異常の進歩を促し、今や我國も亦歐米文物の中心地と接近し、如何なる寒村僻邑と雖も、直ちに其刺戟と影響を受くるに至つた。

我國の現狀は實に斯くの如くなるも、然も吾人の實際生活は、彼等の文明と猶ほ相當の隔りがある。此の隔りこそ、我社會相に種々の波紋を畫かしめたる、最大なる基因であると信ずる。

果して然らば此間の融合を計り、彼の長所美點を取り入れて、我實際生活と調和せしめ、接觸せしむることに務めたならば、自然相互間に理解が出來、感情の融和が生れて來るであらう。此理解と融和は、人生平和の最大關鍵で、吾人は社會人心の不安と、動搖とを一掃する爲めに、此點に深甚の考慮を拂はねばならぬ。

而して其目的を達するには、何としても教育の力に俟つ外はない。現今我國の學校教育は、公私共其完備に全力を竭しつゝあるは、吾人の大に意を强ちする所である。然も吾人は尙此基本的教育機關のみを以て、滿足することは出來ない。之が補助機關として圖書の運用發達、夫れと相俟つて成人教育、其他の方法により、最も迅速に、最も確實に、彼我兩者の調和、實際生活の向上を策し、玆に新なる文明の建設、創造に務めんと欲するものである。

是れ本會の國家社會の爲めに盡さんとする、第二の使命である。

更に今一つの問題がある。夫れは『宗教的信念の培養』である。現代我社會人心の動搖は、人間として斷乎たる信念なく、浮草の風に隨ふ如く、安定を得て居らぬからである。其精神の動搖不安は、宗教的信念に住し、宗教的信仰生活を營む外、人生を光明の道途に導き、不安を除去するものはない。

此信仰問題に就ては、我國の現狀甚だ寒心に耐へない。殊に文明國としての我國民の多數は、彼の歐米諸國民に比して此點遺憾ながら頗る遜色がある。

此れ本會が懷ける、第三の使命である。

○

以上の三使命を當面の喫緊問題として、本會は生れ出でたのであるが、更に一言すべきことは、我國の從來採り來れる子弟の教養は、所謂縱の教養である。此縱の教養訓練より、漸く缺陷を現はし來りたる現今の我學校教育に、此際更に橫の教養訓練に力を致し、以て其缺點を補ひ、玆に文化の進運と、現代の要求に副はんとする、即ち本會の設立が夫れである。（創立總會挨拶筆記）

二　會　則

第一條　本會ハ皇國傳統ノ健全ナル思想ト鞏固ナル宗教的信念トノ下ニ國民精神ヲ作興スルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ新更會ト稱ス

第三條　本會ハ第一條ノ目的ヲ達成スル爲メニ左記事業ヲ行フ

一　合宿講習會ノ開設　會員相互ノ精神的團結向上ノ爲ニ

指導者ト會員トノ寢食ヲ共ニスル講習會ヲ毎年二回以上開催ス

二　成人講座ノ開設　會員ノ研究修養ノ爲ニ隨時講演會ヲ開催ス

三　修養講演會開催　會員及一般公衆ノ爲ニ隨時講演會ヲ開催ス

四　新更學院ヲ設置經營ス

五　鄉土史料ノ陳列　史料中文書ニ屬スルモノ又ハ歷史技藝ニ關スルモノヲ努メテ蒐集シ新更會館ニ陳列シテ會員及公衆ノ閲覽ニ供ス

六　雜誌及圖書ノ刊行配布　本會ハ月刊雜誌『新更』及其他ノ圖書ヲ刊行配布ス

七　圖書閲覽及貸出　成田圖書館利用ニ關スル各般ノ施設

八　會館ノ貸與　本會ノ目的ニ適合スル各般ノ集合等ニ本會館ヲ貸與ス

九　其他第一條ノ目的遂行ノ爲ニ必要ナル事業ヲ行フ

第四條　本會ノ會員ハ左ノ三種トス

正會員　成規ノ手續ヲ經テ入會シタルモノ

贊助會員　篤信者ニシテ本會ノ目的ヲ翼贊スルモノ

名譽會員　高僧名士ニシテ本會ノ特ニ推薦シタルモノ

第五條　本會員タラントスルモノハ會員一名以上ノ紹介ニ依リ理事會ノ承認ヲ要ス

第六條　本會ニ左ノ役員及職員ヲ置ク

一、總裁　一名

一、會長　一名

一、理事　若干名（內二名ヲ常任理事トス）

一、參事　若干名

一、評議員　若干名

一、顧問　若干名

一、主幹　一名

一、主事　主事補　若干名（內一名ヲ首席主事トス）

一、書記　若干名

第七條　總裁ハ成田山貫首ヲ推戴ス、會長理事・參事・評議員及顧問ハ總裁之ヲ依囑ス　但理事ハ新勝寺檀徒總代人及新勝寺內ヨリ若干名ヲ以テ之ニ充ツ、主幹ハ總裁之ヲ任命ス

第八條　會長・理事・參事及評議員ノ任期ハ二ケ年トス

第九條　總裁ハ本會ヲ統率シ、會長ハ會務一切ノ處理ニ任ズ理事ハ會長ヲ補佐シテ會務ヲ分掌ス、參事・評議員・顧問ハ總裁ノ諮問ニ應ズ主幹及主事ハ總裁及會長ノ命ニ依リ事業ヲ遂行ス

第十條　本會ノ經費ハ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

第十一條　本會々員ニシテ本會ノ體面ヲ汚損シ又ハ本會ノ目的ニ違背シタル行爲アリタル時ハ理事會ノ決議ニ依リ除名スルコトアルベシ

第十二條　本會々則ノ改正ハ評議員會ノ決議ヲ經ルヲ要ス

第十三條　本會ハ會員二十名以上ニ達シタル地方ニ支部ヲ置ク

支部規則ハ本會々則ニ準ジテ各支部毎ニ之ヲ定メ支部長及支部幹事ヲシテ支部ノ會務ヲ處理セシム支部長ノ任命ハ總裁之ヲ行フ

第十四條　支部長ノ職務權限ハ本會評議員ニ準ズヘキモノトス

第十五條　年一回以上總裁ノ名ニ於テ全國各支部ノ支部長會議ヲ招集ス但シ必要ニ應シ地方別ニ召集スルコトアルヘシ

第十六條　本會ノ本部ヲ千葉縣印旛郡成田町成田山公園內新更會館內ニ置ク

三　役員及職員

總裁　成田山貫主　荒木照定

會長　三橋金太郎

理事（○印常任理事）

○諸岡勝太郎、藤崎公道　土井豐

三橋金太郎　大野市平　川名照通

○淺井照次

參事

諸岡市郎左衛門　渡邊和一　鈴木民治郎

藤崎源之助

評議員

三橋金太郎、山內平治郎　諸岡勝太郎

淺井照次　古矢大助　小野寺弘

關川藤右衛門　藤崎公道　土井豐

鈴木民治郎　川名照通　今澤慈海

大友惟誠　成田善亮　橫田泰邦

大塚篤三　大野市平　木內喜右衛門

高川直三郎　萩原村次　小林照動

三橋吉兵衛　大木健　鈴木五兵衛

飯田照戒　古川與一郎　佐藤靜雄

鈴木勇助　藤本三郎　加藤精彥

神崎照惠

顧問

高井觀海　兒玉九十　宮崎廣

澤田五郎

主幹

神崎照惠

主事（○印首席主事）

○石橋廣　大野政治　岩本俱之

一　小川貞雄　加勢胖　鈴關宥俊

主事補　湯淺豊　海瀬三郎

書記　田代天津　加藤ふみ

（昭和十七年六月三十日現在）

四、設備

敷地坪數　一、八〇〇坪

建物坪數　五七六坪

會館（木造二階建）　二四七・五坪

（舊千葉縣物産陳列館建物を改造したもの）

階上は講堂＝講演・講習會に使用

階下は展觀會等に使用

弘誓寮（木造二階建）　三二八・五坪

此の建物にて合宿講習會・特殊講習會・研究會其の他の行事を行つてゐる。各室内譯左の如し。

階上　靜觀室（四十九疊半）・會議室　洋間（二十四坪）・同日本間（二十九疊）・總戒室（十七疊半）・應接室（九坪・講師室（十二疊半）・宿直室（八疊）・圖書室（四坪）醫務室（十四疊）

階下　合宿室三（六十六疊半）・食堂（三十八疊半）・事務室（十九坪二五）・炊事室（十二坪）・小使室（一疊）・洗面所（八坪）・浴室（六坪）

新更學院教室　二二・五坪

五、支部準則

新更會某支部則

第一條　本支部ハ新更會某支部ト稱シ事務所ヲ某所（某小學校内、某町村役場内、又ハ某方）ニ置ク

第二條　本支部ハ新更會ノ趣旨ニ依リ皇國傳統ノ健全ナル思想ト鞏固ナル宗教的信念トノ下ニ國民精神ヲ作興スルヲ以テ目的トス

第三條　本支部ハ第二條ノ目的ヲ達成スル爲常ニ本部トノ連絡ヲ緊密ニシ會員相互ノ親睦ヲ圖リ講演會、研究會、座談會其ノ他適當ナル事業ヲ行フ

第四條　本支部員ニハ本部發行ノ月刊雜誌「新更」ヲ配布ス

第五條　本支部ハ某市町村居住ノ新更會員又ハ支部役員ニ於テ特ニ推薦シ本部ノ承認ヲ得タルモノヲ以テ組織ス

第六條　本支部ニ左ノ役員ヲ置ク

支部長　一名　副支部長　一名　若クハ二名　支部幹事　若干名（内二名若クハ三名ヲ常任幹事トス）　支部顧問　若干名　支部評議員　若干名

第七條　支部長ハ新更會々則第十四條ニヨリ新更會總裁之ヲ委囑シ本部ノ事務一切ヲ處理ス

第八條　副支部長、支部幹事、支部顧問、支部評議員ハ支部長之ヲ委囑ス

副支部長ハ、支部長ヲ補佐シ支部長事故アル時ハ之ヲ代理ス

支部幹事ハ支部長ノ指揮ニ依リ支部活動ノ主體トナリ支部ノ會務ヲ分掌ス

支部顧問、支部評議員ハ支部長ノ協議ニ參與ス

第九條　本支部役員ノ任期ハ二ケ年トス、

但シ重任ヲ妨ゲズ

第十條　本支部經費ハ本支部員ノ醵出セル部費又ハ篤志者ノ寄附金ニ依リ之ヲ支辨スルモノトス　本支部員ハ本支部費トシテ一ケ年金五拾錢ヲ納付スルモノトス

本支部ハ本支部員ノ納附セル部費中ヨリ一人當リ一ケ年金貳拾錢ヲ本部ニ納附スルモノトス

第十一條　本支部員ニシテ吉凶アリタル時ハ支部長ノ名ニ於テ慶弔ノ意ヲ表スルコトアルベシ

第十二條　本支部ハ年一回總會ヲ開キ會務會計ノ報告ヲナシ其ノ承認ヲ得タル後之ヲ本部ニ報告スルモノトス

第十三條　本支部員ニシテ本會ノ體面ヲ汚損シ又ハ目的達成ニ違背シタル行爲アリタル時ハ役員會ノ決議ニ依リ本部ノ承認ヲ經タル後除名スルコトアルベシ

第十四條　本支部ノ部則變更ハ總會ニ於テ出席會員ノ過半數ノ同意ヲ經タル後本部ノ承認ヲ受クルモノトス

第十五條　本則以外ハ本部會則ノ規定ニ準據スルモノトス

以上

備考（右ハ昭和十二年一月二十日第七回支部長會議席上ニ於テ決議サレタル支部準則デアリマス）

六　支部並びに會員分布狀況

支部並會員狀況

（昭和十七年三月末現在）

支部名	事務所々在地	支部長氏名	支部員數	設立年度
豊住支部	印旛郡豊住村龍台	根本健吉	一七一	昭和五年度

久住支部	同久保村磯部	桧垣省吾	九六	同	同
彌富支部	同彌富村岩富	高石義一	一八七	同	同
船毬支部	同船穂村舟尾	山口撰	一一一	同	同
中郷支部	同中郷村海老川	加藤三郎平	一二一	同	同
根郷支部	同根郷村太田	田中和三郎	一三四	同	同
茨城縣大須賀支部	稲敷郡大須賀村町田	篠原清吉	二五	同	同
更科支部	千葉郡更科村谷富	高橋甲	一一三	同	同
稲敷郡阿波支部	茨城縣稲敷郡防波村	大久保敏一	二五	昭和六年度	同
富里支部	印旛郡富里村久能	藤崎源之助	四一五	昭和五年度	同
遠山支部	同遠山村大清水	清水源治	丸九	同	同
八街支部	同八街町沖小間子	鈴木市作	一六七	同	同
大平支部	山武郡大平村本柏	大木武憲	一三七	同	同
成田支部	同成田町〃〃	大塚篤三	三二四	同	同
本大須賀支部	香取郡本大須賀村前林	香取惣平	二七〇	同	同
飯野支部	君津郡飯野村二間塚	石井長藏	八八	同	同
川上支部	印旛郡川上村大谷流	佐久間義一	三一	昭和七年度	同
八生支部	印旛郡八生村下福田	大澤孝平	二八二	同	同
松尾支部	山武郡松尾町國民學校	古谷喜藤次	六四	同	同
二川支部	同二川村大台	寺内元助	八六	昭和八年度	同
静岡縣藤枝支部	志田郡藤枝町左車	杉村德太郎	六〇	同	同
本埜支部	印旛郡本埜村中根	岩井照	二〇七	昭和九年度	同
大森支部	同大森町大森	小林孟雄	一一九	同	同

大須賀支部	香取大須賀村奈上	釜岡勝躬	一一八	同	同
茨城縣東交間支部	北相馬郡東交間村加納	櫻井忠義	一三六	同	同
橋支部	香取郡橋村石出	岩田正直	一五三	昭和十二年度	同
滑川支部	同滑川村西大須賀	櫻井佐	九七	同	同
阿蘇成支部	印旛郡阿蘇莎阿蘇	山崎四郎	一三五	同	同
南郷支部	山武郡南郷村國民學校	秋庭亮	一六〇	同	同
埼玉縣日勝支部	南崎主部日勝村太井新田	福澤宥眞	一七五	同	同
蓮沼支部	山武郡蓮沼村郵便局	薯塔静	九一	昭和十三年度	同
大總支部	同大總村國民學校	柳橋隣二	五二	同	同
公津支部	印旛郡公津村船形	鈴木勘	二一五	同	同
岩井支部	安房郡岩井町國民學校	鵜田英爾	二四二	昭和十三年度	同
平群郡	同平群村國民學校	相葉喜一郎	二七八	同	同
千代田支部	山武郡千代田村役場	木内菊四郎	一一一	昭和十四年度	同
豐里支部	山武郡豐岡村燕木	高橋安藏	二三〇	同	同
海上支部	銚子市海上町	島田德治	一七六	昭和十五年度	同
豐岡支部	香取郡豐岡村國民學校	伊藤博	一七〇	同	同
片貝支部	山武郡片貝町片貝	鈴木磨史	四八	昭和十六年度	同

四〇　五九三七

第參施設

一講習會

1 聯合支部實務講習會 二泊三日
(一)印旛郡第三支部聯合會女子部 四五名
(二)山武郡第一支部聯合會女子部 六〇名
(三)山武郡第二支部聯合會女子部 五〇名

2 新更女子青年講習會
自昭和十六年十一月二十一日
至同 十一月二十四日 三泊四日

講師

經濟と家庭婦人 三和銀行頭取 岡野清豪先生
臨戰體制に家庭生活 大政翼贊會中央協會議長 高良富子先生
物資愛護と婦人生活 大妻高等女學校長 大妻コタカ先生
國際情勢 横須賀海軍人事部第二課長 松島慶三大佐殿
厚生體育舞踊指導 大日本舞踊聯盟 印牧季雄先生

講習生 一〇一名

3 イ、新生活婦人實務講習會
自昭和十三年七月二十六日
至同 七月二十九日 三泊四日

講師

戰時食糧と農產加工 多古農學校長 永野健先生
スフの洗濯法 和洋女子專門學校講師 山崎敏一先生
新禮法講習 千葉縣立家政女學校教諭 鹽田節子先生
衛生講話 醫學博士 渡邊由松先生
講習 一〇八名

ロ、新更婦人實務講習會
昭和十七年三月十六日
十九日 三泊四日

講師

戰時下の家庭料理 元女學校長 高槻春野先生
婦人と衛生 縣衛生課醫學博士地方技師 藤田靜夫先生
衣料切符の上手な使ひ方 大政翼贊會 森崎善一先生
禮法 千葉縣農立家政女學校教諭 鹽田節先生
マッサージ 成田高等女學校囑託 酒井泰作先生
國際情勢と帝國海軍 海軍少佐 日比野寛三殿

講習生 九二名

4 新更中堅幹部練成講習會
昭和十七年自二月二十一日
至二月二十四日 三泊四日

講師

大東亞共榮圈の理念 國民新聞社代表取締役 田中齊先生
大東亞戰爭と帝國の將來 海軍中佐 澤田倉三殿
縣下青壯年ノ指導原理 千葉縣社會教育課長 近藤唯一先生
決戰體制と十產 千葉縣農事試驗所長 伊藤祐信先生
戰時食糧確保實習 千葉縣立多古農學校長 永野健先生

講習生 八七名

5 一夜合宿講習會
イ、支部關係 一六支部

一講演會

1 支部講演會

受講生 一、二一六名 平均七六名
ロ、新更學院生徒
一四回 八二七名 平均五九名

6 出張合宿講習會 五回
藤枝支部外四支部(藤枝、豊里、大總、平詳)
延人員 三〇五名 平均六一名
出張講習會 九支部 十回(富里、二川、飯野、川上、大總、千代田、阿蘇、大平、根郷)
延人員 九七一名 平均九七名
スフ洗濯 廢物染色 國民禮法
代用食農產加工等

會名	期日	支部名	聽衆	講師	演題
支部出張講演會	昭和十六年四月二日	二川	三五〇	横須賀鎭守府人事部第三課長 海軍大佐 大石堅四郎	國際情勢ト帝國海軍
同	四月三日	豊岡	五〇〇	日本宣傳文化協會第一部長 松本淳三先生	大東亞共榮圈に就いテ
同	四月二十九日	豊住	一八〇	日本宣傳文化協會第二部長 松本淳三先生	國際情勢新體制
同	七月七日	藤枝	一〇〇〇	日本宣傳文化協會第一部長 松本淳三先生	大政翼贊會ノ根本理念

同	八月十八日	飯野	七五	縣農會技手	山田先生	農業立國について
同	九月七日	阿蘇	六〇〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		獨ソ戰爭ト近東情勢
同	九月十日	平群	一四五〇	代議士　吉植　庄亮先生		食糧增產について
同	九月廿九日	川上	一五〇	主幹　神崎　照惠先生		母性愛ト教育
同	十一月二十五日	八街	五五〇	陸軍少將　福井浩太郎閣下		戰場を偲びて
同	十二月十九日	川上	五〇〇	陸軍少將　福井浩太郎閣下		戰場を偲びて
同	十二月十九日	千葉縣大須賀	一二〇〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		大東亞戰爭と國民の決意
同	十七年一月十日	南郷	八〇〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		大東亞戰爭について
同	一月十一日	大平	六五〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		大東亞戰爭について
同	一月十七日	千代田	八〇〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		大東亞戰爭について
同	一月十八日	滑河	九〇〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		大東亞戰爭について
同	一月二十三日	二川	四五〇	新更會主事　岩本　俱之殿		大東亞戰爭と婦人の決意
同	二月九日	遠山	八五〇	海軍大佐　松島　敬三殿		大東亞戰と帝國海軍
同	二月十五日	片貝	一〇〇〇	横須賀人事部　海軍大佐　松島　慶三殿		大東亞戰ヒ帝國海軍
同	二月十九日	大總	五〇〇	海軍少佐　日比野　寛三殿		英米擊滅と帝國海軍
同	三月八日	海上	四五〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		大東亞戰と帝國陸軍
同	三月九日	蓮沼	三〇〇	陸軍少將　坂西　平八閣下		大東亞戰と國民の覺悟

2　聯合支部講演會

(一)山武第一　講師　陸軍少將　坂西　平八閣下
(二川、大總、豐岡、松尾)　六〇〇名
期日　昭和十六年八月廿六日
會場　二川村國民學校講堂

(二)山武第二　講師　海軍中將　和波　豐一閣下
(大平、蓮沼、南郷)　五〇〇名
期日　昭和十六年八月廿日
會場　大平村國民學校講堂
横須賀鎭守府人事部

(三)印旛第一講師　海軍大佐　松島　慶三殿
期日　昭和十六年七月廿五日
第一回(富里、成田、公津、久住、八生、遠山、中野、豐住、滑川、千代田)　六〇〇名
會場　成田新更會館
第二回　講師　海軍大佐　廣瀨　彥夫殿
期日　昭和十六年二月廿八日　七五〇名
會場　成田町新更會館

(四)印旛第三　講師　日本宣傳文化協會
第一部長　松本　淳三先生
(八街、彌富、根郷、更科、川上)　四五〇名
期日　昭和十六年八月廿一日
會場　彌富國民學校講堂

(五)香取第一　講師　海軍大佐　松島　慶三殿
(本大須賀、大須賀)　五〇〇名
期日　昭和十六年九月十三日
會場　本大須賀村津浦國民學校講堂

(六)香取第二　講師　海軍中將　和波　豐一閣下
(橋、豐里、海上)　六〇〇名
期日　昭和十六年八月廿九日
會場　豐里國民學校講堂

同	三月十五日	二川	一〇〇	日本宣傳文化協會第一部長　松本　淳三先生	南方資源並に民族と指導理念
計		二二	一二三、五五	平均　五六二	

三映畫會

支部關係

期日	支部名	會場	觀覽者數	映畫班	備考
昭和十六年四月一日	大平支部	國民學校	九五〇名	海軍班	1、フイルム種類 海軍爆撃隊九卷 2、海軍空襲部隊 3、マー坊の鐵血陸戰隊 4、海南島攻略戰 5、ニユース 以上
同 四月二日	二川支部	國民學校	一、二〇〇名	同	
同 四月三日	豊岡支部	國民學校	一、〇〇〇名	同	
同 九月六日	富里支部	國民學校	一、二〇〇名	同	1、フイルムの種類 潜水艦一號 2、海國日本 3、マー坊の鐵血陸戰隊 4、歐洲動亂と列强海軍
同 九月七日	富里支部	畜産組合廣場	二、〇〇〇名	同	
同 九月八日	蓮沼支部	國民學校	一、三〇〇名	同	
同 九月九日	南郷支部	國民學校	一、四〇〇名	同	
同 九月十日	更科支部	國民學校	五〇〇名	同	
同 九月十一日	平群支部	國民學校	一、二〇〇名	同	フイルム種類 武器なき戰、マー坊、海國日本、潜水艦1號
同 五月十五日	藤枝支部	公會堂	九〇〇名	同	
同 九月廿日	八街支部	郵便局側の廣場	五〇〇名	同	フイルム種類 お猿三吉奮闘記、艦船生活、海軍爆撃隊
同 九月廿二日	川上支部	國民學校	一、〇〇〇名	同	歐洲大戰と列强國、海軍爆撃隊
同 九月廿三日	根郷支部	産業組合廣場	六〇〇名	同	

同 九月廿四日	久住支部	國民學校	八〇〇名	同	同
同 九月廿五日	千代田支部	國民學校	六〇〇名	同	同
同 十一月十五日	大須賀支部	青年學校	一、〇〇〇名	同	同
同 十一月十六日	豊岡支部	國民學校	一、一〇〇名	同	同
同 十一月十七日	飯野支部	國民學校	一、二〇〇名	同	同
同 七月八日	香取第一ブロツク	橘國民學校	一、三〇〇名	同	フイルム 潜水艦1號その他
同 七月九日	香取第一ブロツタ	豊里國民學校	一、二〇〇名	同	同
同 七月十日	海上支部	國民學校	一、〇〇〇名	同	同
同 十七年三月廿五日	阿蘇支部	國民學校	一、〇〇〇名	同	フイルム種類 赤道越えて、潜水艦
同 三月廿六日	船德支部	國民學校	八、〇〇〇名	同	艦船勤務 大平洋行進曲
同 三月廿七日	本埜支部	國民學校	一、三〇〇名	同	同
同 三月廿八日	滑河支部	馬市場	二、〇〇〇名	同	同
同 三月廿九日	達山支部	國民學校	一、六〇〇名	同	同
同 三月廿日	松尾支部	青年學校	六〇〇名	同	同
計	二七		二九、二五〇 一、八三〇		